

平成 28 年度

年 次 報 告 書

神 戸 常 盤 大 学
神戸常盤大学短期大学部

刊行の辞

大学の自己点検評価は種々の教育改革とともに急速に広まり、外部評価機関の整備とあいまって、いまや国・公・私立を問わず大学の文化として定着したといつてよいでしょう。学びの質保証、教育改革の実効化、研究水準の向上、社会連携の強化などをとおして大学の価値を高めるためには、自己点検評価を続けることが必要だという認識は、多くの大学構成員のあいだで共通のものとなってきました。18歳人口が減少し、大学の特色化、個性化がこれまで以上に求められる昨今、周到な点検評価によって内部質保証を確実に重ね、それを基礎に大学の魅力と独自の方向をつねに明確にしていく必要があります。

本学は、平成20年に短期大学から4年制大学に改組しましたが、すでに平成4年から自己点検評価委員会を設置し、平成18年度からは各学科・委員会・学内組織および各教員の活動等の報告を「年次報告書」として刊行し、平成25年から本学ホームページに公開してきました。こうした持続的な取り組みと学内外の意見に耳を傾けようとする姿勢が、この間の学部学科改編、教育改革などの実効化を支えてきたことはいまでもありません。

ところで本学はいま、一つの重要な時期を迎えています。特色化のための課題として、子育て支援センターを中心とした地域活動の強化がありますが、もう一つは、平成26年度から3年をかけて教育イノベーション機構を中心に取り組んできた教育改革がひとまず完成し、今年度からその検証の段階に入ったことです。豊かな知性と感性を備えた専門職業人を育成することを目標とする教養教育を中心とした改革が、今後どのように専門教育を支えていくのが焦点になると思います。この課題は多方面にかかわるものと思われませんが、それだけに各学科、関係する委員会等のあいだでの連携が期待されます。本書がそのための材料となることを願っています。

最後に、本学では今年度から副学長を委員長とする自己点検評価委員会が中心となって、点検評価をめぐるPDCAサイクルをこれまで以上に適切に機能させます。点検評価そのものの質保証を図りたいと考えています。学内外の方々のご協力をお願いするとともに、忌憚のないご意見をお待ちしています。

平成29年6月

神戸常盤大学
神戸常盤大学短期大学部
学長 濱田 道夫

目 次

頁

刊行の辞	1
------	---

第1部 各組織年間活動報告書

I. 学科別 年間活動報告書

1. 保健科学部 医療検査学科	4
2. 保健科学部 看護学科	8
3. 教育学部 こども教育学科	12
4. 短期大学部 口腔保健学科	15
5. 短期大学部 看護学科通信制課程	19
6. 教育イノベーション機構	23

II. 学内組織別 年間活動報告書

1. 入試委員会	26
1-2. 入試委員会高大連携部会	29
2. 広報委員会	30
3. 教務委員会	31
4. 学生委員会	34
5. 自己点検・評価委員会	36
6. FD委員会	37
7. 図書・紀要委員会	41
8. 研究倫理委員会	43
9. 個人情報保護委員会	46
10. ハラスメント防止対策委員会	48
11. 危機管理（災害）委員会	49
12. 就職委員会	51
13. 国家試験対策委員会	59
14. 臨地実習委員会	67
15. 通信教育委員会	75
16. 遺伝子組換え実験安全委員会	78
17. 健康保健センター	79
18. 神戸常盤ボランティアセンター	84
19. 地域交流センター	87
20. 国際交流センター	89
21. 教職支援センター	91

22. K T U 大学研究開発センター	9 3
23. 口腔保健研究センター	9 5
24. 神戸常盤大学子育て支援センター「子育て広場えん」	9 7
25. ライフサイエンス研究センター	9 8
26. 事務局	1 0 0

第 2 部 本年度の「学生による授業評価」学科別のまとめ

第 3 部 「卒業生へのアンケート調査結果」報告

第1部 各組織年間活動報告書

I. 学科別 年間活動報告書

1. 保健科学部 医療検査学科(M科) 年間活動報告書

学科長 坂本 秀生

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	96	96	3	0	0	0	
2年	94	94	1	1	0	0	
3年	95	92	0	0	0	0	
4年	93	101	0	7	15	0	84
休退学等の理由：退学:進路変更							
*在籍者数はH28.5.1現在、他欄は年度中の動向							
学科目標資格取得状況							
臨床検査技師国家試験	受験者数	84人	合格者数	74人	合格率	88.1%	
細胞検査士認定試験	受験者数	11人	合格者数	11人	合格率	100%	
	受験者数		合格者数		合格率	%	
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	79 (94%)	進学者数 (率)	3名 (3.6%)	その他 (率)	2 (2.4%)		
本年度の課題							
1. 全学年を通して、社会人としてのマナーの向上 2. 学生個々にあった学習支援の実践 3. 教育改革に向けた教員同士の連携力強化							
本年度の目標							
1. 言葉使いを含め、日々の生活を含めた社会人としてのマナー意識を高める。 2. 成績不振者、学習意欲を失いつつある学生へのサポートを含めた学習支援。 3. 教育改革に向け、授業時間数削減を含めたカリキュラムの見直しを行う。							
主な活動内容							
1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）： <ol style="list-style-type: none"> 1. 年初の学科ガイダンスで学生に対し、社会人としてのマナーの重要性を伝えると共に、教員も学生とのやり取りを行う際、学生に注意を促すよう確認した。また、学科長からポータルシステムを通じ、折りに触れ注意喚起を行った。その結果、少なくとも学科長室を訪れる学生達は言葉使いに留意している様子を感じ取れた。このような取り組みは単年度だけでは効果が薄いので、継続的に注意喚起を促したい。 2. 成績不振や学習意欲を失いつつある学生の特徴として、遅刻や欠席が増える傾向がある。これらの情報を教員で共有し、早期に対応を行った。特に欠席が多い学生に 							

は、クラス担任を中心にカウンセラーとも連絡を取りながら対応を行った。【根拠資料:学科会議議事録】

3. 大学全体で行う教育改革に対し、教務委員を中心に低学年時から各科目のつながりを再確認しながら、カリキュラムの見直しを精力的に学科内で行った。その過程で入口である入試委員、出口である就職委員や国試対策委員の意見も取り入れ、学生負担を減らしながら、学生に沿った授業形態を組めないか話し合いを繰り返した。

【根拠資料:医療検査学科会議、教授懇話会議事録】

目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

2. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

1. 教科運営

学内にて各教科間連携を視覚的に分かりやすく出来るよう、またカリキュラム改正を効果的に行えるよう、カリキュラムマップの作成を行い教員同士で科目のつながりを確認しながらカリキュラム改正に臨んだ。非常勤講師には初回授業時に学科長がお願いの挨拶を行い、特に本学科での授業が初めての場合、学科のディプロマポリシーを示しながら、学科の教育方針の説明をした。

実習に関しては学科長が不定期に実習の様子を確認し、課題点があるようなら実習担当者として話し合いを持った。臨地実習実習に関しては、医療検査学科専任教員全員で分担し、各病院へのお願いと挨拶と実習巡回及び病院との連絡を密に行った。【根拠資料:医療検査学科会議録】

2. 学生支援

新入生への学習支援

基礎学力不足気味の者は高校時に選択してない科目でつまづくことが多いので、基礎学力テスト結果も参考にし、自由科目の基礎数学・化学・生物等を履修するように指導した。また早期に学習困難を把握するため、1年生には入学後と後期にも個人面談を行った。【根拠資料:医療検査学科会議録、面談記録】

未修得単位の多い学生への対応

個別面接を2年生には後期開始後、3年生は時期を選んで全員に行い、適応状態や進路志望等の確認をした。4年には講師以上の卒研担当教員が5～7名程度の学生を受け持ち、面接を適宜行った。担任は上記の面接以外に休みが多い学生に声かけ、個別面談で抱える問題を教員が対処するように務め、面談結果は学科で共有した。これに加え、未修得単位の多い学生にはサポート教員制度を設け、担当教員が履修指導を含めた学習指導を行った。【根拠資料:医療検査学科会議録、サポーター対象学生名簿】

学生生活に問題のある学生への対応・支援

前学年までの成績結果、出席状況等を学科で共有し、学科会議にて学力その他の実態を報告し合い、問題や課題ある学生への対応法を共有し、可能な限り支援した。またカウンセラーや学生相談室とも連携し、保護者への連絡時期のタイミングもはかりながら、個別指導を行った。【根拠資料:医療検査学科会議録、面談記録】

臨床検査技師国家試験対策

成績不審者に対し、個別面談を行いながら国試対策を行った。後期は全教員が過程外で多数の時間を要し補習を行った。その結果第63回国家試験合格率の内訳は本学新卒者88.1%であり、全国平均の78.7%を大きく上回った。【根拠資料:医療検査学科会議録、国試対策委員会議事録】

就職・進学支援

就職委員会が中心となり各学年でガイダンスを行い、特に3年からはガイダンスの頻度を挙げ、就職指導を行った。また、卒業生によるキャリアサポーター制度を利用し、特に3年生を中心に卒後の活躍をイメージし、自身のキャリア・デザインを考える機会を設けた。進学指導に関しては頻繁に個別面談し、進学先探し及び試験対策を伝え、大学院に2名が進学した。【根拠資料:就職委員会報告】

3. FD への取り組み

学生による授業評価への対応

授業評価が極端に低い教員と学科長が対応を協議した。

再履修率の高い科目

該当科目では教員が個別対応を行うなど、対応している。

学科内FD研修

学科内FDとして、これまでの実践も含めたデジタルコンテンツを用いた授業の工夫とし、学科教員が授業へどのように取り入れることができるか意見交換を行った。また実習を中心に公開授業として配布資料や実習準備、実習後の確認方法につき見学を行い教員が授業を評価した。【根拠資料:医療検査学科会議録、学科FD報告】

3. 社会活動、研究活動、など:

1. 社会活動

臨床検査学教育を行う学校が加盟する臨床検査学教育協議会が年に1度開催する「臨床検査学教育学会学術大会」の第11回大会幹事校を本校が務め8月31日～9月2日に本学および神戸国際展示場にて開催した。大会準備から当日まで学科教員が一丸となり成功裏に終えた。

兵庫県臨床検査技師会（兵臨技）の公益活動に積極的に参加し、「全国検査と健康展」の兵庫会場として本学を提供し、臨床検査技師免許を有した教員が協力した。さらに、兵庫県が行う「健康福祉まつり」にも臨床検査技師免許を有した教員が本校の研究資材を用いて協力した。

日本臨床検査医学会が行う熊本地震での臨床検査支援活動に際し、学科長が「熊本地震対策委員会」副委員長として支援活動に関わった。

研究活動

学外競争的研究費として、科研費申請に多くの教員が申請し、3名が採択されている。学内のテーマ別・ジョイント研究は8件が採択された。それらの成果を国内だけでなく国際発表、英文誌への投稿を行うなど成果の公表も実践している。また産学協

同研究として「兵庫県 COE プログラム推進事業」の応用ステージ研究にも 1 件採択された。学内研究費として、テーマ別・ジョイント研究は 4 件が採択された。
その他にも受託研究費を外部から獲得するなど、研究活動も精力的に行っている。

今後の課題

1. 社会に求められる人材の育成
就職先からは、社会人としての基本が求められる。教育改革により初年度でその基礎を築く機会が設けられるが、学年全体を通してそのような学生の育成に取り組む。
2. 学力不足、未修得単位の多い学生へのサポート
学生個々の事情により、原因が異なるので早めに対応出来る体制を設け、学生にあったサポートを行えるように心がける。
3. 医療検査学科の将来を考える
関西圏に臨床検査技師養成校が増え、全国でも毎年増加している。また出生者数の減少もあり、入学生の質が変わる可能性がある。そのような状況に対応出来るよう、魅力ある本学科の将来を見据えた学科運営を行う。

2. 保健科学部 看護学科(N科) 年間活動報告書
 学科長 長尾 厚子

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	82	82	0	0	0	0	
2年	85	86	1	0	0	0	
3年	89	86	0	0	0	0	
4年	90	93	1	0	5	0	
休退学等の理由： 進路変更、体調不良 *在籍者数はH28. 5. 1現在、他欄は年度中の動向							
学科目標資格取得状況							
看護師国家試験受験資格	受験者数	86名	合格者数	81名	合格率	94.2 %	
保健師国家試験受験資格	受験者数	26名	合格者数	25名	合格率	96	
養護教諭免許取得	取得者数	8名 (内就職者3名)					
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	83名 (97.6%)	進学者数 (率)	1名 (1.2 %)	その他 (率)	1名 (1.2 %)		
本年度の課題							
1. 教育イノベーション機構の教養教育の改正に伴い、本学科のカリキュラム点検を行い 卒業時の到達度との関連等を、検証していく。 2. 学科の将来的展望内容を検討し、今年度は看護学科教授会を中心に以下の2つの課題を検討する。 (1) 「大学院設置の構想」を検討し、その妥当性等の情報分析を行う。 (2) 「編入学」に関する学士入学の検討を行う (入試広報委員会との情報連携)。							
本年度の目標							
1. 教育イノベーション機構の教養教育の改正に伴い、本学科のカリキュラム点検とともに 教育内容の精選を行い、本学の教育改革の推進に寄与する。 2. 本学科カリキュラム運営による教授・学修過程の成果として、看護師・保健師の国家試験の結果、全員が合格基準に達する。 3. アドミッションポリシーに基づく資質の高い入学生確保の維持 (近隣看護系大学の増設の中、本学科は高い受験数を維持しており、その継続) 4. 大学院設置構想について、看護学科の将来構想を考える。 5. 「編入学」に関する学士入学を検討する。							
主な活動内容							
1. 目標達成に向けた活動内容・結果 (根拠資料) : 1) 教育イノベーション機構による基盤教育科目の決定に伴い、看護学科カリキュラムを見直し、「看護学科履修要領 (細則)」の見直しを行う。また、留年生、編入生の履修の進捗についても検討する。【学科会議議事録、総括学科会議録】							

2) 本年度の国家試験について

国家試験の成果は、看護師国家試験では合格率 94.2%で、全国平均 88.5%（既卒者を含む）を大幅に上回った。不合格は5名であった（昨年度合格率不合格5名）。不合格者の自己採点上の得点率を分析してみると、2人が必修問題、3人が一般・状況設定問題において、僅差で合格基準に達していなかった。これらの学生は、学修への取り組みに時間を要する傾向がみられており、4年次当初から個別指導を行い、本人も真剣に取り組んでいたのであるが、結果として時間量不足が影響したものと思われる。受験生全体の正答率は、小児看護学、在宅看護学以外はすべて70%以上に達し、高い評価となっている。また、専門基礎分野の疾病の成り立ちの正解率が低く、次年度の指導強化が必要である。既卒生の合格率は66.7%であったが、昨年度の卒業生4名は全員合格であった。2年目以降の卒業生への支援が必要である。保健師国家試験は合格率96.2%（昨年88.5%）と成果をあげており、次年度も支援を継続していく。

【学科会議議事録「国家試験結果の資料」、総括学科会議録】

3) 応募者数の増加と、資質の的確な選抜に関しては、従来からオープンキャンパスで、本学科の教育内容を丁寧に伝えていくこと等の継続と、カリキュラムポリシーに基づいた的確な教科運営により、ディプロマポリシーの確実な到達を導くことで、結果に繋がると考えられ、実践してきた。今年度の応募総数は、401名で、昨年度より1名減少している。これには県内に1大学の 신설、さらに全国的にも看護系大学が激増し、かつ18歳人口の減少等が影響しているが、看護系大学を取り巻く現状の中、健闘していると思われる。しかし、合格者に対する入学者の割合は昨年度よりも増加し、全体の歩留まり率が高くなっていること、受験生の高校評定値も高くなっていることから、いわゆる偏差値が高い層が増えており、それに伴い基礎力テストに対しても高い学力保持層が増していることがうかがえる。さらに一般入試の歩留まりは、昨年に続き高く、「本学科を選択しての入学」という応募スタンスが確立し始めている印象を受ける。【看護学科総括会議議事録、入試広報委員会選抜試験総括資料】

4. 大学院設置構想について

平成27年度より継続検討課題として、今年度も含め、学科教授会を中心に将来構想検討を計6回にわたって学習会と検討会を実施し、学科会議で報告した。方向性として、医療の将来像が地域完結型と予測される中「在宅看護」に軸を置く大学院、社会人のみでなく学部生がストレートで進学できる可能性についてなど、収集資料を基に検討した。

【看護学科教授会議事録、学科会議議事録】

5. 「編入学」に関する学士入学について

全国の看護大学における課題でもあり、全国看護系大学協議会、私立看護系大学協会等の情報収集の段階であり、具体的な検討は今後の課題である。

【看護学科教授会議事録、総括学科会議録事録】

目標達成度の評価：1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

1. 教科運営（授業運営）（1）教科運営に関しては、各専門領域（教養・専門基礎領域、基礎看護学、健康支援看護学、母子支援看護学、療養支援看護学）の教授が主宰する領域会議（月1回程度）で、教育内容等の検討を行っている。さらに学科会議（月1回）において、必要時、検討を行い、年度末には総括学科会議を設け、各専門領域からの教育評価（総括）を行った。また看護学科の総括的な運営においては、看護学科教授会（月1回）において審議検討し、教科運営にあたっている。【根拠資料：領域会議議事録、学科会議議事録、看護学科教授会議事録】（2）非常勤講師への対応は、学期初めと終わりに、学科長が教育内容と、昨年度の成果に関して講師との面談を行った。必要時、授業展開のサポートを教務委員が行っている。【根拠資料：学科会議議事録「非常勤講師との対応」】（3）臨地実習科目の運営に関しては、「臨地実習委員会」が中心となり、実習配置計画や実習要領の検討、さらには「臨床指導者研修会」の開催等と、実習施設との連携を密にし、円滑な運営を意図した。【根拠資料：臨地実習委員会議事録、学科会議議事録、学科教授会議事録】

2. 学生支援（1）学生の学修支援に関しては、学生個々のニーズに応じてチューター教員が支援し、クラス担任、さらに、各専門領域の授業担当者が、可能な限り学生個々のレディネスに応じて対応できるようにしている。また大学生生活全般において、特に地方出身学生の大学生生活の支援として、チューターの役割が大きく効果もあげており、今年度の退学者は全学年で2人と、全国平均に比べて少数にとどまっている。国家試験対策は、対策委員会の活発な活動により、学習会を設けたり、模擬試験に挑戦したりと、さらには教員による補習等により、成果を上げている（前述）。就職支援に関しては、就職委員会の活動により、病院・保健所等への希望者は83名（内保健師として5名）であり、100%の内定であった。（養護教諭に関しては、8名中3名が内定。）

実習病院への就職は、今年度も全病院に卒業生が1人以上決定している。

3. FD活動 学生による授業評価の結果は、教育評価の観点から、学科総括会議で報告し、意見交換し、各教員の教育力を高めるために活用されている。また、学科内の組織的なFD活動としては、「主体的かつ深く思考する学生を育成するための教育技法」として学科内の教員が模擬授業を実施し、意見交換を通して自己の教育技法を再考する機会とした。さらに、大学教育の特性に応じた指導方法等を実習指導者と共に検討し、指導力を高めることをねらった臨床指導者研修会において（3月実施、テーマ「患者に必要な看護を考えることのできる学生を育てる—現代学生の気質を考える」で、本学教育学部の光成教授の基調講演に続きグループワーク。参加者68名、教育側と臨床側の交流を図った。

【総括会議議事録、臨地実習委員議事録】

3. 社会活動、研究活動、など：

1) 社会活動：蓮池婦人会のデイサービス・介護プログラム事業には、述べ4名の教員健康相談・講義等を実施し、58名が参加している。さらに看護協会本学拠点「まちの保健室」活動では、述べ22名の教員が計4回実施し、総計107名の参加が見られた。高大連携では県立明石南高校の「医療入門」の講師として4名の教員が協力、同じく東灘、三木北、社高校にも連携授業を実施したが、今後、明石南、社高校への協力を見直す時期とな

っている。【総括学科会議議事録】 さらに、看護系大学との組織的連携においては、日本看護系大学協議会・日本私立看護系大学協会・全国保健師教育機関協議会・日本養護教諭養成大学協議会に加盟しており、それぞれの総会に関係教授を参加させ、連携を深めた。また県内看護系 大学協議会には、2 回の会議に学科長と、地域看護学教員が参加している。 2. 研究活動：科研費の応募に積極的に取り組み、今年度 1 件が採択されている。また学内のテーマ別研究や神戸常盤学術フォーラムに発表、その他看護系の学会等に多数の研究発表を行っている。【根拠資料：学科会議議事録、学科教授会議事録、学科総括会議議事録】

今後の課題

1. 教育イノベーション機構による教育改革の進捗状況による学生の主体的な学習力を見守り、看護学科カリキュラムの深化との関連性を見る。
2. 本学科カリキュラム運営による教授・学修過程の成果として、看護師・保健師の国家試験受験の結果、全員が合格基準に達する。
3. アドミッションポリシーに基づく資質の高い入学生確保の維持（近隣看護系大学の増設の中、本学科は高い受験生数を維持しており、その継続）。

3. 教育学部 こども教育学科(E科) 年間活動報告書

学科長 大森 雅人

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	86	86	5 (内除籍1)	1	—	—	—
2年	84	84	3	1	—	—	
3年	92	89 (内復学1)	3 (内除籍1)	1	—	—	
4年	89	89 (内過年度2)	3 (内過年度1)	3 (内過年度2)	1	—	84
休退学等の理由： 退学：進路変更、体調不良（心身とも）、家庭の事情 休学：進路変更、体調不良 <p style="text-align: right;">*在籍者数はH28.5.1現在、他欄は年度中の動向</p>							
学科目標資格取得状況							
保育士資格	70名	公立保育士正規採用 6名					
幼稚園教諭一種	71名	公立小学校正規採用 8名（希望者27名）					
小学校教諭一種	39名	県・市・町の外郭事業団正規採用 3名					
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	80名 (95.2%)	進学者数 (率)	1名 (1.2%)	その他 (率)	3名 (3.6%)		
本年度の課題							
① 5期生からの適用となる新カリキュラムを円滑に遂行する。 ② 新カリキュラムとコース制の導入について、社会の情勢、学生の実態に照らし合わせて、初年度から検証を開始する。 ③ 旧カリとなる2～4期生の単位取得状況を把握し、卒業に不備のない体制を保持する。 ④ 教養科目について、全学的な体制と学科のオリジナリティを効果的に接合していくカリキュラムを構築する。 ⑤ 今年度補充しきれなかった教員体制を整える。							
本年度の目標							
① 5期生から適用となる新カリキュラムとそれに併せて導入したコース制について、円滑な運営を目指す。 ② 新カリキュラムとコース制の成果を検証するために、外部環境の分析や学生の実態把握を開始する。 ③ 旧カリキュラムで学ぶ2～4年生について、卒業まで不備の無い体制を維持する。 ④ 全学的な基盤教育科目改革の取り組みと連携して、新しい基盤教育カリキュラムの構築に寄与する。 ⑤ 昨年度からの継続課題として教員体制の点検と整備を目指す。							

<p>主な活動内容</p> <p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>①新カリキュラムとコース制に関して、1年次は共通カリキュラムであり、履修科目等はコースによる差は無いこともあり、円滑な運営ができた。その中で、ゼミ科目（基礎研究演習Ⅰ）では、コースに則した内容で実施して、2年進級次のコース確定に向けての意識形成を行った。その結果、自己の適正等を考慮してコース変更する学生が5名いた。（学科会議議事録、新2年生クラス名簿参照）</p> <p>②コース制や養成カリキュラムの成果に、大きな影響を与える教員養成課程等の動向に関して、情報を収集して学科内で共有を図った。また新カリキュラムで学ぶ1年生の動向を学科会で共有した（課題がある場合は必要に応じて対応策も検討した）。（学科会議議事録）</p> <p>③新カリキュラムに移行した1年次開講科目に関して、旧カリキュラムにおいて単位修得ができなかった学生ための科目読み替え表を作成した。旧カリキュラムで学ぶ2～4年生に関して、履修上に課題のある学生などの情報を学科会で共有して、必要に応じて対応策を講じた。（学科会議議事録）</p> <p>④学科会、教務委員会、教育イノベーション機構との合同プロジェクトチーム、学長会議等に、学科教員が参画して基盤教育のカリキュラムの構築に寄与した。基盤教育に関するカリキュラムは完成し、平成29年度から実施されることとなった。（学科会議議事録、教務委員会議事録、学長会議記録、教授会議事録）</p> <p>⑤補充人事に関しては、外部要因の見極めが困難であり（教員養成課程再課程認定の方針等が不確定）果たせなかったが、学科教員の職位のバランス等を考慮して昇任人事の申請を行った。（学科教授会議事録）</p> <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <p>1) 教学に関する事項の運営（上記 a で記述した内容以外）</p> <p>① 非常勤教員への対応</p> <p>教務委員から、授業運営にかかわる注意依頼事項の説明と書式による欠席状況の報告を依頼している。その他必要に応じて随時学科長、関連科目担当教員、実習関連科目助手が対応している。（学科会議議事録・教務委員からの書類と様式参照）</p> <p>② 実習科目の運営</p> <p>臨地実習委員会を中心に、各実習の効果的運用について協議した。今年度が初めてとなる1年次科目で基礎研究演習Ⅰにおける見学実習についても、希望コースを踏まえての配置を行った。保育士養成に関わる実習については近畿厚生局の指導に基づいた内容を臨地側と共有し、教育実習についても、年2回神戸市教育委員会と協議会で意見交換している。（実習委員会議事録、教員の資質向上神戸市連絡協議会資料参照、学科会議議事録）</p> <p>③ 新規開講科目（複数担当）の教育内容の検討</p> <p>新カリキュラムの次年度開講予定科目のうち、複数担当については、学科内で担当者によるプロジェクト会議を開催して、教育内容の検討を実施し決定した。この過程を経ること</p>

<p>で、新カリキュラムのねらい等に関する共通理解も得られた。（プロジェクト会議記録、学科会議議事録）</p> <p>2) 学生支援</p> <p>① 1年生は4名のクラス担任による面談、2年生は全教員による個人面談、3年生はゼミ担当教員による個別面談で、適応状態や進路志望等の確認をした。4年生については、採用試験対策として、個別にその都度学科教員だけでなく、教職支援センター委員、キャリア支援課委員の力を借りながら何度も面接を重ねた。（学科会議議事録、教職支援センター会議資料参照）</p> <p>② 上記以外に、欠席が目立つ学生については、担任が個別に面談を重ね、学科会議で共有している。また未修得科目の多い学生も、担任が呼び出して指導をしている。（学科会議議事録）</p> <p>③ 保護者懇談会（1年・3年の保護者対象）を年度末に開催し、卒業生進路先状況を報告した。また学生の進路支援についての取り組みを説明し連携を深め、学生のキャリア支援体制を強化した。（案内状・アンケート参照、学科会議議事録）</p> <p>④ 授業料滞納学生について担任が担当し、学科会議で共有している。（学科会議議事録）</p> <p>⑤ 初の卒業生となった1期生を中心としたホームカミングデイを開催した。これにより、卒業生の動向把握やアフターケアを行うことができた。（学科会議議事録）</p> <p>3) FDへの取り組み</p> <p>① 授業評価に基づき、各教員が自己の授業の改善に努めている。（授業評価報告書）</p> <p>② 学科FDについて、FD委員会の取組と連携して、教員相互の授業参観を実施した。（公開授業見学記録参照）</p> <p><u>3. 社会活動、研究活動、など：</u></p> <p>① 科研費は研究代表者として1名が新規に採択され、2名が研究継続中であり、1名が共同研究者として研究継続中である。テーマ別研究には3件が採択されており、うち1件は新規に設定された学科研究サポートである。（教授会議事録）</p> <p>② 幼稚園との連携 ときわキッズクラブの開催（放課後専任教員の専門性を活かしたプログラムを実施）、研修会等の講師を務めた。（附属幼稚園開催記録参照）</p>
<p>今後の課題</p> <p>①3種類のカリキュラムが同時進行しており、それらが円滑に遂行できるようにする。</p> <p>②学生が安心して勉学に励み、最終的には希望の進路に就けるように、キャリア、勉学、学生生活などをサポートする体制をより充実させる。【数値目標：就職・進学を希望する学生の進路決定率100%、退学数5名以内】</p> <p>③教員養成課程や保育士養成課程の再課程認定に向けて、教育課程、教員体制等に対応が必要。【具体目標：年度末に遺漏無く申請書を提出】</p> <p>④新カリキュラムの効果検証に向けて、外部要因、学生の状況に関して把握する必要がある。（中期にわたる継続課題）</p> <p>⑤附属幼稚園や子育て支援センターとの連携をより強化する。（中期にわたる継続課題）</p>

4. 短期大学部 口腔保健学科(0科) 年間活動報告書

学科長 野村 慶雄

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	80	80	14	1	0	0	\
2年	76	71	6	2	0	0	
3年	79	86	2	7	15	0	
休退学等の理由：一身上の都合、進路変更、経済的理由 *在籍者数はH28.5.1現在、他欄は年度中の動向							
学科目標資格取得状況							
歯科衛生士国家試験： 新卒	受験者数	68	合格者数	68	合格率	100%	
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	68 (100%)	進学者数 (率)	0 (0%)	その他 (率)	0 (0%)		
本年度の課題							
① 歯科衛生士への動機づけと早期退学者の減少 ② 教育イノベーション機構の基幹教育に基づく教養分野のカリキュラム検討 ③ 過年度生増加の要因を分析し、学生の学力向上・支援の方策を考える ④ 教員の資質向上を図るため、研究面では勉強会を実施し研究資金獲得に繋げる							
本年度の目標							
① チューター制による教員・学生の交流と早期病院見学実習を実施する ② 平成29年度に教養分野のカリキュラム改正を目標に定期的な検討会議を開催する ③ IR推進室との連携で再履修科目の現状と授業評価から過年度生増加の要因を分析する ④ 研究の基盤を構築し、科学研究費獲得に向け数名の教員がチャレンジする							
主な活動内容							
1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）： ① 1年生前期のチューター制（元教養ゼミ）を実施し、教員と学生間の交流を通して人格形成を促すことができた。また、関連施設のときわ病院の早期見学実習を通して歯科衛生士への動機づけができ、当学科の課題であった早期退学者（前期）を2名に留めることができた背景として評価できる。しかし、後期に5名の退学者（退学理由：一身上の都合）を出す結果となった。（根拠資料：学科教授会議事録、学科会議議事録） ② 教育イノベーション機構による教学マネジメント改革は、大学の3学科が中心となり基盤教育分野（教養分野）のカリキュラムが作成された。カリキュラム検討小委員会を開催し、教育イノベーション機構の目指す基盤教育を参照に教養分野のカリキュラムを検討した。当学科の3年制の教育であり時間的制約などから、一部の基盤教育（まなぶる▶ときわびと）においてのみ他学科と共通で教養教育を行うこととした。（根拠資料：学長会議議事録、カリキュラム検討小委員会議事録、学科教授会議事録）							

録、学科会議議事録)

- ③ IR 推進室の入学時から卒業時の学生の成績評価の推移を検討した資料から、1 年生前期の成績順位が卒業時の成績順位にほぼ一致するとの報告を参考に、当学科の再履修科目と学生による授業評価の評価結果から分析した。その結果、再履修科目には授業内容・方法の点で評価の低いものがある。先ずそれぞれの教員が謙虚に授業評価の結果を受け入れ授業改善のための様々な取り組みをする必要がある。(根拠資料：学科教授会議事録、学科会議議事録)

- ⑤ 学科教員全員が参加する「研究に関する勉強会」を毎月 1 回開催し、研究全般に関する項目について学修した。その結果、平成 29 年度科学研究費に 5 名の教員が申請した。テーマ別研究に申請し 2 名の教員の研究が採択されるとともに、学科テーマ 1 件が採択された。

(根拠資料：学科教授会議事録、学科会議議事録)

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 学科運営における主な活動内容(根拠資料・記録)：

1) 教科運営(授業運営)主にカリキュラムについて

上記 1 に一部含まれる。(①チューター制の定着、②平成29年度カリキュラム改正を目標にした定期的な検討会議開催)

③「学生による授業評価」の検証

関連科目間の授業評価の経年推移を検証するとともに、他学科の授業改善策を参考に学科の改善策を共有化した。(根拠資料：学科会議議事録)

④ 非常勤講師・助手への対応は、学科長が次年度の担当をお願いす際にディプロマポリシー並びにカリキュラムポリシーを伝え、学科の教育方針を説明している。

(根拠資料：学科会議議事録)

③臨地実習施設への研修会

臨地実習の施設指導者(歯科医師・歯科衛生士)を対象に 8 月と 3 月に臨地実習指導者会議を実施し、歯科衛生士教育の現状把握(教育講演)と臨地実習の目的の再確認をお願いした。また、グループワークを通して、各施設間の情報交換を行った。(根拠資料：臨地実習指導者会議議事録)

2) 学生支援

上記の 1 に一部含まれる。(①チューター制の定着)

②未修得単位の多い学生への対応・支援

歯科学基礎分野での定期試験不合格者が多く、希望者に対して集中的に補習を行った。担任は前後期の単位取得状況を把握し、時には保護者を交えて今後の対策を話し合い前向きな解決策を検討した。

③学生生活に問題のある学生への対応・支援

担任が前期の早期に学生面談を通して指導することに加え、休みの多い学生には随時面談や時には学生相談室を紹介するなど積極的に支援した。(根拠資料：面談記録表)

④国家試験対策

専門基礎・専門分野の補講並びに校内模試・業者模試を実施し、現役卒業生を全員を合格させることができた。(根拠資料：国家試験対策委員会議事録、学科会議議事録)

⑤ 就職・進学支援

国家試験合格者の内 68 名が病院・診療所に就職した(根拠資料：学科会議議事録)

3) FD への学科としての取り組み

① 「学生による授業評価」の結果と再履修状況を踏まえ、学科長が個別に授業改善した。(根拠資料：学科教授会議事録)

② 学科内の FD 活動として、平成 27 年度は授業方法の改善を目的に「授業相互参観」の推進を目標に教員間で共有化し実施した。
(根拠資料：学科会議議事録)

3. 社会活動、研究活動、など：

1) 社会活動

- ① 口腔保健研究センターでは、4学科の新入生、附属ときわ幼稚園、神戸常盤女子高校並びにときわ健康フェアにて歯科健診ならびに口腔機能に関する検査を行い、口腔保健の啓発に努めている。
- ⑥ 子育て支援センター「えん」にて、出前講座を行うとともに、子供のフッ素塗布を定期的実施している。
- ⑦ コミュニティーハウスにて成人と高齢者を対象に5回シリーズの講話を実施し、地域の口腔保健に貢献した。
- ⑧ 長田区における地域保健事業（子どものむし歯予防のための検討会、長田区民まちづくり会議のにこやか部会など）に参画している。

2) 研究活動

- ① 科研費申請にチャレンジし1名が採択（継続）され、学内のテーマ別研究では3件が採択された。昨年度のテーマ別研究成果や教員の研究成果を関連学会等で公表した。
- ② 教員の研究を始動させる支援を学科での研究に関する定期的な勉強会・柳塾などを通して実践した。
(根拠資料：学科会議議事録)

今後の課題

次年度取り組む課題

- ① 新学科長、新規歯科医師教員の下学科運営を円滑に進める
- ② 1年生の早期退学者並びに過年度生減少のための対策
- ③ 平成28年度改正カリキュラムの平成28年度分の検証
- ④ 研究活動並びに業績蓄積の定着化

中長期にわたり取り組む課題

- ① 学科教員のキャリアアップ
- ② 18歳人口減少に対する学生確保対策
- ③ 歯科衛生士教育の在り方に関する検討

5. 短期大学部 看護学科通信制課程(CCN) 年間活動報告書
 課程長 高宮 洋子

基礎データ						
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	在籍延期者数	卒業者数
1年	161	161	10	1		
2年～		274	45	4	123	127
休退学等の理由：（退学者には除籍者を含む） 出産育児・体調不良、学業と仕事の両立困難、親の介護、経済的困難 *在籍者数はH28.5.1現在、他欄は年度中の動向						
学科目標資格：看護師国家資格取得状況						
受験者数	新卒者127名	合格者数	83名	合格率（%）	65.4%	
既卒者	既卒者90名		32名		35.6%	
本年度の課題						
<ul style="list-style-type: none"> ・学生確保と実習地確保 ・新卒者の3年連続の合格率向上、既卒者の合格率が前年度を上回ること ・学生の学習力の向上に向けた教育方法の充実 ・3年目、4年目の在籍延期者への学修支援の強化 						
本年度の目標						
<ol style="list-style-type: none"> 1. 関東および近畿圏の広報活動を強化し受験生の増加をはかる。 2. 学生の状況を反映した実習地の新規開拓をはかるとともに、臨地指導者会議を重視し通信制課程の実習内容の理解を深め、実習地の継続をはかる。 3. 「2年で卒業し国家試験に合格」するための支援を強化すること、既卒者が国試合格を目指し覚悟して学習に取り組むための支援を実施する。 4. 入学前授業、入学後の学習説明会に続いて学習の進捗状況に応じた学修支援を行い学生の学習力の向上を図る。 5. 学習困難学生の個別指導の強化、在籍延期者については個々の学習目標を明確にして学修支援を強化する。 						
主な活動内容						
1. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 1について 看護協会主催の進学説明会は兵庫、岡山、奈良、静岡の各県に参加した。広島・京都・滋賀県については資料参加となった。兵庫・奈良・岡山では説明会への参加者の減少が目立った。年度初めより准看護師の動向や各県の就業数等を参考にして、本部事務局の支援も受けて、関東では千葉・船橋・習志野市や神奈川県、静岡県東部、近畿では兵庫県内の各市、滋賀県などの病院を精力的に訪問した。看護協会新聞、地域の広報誌へ広告の掲載、学校案内の配布も精神科、中小病院やクリニック等範囲を広げて実施した。結果的には反応の良い所もあったが今年度の受験にはつながらない結果となり、入学生は107名に留まった。特に京都の受験者が激減している。その中で、本年度初めて東京において本学主催の進学説明会を実施した。10月の開催で広報の期間も短かったが、17名の参加があり、						

参加者の内9名が自己推薦3次を受験し合格となった。全国の通信制課程専門学校の情報でも、定員を確保したのは17校中2校であった。今後も全国的な准看護師の就業状況や通信制看護学校の動向などを検討し、きめ細かい広報が必要と考えられる。

(通信教育委員会記録、課程会議記録、入試委員会記録)

2. について

臨地実習地確保について、領域別・エリア別学生予測数と施設受け入れ数を早期に可視化することにより、新規施設を開拓し確保できた。しかし、既得で実績のある実習施設も、看護大学の進出、施設の都合により受け入れ拒否が起こることがあるため、情報を早期に捉え対応する必要がある。また施設での指導者会議の開催により通信制課程の実習指導への理解が深まっている反面、実習施設により指導内容に格差があり今後も指導者との連携強化が課題となった。(臨地実習委員会記録、課程会議記録)

3. について

国試対策について入学時の学習説明会において説明時間を設定し、1年次から取り組むことの重要性と国試対策を進めるためのわかりやすい資料の配布と具体例の提示、模擬試験は受験に来校しやすいように日程の調整を行った。既卒生に対しては、不合格者全員への電話による学習相談において、不合格をふまえて合格への取り組みを進めると共に、既卒で最も合格率の低い大阪会場での受験者には、受験手続きガイダンス時に来校を求め学習方法について直接助言を行った。来校できない既卒生には現状に甘んじないで決意を高めて学習に向かえるよう、具体的な学習の方向性をしめした文書を送付するなど取り組みを強化した。しかし、第106回看護師国家試験は既卒者の合格率は35.6%と全国平均を上回ったが新卒者の合格率は65.4%で、前年度第105回の79.3%を下回る結果となった。国家試験対策は引き続き全教員の課題である。

(国家試験対策委員記録、課程会議記録、通信教育委員会記録)

4. について

入学時学習説明会への参加者は対象者の約90%となり、新入生にとって卒業に向けての学修の全体像と学習進度を具体的にイメージし、どのように学習を進めていくかを自身で考える学習の場であり、学生同志の交流とやる気を共有する場となっている。

入学前授業については、通信制課程では、主にレポートによる学習が中心となるため、レポートの書き方の具体的指導を行った。また質問の仕方やCCNシステムなどの説明を中心として実施した。東京会場及び神戸会場合わせて、入学予定者の89.7%の参加があり、受講後は「レポートの書き方や基本的な文章の書き方が理解できた」「学習のやり方が理解できた」などの感想から、授業の目標がほぼ達成できていると考える。また「学生による授業評価」のまとめでは、授業評価についての各設問の平均値は16項目において4.0～4.5で、前年度より全設問において評価が上がっている。また昨年度低かった「シラバスを読んで授業に臨む」は昨年度より上がっており、入学前・後の授業や学習説明会の効果の表れと考えられる。

今年度、基礎看護学・看護マネジメント実習履修者は新入生の70.6%であり例年とほぼ同程度であった。入学後学習の進捗がとどこおる学生への学修支援について、電話での対話を行うと共に、「学習計画の見直しと学習の進め方」についての学習会を行ったが、

今年度は学習会への参加者が少なく、開催のタイミングなど今後の課題となった。今後入
学時の学習意欲がレポート提出につながり、学習の進捗がはかれるような学習支援が課題
である。

(課程会議記録、入試委員会記録、自己評価委員会記録、学修相談記録)

5. について

例年実習の節目にそれぞれの学生の学習の進捗状況に応じ、当面する課題を明記した手
紙を送るとともに、各教員による個別指導を行ってきた。また学修相談も毎週金曜日を定
例とし、それ以外の日も行っているが、今年度の相談件数は 39 件であった。件数は少な
く相談する行動に移れない現状があると思われる。在籍延期者の中には、病気や家庭的、
経済的な理由で学習環境が整わず、退学や除籍となる学生が多いが、学習困難による学生
も多いことから、学習の進捗に応じた個別指導が必要になっている。一方退学者及び在籍
期間満了で除籍となった学生の内 9 名が再受験をしている。1 年目で退学及び除籍となっ
た学生には健康上の問題の他経済的理由によるものがあり、学修環境を整えることの困難
さを示している。(課程会議記録、入試委員会記録、自己評価委員会記録)

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた ③. あまりできなかった 4. できなかった

2. 課程運営における主な活動内容 (根拠資料・記録) :

1) 教科運営、主にカリキュラムについて

①教科運営に関しては、課程内教授会議(月 1 回)において通信制課程の総括的運営に
関して審議し、課程会議において適切な問題提起及び審議ができるようにしている。月 1
回の定例課程会議では委員会活動や教員の学生指導上の問題や課題について審議し問題
の共有と解決への方向性の確認を行っている。また同日開催の通信教育委員会に連動し、
教職員が情報を共有し協力できる体制をとっている。

学生確保について、年度当初から通信教育委員会とともに、広報活動を強化するととも
に、准看護師の動向の把握を行ってきた。学校案内の送付や施設訪問を精力的に実施した
が、受験生の増加に至らなかった。准看護師の動向、全国通信制課程看護専門学校の状況
等を吟味した結果、入学定員を 250 名から 150 名に変更すること、大学外のスクーリング
会場として、平成 30 年度から京都会場を取りやめ金沢会場に移すことを決定した。金沢
におけるスクーリング会場の確保を行い、実習地も確保の見通しである。

②教育力の充実について

本課程ではすべての教員がそれぞれの領域において授業にグループワークをとりいれ
ている。課程内FDにおいて、大学内FD「ディープアクティブラーニング」での学びを
ふまえて、学生が主体的に学ぶための実習スクーリングにけるグループワークのあり方
について検討できた。

③学生による授業評価は、1 - 4 で述べた通り、教員間で授業改善への具体的努力につな
がっており学生の評価に反映されている。

④卒業生によるアンケートの結果は課程会議に提案され、国家試験対策等にも反映されて
いる。

⑤非常勤教員との連携については、添削指導員連絡会議は年度初めに設定して、課程全体としての課題、また領域ごとの課題についての意見交換、意思統一の場は設定されており、連携はとれている。非常勤教員との連携については、学生の状況に合わせて必要時個別に行っているが、さらに積極的に情報を共有し、指導に反映できるような連携が必要である。

⑥臨地実習に関しては年間を通して月1回の委員会を開催し状況の把握分析、活動内容の検討・運営にあたり、課程会議で報告し情報共有を図った。

2) 学生支援

学習支援については、学生の基礎学力の違いや准看護師としての経験および学習環境の違いの幅や深さの違いの対応に困難があり課題となっている。学修困難な学生に関してはそれぞれの領域での情報を教務委員に集中し必要に応じて、課程会議において共有し取り組みを一致するようにしている。1-4. 5で述べたとおり、さらに学習の進捗状況に応じた個別指導が必要となっている。学生への経済的支援として各種奨学金制度の紹介および本学の奨学金の給付は学生支援につながっている。

3) FDへの学科としての取り組み

2-1-②で述べたとおりである。

3. 社会活動、研究活動、など

社会的活動として、看護専門学校での講師活動(3人)看護協会主催研修会講師(1人)、に参加している。

研究活動では科研費助成研究が2件(継続)、学会発表は7件であった。
論文掲載は1編である。

今後の課題

- ・学生確保：関東、北陸地域で80名は確保する。そのため本学主催の説明会の実施、看護協会・各施設への働きかけの強化と広報活動の継続強化を図る。
- ・国家試験の合格率を引き上げ、全国平均を上回る。
- ・学習の進捗が遅れている学生への学習支援の強化を図る。
- ・実習施設における指導者会議を重視し実習指導内容の向上を図る。又領域別実習地の不足に敏速に対応する。

6. 教育イノベーション機構 年間活動報告書

機構長 柳 敏晴

本年度の課題
<p>1. 神戸常盤大学の使命と教育理念を構築し、平成 29 年 4 月教育課程変更に向け、教学マネジメント改革を進め、さらに準備を加速させる。</p> <p>2. 「未来に向けての防災宣言」を受け、地域交流センター、ボランティアセンター、国際交流センター等と協力し、教学マネジメント改革を進める。</p>
本年度の目標
<p>大学を卒業した後も永遠に持続する「学ぶ力」をもち、いのちに寄り添うことができる人材を育む教育を推進する。そのために、幅広い教養を持つ学生を育て、小さくてもきらりと輝く「いのちに寄り添う大学」を目指し、教育の変革（イノベーション）を続ける。</p>
主な活動内容
<p>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</p> <p>1. ワーキンググループによる作業の推進：基幹教育から基盤教育へ名称変更とカリキュラム改正案作成（平成 28 年 6 月より）、ときわ教育目標、ときわコンピテンシー、DP、CP、AP、SSP、ASP 原案作成等幅広く検討した。</p> <p>2. 学内への発信</p> <p>1) 基盤教育科目担当者への説明会（平成 28 年 12 月 17 日）</p> <p>2) 教学マネジメント改革説明会（平成 28 年 12 月 26 日）</p> <p>3) 教学マネジメント改革に関するパブリックコメント（意見公募手続）の実施（平成 28 年 12 月 26 日）</p> <p>4) ワーキンググループの活動</p> <p>①寺子屋 WG：基盤教育実施に向け、教員をサポートする研修会の計画、実施を行った。</p> <p>○PC 講習会（成績評価に役立つエクセルの基本機能の講習会）、参加者：12 人</p> <p>○manaba 講習会（基盤教育等で manaba を利活用するための講習会）、講師：朝日ネット、学術推進課、参加者：1 部のみ 29 人、2 部のみ 15 人、1・2 部 13 人</p> <p>②SSPWG：6 回の会議（1/18、1/25、2/1、2/8、2/15、2/22）今年度の結果として、1. 教職員の使命、2. ときわ SSP の基本姿勢（理念）、3. SSP 関連は、学内全ての組織である、どの組織においても、学生、教員、職員が参画し、支援の内容や仕組みを常に見直し、変化（改善）させていくシステムの構築が必要、の三点を確認した。</p> <p>③ASPWG：学生個人に対するアセスメントとして、平成 27・28 年の 2 年間「大学生基礎力調査（ベネッセ i-キャリア）」を実施し以下の様に活用した。</p> <p>1. 学生対象：「キャリア基礎」でのフォローガイダンス・行動計画作成（外部講師）とそのふりかえり（レポート課題）→1 年後期以降のフォローアップ体制が築けなかった。</p> <p>2. 教職員対象：担任面談用資料提供（学科）、調査結果提供（学科、IR 推進室）→膨大なデータで活用には困難を伴う等、調査結果を学生の成長に十分繋げていない。</p> <p>→以上の理由で、「大学生基礎力調査」の実施について、検討し、まず本学のアセスメント全体像を、「アセスメントの対象は「学生の学びの進捗と、その学びを支えるべき教育や環境の質」であり、アセスメントの目的は「ポリシー実現」である。更に、アセスメン</p>

トの設計は評価のための評価ではなく、改善に資する「課題」を発見するものである必要がある。そのためには、その大学の特徴やその時々の方脈を踏まえ、設計しなければならず、単発ではなく継続的な評価を要する。この点で、業者提供の調査をそのまま使用することには慎重を要する。例えば、全学ディプロマ・ポリシーの実現を目的におくと、アセスメントは「ときわコンピテンシー」修得の進捗状況が評価できる調査を、継続実施する必要がある。この観点で、業者提供の調査として「大学生基礎力調査（ベネッセ i・キャリア）」に「PROG（河合）」を加え、「ときわコンピテンシー」との整合性や経費等について検討した。結論は、いずれの調査も「ときわコンピテンシー」に完全に対応しているわけではなく、また継続して実施するには新たな経費が必要となることなどから、平成 29 年度は何れも実施しないこととした。

3. 基盤教育科目説明会・研修会

1) まなぶる ▶ ときわびと

研修会：5 回実施（2/28：18 名、3/7：20 名、3/14：19 名、3/21：19 名、3/28：20 名、いずれも 10～12 時、計 10 時間）、実施内容は、グループづくりワークショップ、コンセンサス実習、ノートテイキング方法の検討、キャンパスマップ作製実施方法等の検討、ルーブリック評価実施方法の検討等を行った。実施した成果として、担当教員全員が自分自身の授業であると認識できた、学科を越えて授業内容や授業方法について意見交換することで FD 効果があった。

2) 大学道場 mini ゼミ

説明会：3 回実施（1/30：24 名、3/6：23 名、3/27：25 名、いずれも 1.5 時間、計 4.5 時間）、実施内容は、大学道場 mini ゼミの進め方、牛頭先生とポートフォリオについて学ぶ、評価等であった。実施結果として、基盤教育科目についての理解が進み、各教員の専門について知る機会となり、学科を越えた教員間の交流が少しはできた。

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

教育イノベーション機構会議による審議を重ねた（平成 29 年 3 月末迄 32 回開催）

3. 社会活動、研究活動、など：

教育改革に傾注したため、教育イノベーション機構としては、実施していない。

常盤女子高校入学前教育の実施（12 月 12 日、2 月 21 日の 2 回）

今後の課題

1. 神戸常盤大学の使命と教育理念を構築し、平成 29 年 4 月教育課程変更に向け、教学マネジメント改革を進め、さらに準備を加速させるについて

各学科の教育課程は、資格に関わる特質上、また、学科独自の教育目標があるため、時間を要したが、基盤教育を設置し、平成 29 年 4 月改訂に向け、申請手続きを進めることができた。各学科の協力が一番大きな力であった。

教学マネジメント改革については、今回の教育課程改訂が足掛かりとなり、今後も継続する必要がある。より戦略的な組織運営が必要と考えられる。

2. 「未来に向けての防災宣言」を受け、地域交流センター、ボランティアセンター、国際交流センター等と協力し、教学マネジメント改革を進めるについて

昨年度と同じく、1年生全員に市民救急救命士資格を取得させるに留まり、余りできなかった。SSPWGの活動を通し、全学的な取組の重要性が認識された。

3. その他

学内への発信を通し、将来に向けての教学マネジメント改革を見据えた教育課程改訂である認識が、学内に広がってきたと考えられる。また、基盤教育科目説明会・研修会、寺子屋WG実施の研修会を通し、学科を越えた教員間の相互理解と、教育方法についての学び合いが進んだことは評価できる。

SSPWG、ASPWGの活動を通し、本学の次の課題を明らかにできたことは成果として考えられる。

Ⅱ. 学内組織別 年間活動報告書

1. 入試委員会 年間活動報告

委員長 瀬川 和子

<p>本年度の課題</p> <p>1. 全学科の共通の目標は、次の①～③である。</p> <p>①志願者の増員 ②定員の充足 ③基礎学力の担保と確固たる目的意識の入学生確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・M科では、医療検査と細胞検査分野の教育内容と実績、および文系入学者へのケア態勢の広報を強化する。また、理系医療系志願者層の継続的な確保を目指す。 ・N/E科は関西圏での同系統養成校との差別化を広報し、本学独自の教育理念・教育内容、本学独自の学生支援体制について周知を図る。 ・O科は、四大や専門学校との差別化を明確にし、本学独自の教育理念、施設設備の充実度、求人数や求人先と就職先等実績情報の発信を強化したい。 ・CCNは、関東地区も含めた志願者開拓と自己推薦入試回数増についての周知を強化する。 <p>2. 平成29年度入試について日程・科目・出題範囲の変更点を周知する。</p> <p>3. 受験生対象の受験ガイダンス、模擬授業等々依頼も増加傾向にある。入試日程の見直しにより、入試実施においては安全・公正性を念頭におきつつ体制を整備する。</p> <p>4. 地方会場の設定やセンター試験利用入試など他府県から学生確保の体制はとっているが、全国的に志願者が増えているとは言えない。DM、受験情報誌だけでなく、県外の高校と受験生に直接広報する機会の設定およびホームページの充実を他組織と連携しながら強化したい。</p>
<p>本年度の目標</p> <p>1. 全学科の特徴・魅力の徹底した広報活動により、アドミッションポリシーに適合した志願者を増やすことで、定員を確保する。</p> <p>2. N科通信制課程では関東方面で指導基盤を確立し、入試方法・受験機会を増やし、あらたな志願者層を開拓する。オープンキャンパスや高校での模擬授業で各学科を紹介する。</p> <p>3. 平成29年度入試の国・英科目・出題範囲について、各科入試広報委員が中心となり、問題作成者と共に協議・検討し確定。受験生・高校等関係者へ周知する。</p>
<p>主な活動内容・結果</p> <p>1. <u>目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）</u>：（H.29 大学案内・入試要項・受験ガイド、入試委員会議事録）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入試委員会：H.28 4月の第1回入試委員会で入試業務に関して委員全員で確認し、広報活動と入試運営に関して各委員が遂行した。 <p>1. 広報活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成29年度入学者選抜試験用の大学案内・入試要項・受験ガイドの作成 ・各科指定校の選定と高校訪問者の確定およびその実施 ・オープンキャンパスの内容と担当者の検討ならびに実施後の反省と次年度への課題のまとめ ・CCNに前年度導入した自己推薦入試の周知および、関東地区病院訪問の強化

2. 入試運営

- ・後期からは予定の入試の実施、および合否判定部会委員として合格判定教授会の各科合格者原案作成。併行して平成 29 年度入学者選抜入試の結果を参考にしながら平成 30 年度入学者選抜試験の概要作成。

目標達成度の評価：1. できた② 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：（入試委員会議事録）

1. 広報活動 (1)～(3)の数値は3月末までの実施分を記載

- (1) 高校訪問：課員を中心に推薦入試および一般入試の出願依頼に県内・県外併せて約 400 校訪問に及んだ。各科教員も M 科は大阪・奈良地区、0 科は岡山を重点的に訪問した。今年度も以前から力を入れている東播・西播地区は訪問を重ねた。また阪神地区も重点的に訪問したことにより本学とのネットワークも飛躍的に広がり、入学者増加につながっている。
- (2) 本学主催進路説明会：本学 6 月 27 日（高校教員約 20 人出席）
- (3) 高校での模擬授業・進学ガイダンス：全体で約 150 会場参加。講義は委員以外の教員にも依頼した。高校から直接依頼の「出張講義」「出前授業」等も増えている。
- (4) キャンパス見学会：6、7、8、9 月の 4 回を計画した。今年度は天候にも恵まれ、参加者は全体で H27 より大幅に増加した。9 月以降も週末ごとに個別相談で対応した。
- (5) 入試広報課を中心に学科教員も西日本の過去実績のある高校に出向き、地方での募集活動に努めた。
- (6) E 科の推薦志願者が予想より低迷したこともあり、一般入試以降に向け、西日本の広報を強化した。
- (7) CCN の指導拠点を関東にも設置。課程教員も関東方面の実習先病院や看護協会訪問を繰り返し、説明と過去在籍者他、関係者への DM・大学案内送付等々で周知を図った。

2. 入試運営

- (1) 平成 29 年度入学者選抜試験での総志願者数は昨年度より微増した。
 - ・M 科では近畿圏に養成校が 2 校開設された影響は大きかったが、科目見直しや一般中期を導入することで全体では志願者が増加した。また、入学者について一般入試の理科では化学選択者が増えたことなどからも、理系のレベルの高い学生が確保できたと考えている。
 - ・N 科では兵庫県下の養成校が増加した影響を受け、志願者減となった。今までの実績の周知により歩留まりは高く、結果的には M 科同様学力の高い学生を確保できたと考えられる。
 - ・E 科では今年度はコース制導入により取得資格が変わったことで、これまでとは異なる志願者層が集まった。また、一期生に続き、二期生の順調な就職情報を含めた年度途中の広報強化により一般以降の出願者につながった。
 - ・0 科では昨年に続き関西圏に四年制大学が新設されたこともあり関心は高まっているが、他地域での新設により志願者数に影響がでた。全体では昨年度より志願者総数は増加となった。

・N科通信制課程では複数回実施の自己推薦入試に志願者があり、また関東圏での地道な広報活動が功を奏し、県外の志願者も確保した。

(2) 近年多くの大学が定員を確保できない状況の中で、本学は平成29年度通学課程の定員を全学科で充足することができた。看護学科通信制課程の入学者は250名定員を満たすことはできなかったものの、准看護師という対象者が減少する中、関東からの出願も増加し、新入試方法での志願者も集まった。

3. 入試問題

入試科目：ホームページ等でも早期に各科の出題科目・出題範囲について公表し、周知を図った。問題作成者も交えて各学科のアドミッション・ポリシーをはじめ、出題範囲を再確認後、作成を実施した。なお、H.30年度入試に関しても、公表済みである。

4. 活動内容補足

平成29年1月に実施したセンター試験では、受け入れ人数が平成27年から500人へ増加し、10試験場を設置した。監督業務も多くの教職員が2日連続担当となった。事前に、主任監督者会議、監督者会議、全体説明会、3度のリスニング会議を開催したが、これらへの教職員の出席率は高かった。本学での監督者全員の的確な判断と対応のためには、監督者相互が内容の共通認識、理解する必要があることを周知し、確実な監督体制を整えたい。

今後の課題

1. 全学科共通の目標は継続して次の①～③である。

①志願者の増員 ②定員の充足 ③基礎学力の担保と確固たる目的意識の入学生確保

・M科では、医療検査と細胞検査分野の教育内容と実績、および文系入学者へのケア態勢の広報を強化する。また、理系医療系志願者層の継続的な確保を目指す。

・N/E科は関西圏での同系統養成校との差別化を広報し、本学独自の教育理念・教育内容、本学独自の学生支援体制について周知を図る。

・O科は、四大や専門学校との差別化を明確にし、本学独自の教育理念、施設設備の充実度、求人数や求人先と就職先等実績情報の発信を強化したい。

・CCNは、関東地区以外にも志願者開拓をし、課題提出型入試と自己推薦入試についての周知を強化する。

2. 平成30年度入試について日程・科目・出題範囲の変更点を周知する。

3. 受験生対象の受験ガイダンス、模擬授業等々依頼も増加傾向にある。入試日程の見直しにより、入試実施においては安全・公正性を念頭におきつつ体制を整備する。

4. 地方会場の設定やセンター試験利用入試など他府県から学生確保の体制はとっているが、全国的に志願者が増えているとは言えない。DM、受験情報誌だけでなく、県外の高校と受験生に直接広報する機会の設定およびホームページの充実を他組織と連携しながら強化したい。

1-2. 入試委員会 高大連携部会 年間活動報告書

部会長 栗岡 誠司

<p>本年度の課題</p> <p>本学と高校の両者にとって効果的な「高大連携授業」を如何にすれば実現できるかを、昨年度に引き続いての本年度の課題とする。</p>
<p>本年度の目標</p> <p>活動方針；将来の職業人の確保のため、各学部学科の主体的な考えと委員会活動を連携させ、高大連携を推進する。</p> <p>目標；大学教育の一端を体験する機会を通して、高校生に進路意識や職業意識の高揚を計ることに貢献する。</p>
<p>主な活動内容・結果</p> <p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>過去、明石南、東灘、三木北、社と高大連携事業による派遣授業を実施してきている。明石南高校とは協定書を交わしH19年度より10年目、東灘高校と三木北高校はH22年度より7年目となっている。社高校とは、H23年度～H26年度を実施してきたが平成27年度より中断している。派遣授業の回数は、明石南高校へは計15回、東灘高校へは計4回、三木北高校へは計4回である。また、医療検査学科では、臨床検査技師という職種の認知度を図るために、小野高校と宝塚北高校などで実施し、本学への進学者を得るなど効果をあげている。高大連携で行う授業の内容は、主として各学科が養成する職種の紹介・現状とやりがいなどを伝えることで、高校生の進路意識や職業意識の高揚を図っている。受講した多くの生徒は、進路意識と進学意欲が高まったと感想を記しており、一定の成果を上げている。</p> <p>目標達成度の評価：1. できた 2. <u>ほぼできた</u> 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>高大連携授業の現状の課題把握と今後についての検討</p> <p>①県立明石南高校との「高大連携授業」について；10年が経過する中で、30年度以降のあり方について、意見の集約に努めた。</p> <p>②新たな高校との高大連携について；神戸鈴蘭台高校からの依頼が有り検討した。29年度については申し出のある「総合的な学習の時間」の中での実施を、教育系と医療系で実施することとなった。</p> <p>③高大連携については、単年度毎に検討すること、医療系・教育系への理解を多くの高校生が得るために多数の学校と展開することが望ましいとの確認を得た。</p>
<p>今後の課題</p> <p>① 29年度の課題としては、長く続いている高大連携事業についての再検討が年度当初の課題としてあげられる。</p> <p>② 高校からの申し出に柔軟に対応するも、一定のガイドラインの策定が必要である。</p>

2. 広報委員会 年間活動報告書

委員長 山崎 麻由美

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・本学 HP の改善に向けた取り組みをする。・広報紙の内容を見直し改善する。
本年度の目標
<ul style="list-style-type: none">・HP における課題や問題点を抽出し、改善を図る。・キャンパスレポートの内容と有効活用について検討する。
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none">・毎月 1 回の定例委員会を開催した（原則第 2 月曜日 13 時から）・HP の充実を図るために WG を組織し、改善計画案を策定した。・広報紙の円滑な発行と充実を図るために WG を組織し、内容等の検討を行った。 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none">・広報委員会規程策定・定例委員会の開催（原則毎月第 2 月曜日）・HP ワーキンググループの立ち上げと活動<ol style="list-style-type: none">1. 現在の HP が抱える課題の抽出を行い、その解決を図った。<ol style="list-style-type: none">①必要な情報を遅滞なく掲載できているかの現状確認を行った。②情報の掲載がスムーズにいくように、事務手続きの見直しを行った。③修正が必要な個所を見つけ、該当部署に修正要請を行った。2. HP の掲載内容の充実を図った<ol style="list-style-type: none">①各学科の情報発信を確実なものにするために、学科ごとの掲載内容リストを作成し、学科会議等で周知した。②入試委員会との意見交換会を行った。・広報紙ワーキンググループの立ち上げと活動（年 2 回の広報紙）<ol style="list-style-type: none">①掲載記事の検討を行った。②第 54 号から紙面構成の変更を行った。
今後の課題
HP に関しては平成 30 年度の大幅な改修に向けての準備を始める。 広報紙の活用を検討し実行する。

3. 教務委員会 年間活動報告書

委員長 光成 研一郎

本年度の課題
1. すべての学生の多様な学びと成長を実現するときわ教育の確立を目指して、全学的な検討がなされている「教学マネジメント改革」に関して、各学科における運営上の課題等について検討する。 2. manaba(授業支援システム)の実施・運営に関する事項について継続して検討する。 3. 6月に完成予定の2号館と、本年度に実施予定の3号館の改修に伴う教室運用に関する事項について検討する。 4. GPA制度の実施に関する事項について継続して検討する。
本年度の目標
1. 「教学マネジメント改革」にかかる教務的懸案についてイノベーション機構と連携を図り、解決、実施を図る。 2. manaba(授業支援システム)の実施・運営に関する事項について検討する。 3. 2号館の改築・3号館の改修に伴う教室運用に関する事項について検討する。 4. GPA制度の実施および活用について検討する。
主な活動内容・結果
<u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果(根拠資料)：教務委員会議事録</u> 1. 「教学マネジメント改革」にかかる教務的懸案について解決、実施を図る。 1) 基盤教育分野変更に伴い、全学科カリキュラム変更を実施した。 A) 平成29年度入学生の大学学則変更： ・履修科目の登録の上限単位数の変更 ・卒業要件の変更(単位数の変更) ・授業科目の見直し及び選択必修科目の見直し B) 平成28年度入学生の大学学則変更： ・別表1(第26条関係看護学科授業科目)「療養支援実習Ⅰ」を2年後期から3年前期へ移行。 ・別表1(第26条関係こども教育学科授業科目)「こどもの食と栄養Ⅰ」を2年前期から3年前期へ移行。「こどもの食と栄養Ⅱ」を2年後期から3年後期へ移行。 C) 平成29年度入学生からの大学履修規程変更： ・第6条履修科目の登録の上限単位数の変更に伴い、全学科1年間49単位を上限単位数とする。 ・第7条履修要件に看護学科については、別表1に規定する選択科目から、保健師課程に関する科目を除く59単位のうち、次に掲げる授業科目の中から23単位以上修得しなければならないとする。 ・第14条繰り越し再試験の削除。繰り越し再試験の廃止による。 ・第18条(看護学科の履修)の削除。再受験科目の廃止による。 ・履修規程の別表1から別表4の1単位の授業時間数変更に伴う授業科目の見直し D) 平成29年度入学生からの短期大学部学則変更：

- ・別表2の口腔保健学科特別の授業科目を見直し、学びの基礎、まなぶる▶ときわびとⅠ、まなぶる▶ときわびとⅡ、地域との協働A、地域との協働B、口腔保健特論Ⅰ及び口腔保健特論Ⅱの7科目を追加する。

E)平成29年度入学生からの短期大学部履修規程変更：

- ・神戸常盤短期大学部履修規程では、大学と同様1年間49単位とする。
- ・神戸常盤短期大学部履修規程では、別表1に口腔保健特論Ⅱを追加する。

2) 基盤教育科目の決定。

3) 基盤教育科目については、ルーブリック評価を軸とした新シラバスを作成した。なお、シラバス上、定期試験を実施する場合、定期試験を欠席した学生は、定期試験以外の評価割合が6割を超える科目については、評価をしないで必ず欠席とする。

2. manaba（授業支援システム）の実施・運営に関する事項について検討する。

1)manabaの活用率については、専任教員の概ね7割が活用しているという実態が報告された。

2)「まなぶるⅠ」のような多くの学生が受講し、多くの教員で担当する科目は、一括管理するためにもmanabaの活用は必須となる。活用方法の一層の周知徹底を図る。

3. 2号館の改築・3号館の改修に伴う教室運用に関する事項について検討する。

1) 新2号館セミナー室（ゼミ室）取扱い案を作成

- ・前期は、卒業研究を第一優先順位とする。
- ・後期は、看護学科3年臨時実習ガイダンスを第一優先順位とする、など。

2) 3号館に関しては、教室運用上特段の課題はない。

4. GPA制度の実施および活用について検討する

1)現状のGPA制度をより活用していくために、GPA値を進級・退学勧告の要件として活用すること。また、単位修得済み科目の再履修を認め、GPA値のアップを可能にすることなどが話し合われた。単位修得済み科目の再履修については、指定規則科目が多いという学科の特性上難しいという判断がされた。

2) GPA制度は実施3年目であり、今後も必要に応じて検討材料とする。

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：教務委員会議事録

1. 年間15回の委員会を開催し、以下の内容について検討し、必要に応じて「運営委員会」「教授会」への審議事項・報告事項とした。

1)各学科のカリキュラムに関する事項の検討

2)年間行事予定の確定に向けての検討

3)時間割(特別時間割、試験時間割・追再試時間割含む)の確定に向けての調整

- 4) 卒業および除籍に関する事項
- 5) 既修得単位の認定についての検討
- 6) 科目等履修生に関する事項の検討
- 7) 歯科衛生士リカレント教育（キャリアアッププログラム）に関する事項

〔結果〕

教務委員会は、上記教学運営に関わる案件を粛々と進める役割を担っている。活動が計画通りに進まないとは教学運営に支障が出るので、案件は、定例の教授会および運営委員会で議題に挙げ、審議いただき、報告も行っている。そのことで、主要な活動を達成していると考えられる。

今後の課題

1. 全学共通基盤教育科目の設定など「教学マネジメント改革」第1フェーズが一様の完成を見たが、カリキュラム運営上の教務的懸案が想定される。そのことに委員会として対応、検討していく。
2. 新シラバス（ルーブリック評価等含む）について引き続き検討していく。
3. 試験制度に関する検討。
4. 年間行事予定表等に関する検討。

4. 学生委員会 年間活動報告書

委員長 岩越 美恵

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・今年度の学外オリエンテーションの振り返りを次年度計画に反映・禁煙指導の実施と健康保健センターと共同で季刊保健だよりの発行・自治会との協働環境衛生活動の方向に向けて、自治会へのアプローチ・H26年学生満足度調査から見えた三つの課題の順次解決<ul style="list-style-type: none">① 課外活動や放課後自主学習する学生のための軽食の敷地内販売② 学生ロッカー室の利用環境改善 食堂メニュー改善にむけてのアンケート調査の自治会への働きかけ
本年度の目標
<ul style="list-style-type: none">・今年度の学外オリエンテーションの振り返りを次年度計画に反映させる。・喫煙者に対する保健指導の実施と健康保健センターと共同の季刊保健だよりで禁煙啓発・学生委員会との共働や、学生の自主的な生活改善活動の啓発のため、自治会との話し合いを増やす。・引き続きコンソーシアムひょうご神戸の定期交流部会に出席し、事業への学生参加を促す。・学生満足度調査からの課題の順次解決・その他、突発的な重大な問題に対する対応
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none">・初めての県立淡路国際会議場を併設するウエスティンホテルでの1泊2日の学外オリエンテーション（4/6-7）は、学生の満足度の高い結果であったため、教員と学生との交流をさらに促進できる内容に改善して2017年度は計画・準備を行った。・喫煙学生に対して、学生委員長とキャリア支援課職員で、3名の禁煙指導を行った。それに先駆け、大学近隣の禁煙外来を行っている2軒のクリニックに協力を依頼した。学生向けの季刊保健だよりを健康保健センターと共同で発行し、禁煙啓発記事を2回掲載した。・5/25に自治会との話し合いを持ち、学生委員会が自治会活動に期待することや、学舎2号館の改築に伴い、その1階に設置される予定の学生の自習室「カルティベ」の使用ルールの自治会主導での原案作成を提案。8/29にその原案を基に学生委員会と協議し共同で使用ルールを作成した。・大学コンソーシアムひょうご神戸の中の事業①学生プロジェクト事業「キッズフェスティバル2016」に参加、②学生ボランティア事業「東日本大震災復興支援・夏休み登録ボランティア」には本学学生は選出されなかったが、前年度参加した学生が部分的に参加。・売店の軽食販売の時間を8:30～18:00（以前は16:30まで）に延長。また2号館1階にリフレッシュコーナーができ、そこに軽食の自動販売機を設置した。ロッカー室入り口に靴棚を増設し、ロッカー室1のみ使用法の実態を調べ、清掃器具を備えて土足使用へと次年度から変更することとした。・今年度、近隣からの電話・メールなどによる学生に関する苦情が増加し、対応にも問題

があったため、8月に学生委員会と事務局との話し合いを持ち、職員の対応をマニュアル化があったため、事務局と話し合い職員の対応マニュアルを作成し、また9月教授会を通して全教員での対応や防止を依頼した。(学生へのマナー指導参照)。

・ロッカー室付近での盗難が4件発生したため、年度末にその場所に監視カメラ3台を設置した。

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果(根拠資料)：

1. 定例委員会開催(第1～11回)
2. 学生自治会活動の支援(学園祭11/22-23、新入生歓迎会5/16、クラブ活動、運営リーダーズ研修、謝恩会)
3. 日本学生支援機構奨学金の推薦と適格認定
4. 奨学金選考(中内財団、公益信託片山和夫社会福祉奨学基金、学内修学支援金)
5. 第58回全神戸短期大学総合体育大会(7/3)開催
6. 禁煙すすめ隊の健康フェアへのブース出展、兵庫医大の禁煙推室の活動報告研修会に出席(3/18)
7. 各小委員会活動(学生のマナー、奨学金、禁煙すすめ隊、大学コンソーシアムひょうご神戸、学生自治会)
8. 兵庫地区大学月曜懇談会出席(3回)

今後の課題

- ・自治会活性化と協働行事・活動の促進
- ・H26年度学生満足度調査から見えた残る一つの課題(食堂のメニュー改善)の解決
- ・教学マネジメント改革に新たに建てられたSSP(Student Support Policy)の具体計画と推進

5. 自己点検・評価委員会 年間活動報告書

委員長 松田 正文

本年度の課題
1) 大学の目標を達成するために組織の枠を超えて有効な点検・評価を行う体制を築く。 2) 上記を達成するために、本委員会の組織を改める。
本年度の目標
本年度の課題を基に下記の目標を定めた。 1) 大学の目標の一つを採り上げ、それを実現するための、組織を超えた、あるいは組織間連携を重視した活動・業務を点検・評価する。 2) 本委員会の組織改革を行う。
主な活動内容・結果
<u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料：記録）</u> 1) 「大学の目標」の一つとして「学生の健康」を採り上げ、これに関与している（と思われる）組織からアンケートによって以下についての意見を求めた。 a. 学生の健康の現状と問題点 b. 学生の健康保持に関連する組織、連携しなければならない組織 c. b.に示された組織間における連携の現状と問題点 それに基づいて、今年度は学生の健康に関連する「健康診断」を選び、これに関して、学科長・機構長・課程長・健康保健センター長・健康管理室長・学生相談室長などを含む点検実施代表者連絡会（学生の健康を保持増進する活動の連携に関する会議）を開催し意見を求めた。活動の詳細は会議議事録に譲るが、これに基づいて次年度以降、学生の健康診断に関連する業務が、関連する組織の密な連携の下に行われることが期待される。しかし、ある業務に関連する組織の連携を考える時、今回のような方法が適切であったかどうかについては検証する必要がある。 2) 自己点検・評価を一層進めるために、本委員会の組織を改めるよう求めた。その結果、次年度、本委員会の組織が改められることとなった。 目標達成度の評価：1. できた ②まぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった <u>2. 主要な活動内容・結果（根拠資料：記録）</u> 1) 「学生による授業評価（前期）」報告書から各教員が提案した授業の改善策を整理し、今後の授業に有効に活用されることを期待して各学科・課程に戻した。 2) 卒後評価として卒業生アンケートを実施した。期待した回収率が得られず、アンケートの実施とその活用については課題が残った。 3) 年次報告書は大学が行う情報公開の中でも重要なものの一つであることを考慮し、内容と体裁を一層充実させた。学生による授業評価や卒業生・就職先アンケート結果が一層有効に活用されることが期待される。
今後の課題
1) 大学の目標を達成するために組織の枠を超えて点検・評価する方法の改善を図る。 2) 学生による授業評価や卒業生アンケート結果の活用法を見直す。 3) 平成 29 年度以降の基盤教育（初年次教育）を確実なものにする点検・評価を行う。

6. FD委員会 年間活動報告書

委員長 畑 吉節未

本年度の課題（27年度年間活動報告から）

- 1) 大学の教育が大きく問われ、質的転換が求められている。当大学では2年前に教育イノベーション機構が発足し、次年度においては具体的なカリキュラム改正を実施する予定になっている。教職員の能力開発を目標とする当委員会では、「大学教育を再考する環境」の観点から、前期において文科省の高等教育局の改革官を招致し、「高大接続改革の動向から教育改革を考える」研修（県下高校、大学に公開）を持ち当大学での教育改革を教職員全員が考え、共有する場としたい。
- 2) 大学教育を深化させるために、学生を主体的にかつ深く学習させる教育技法を学ぶ機会を持つ。
- 3) 学科内FD活動や公開授業を促進する。

本年度の活動方針・目標

1. 教育改革を進めようとする当大学の教職員の理解を進めうるために最近の教育改革の動向を文科省の大学改革官から講演いただく機会を企画する。
2. 主体的かつ深く思考する学生を育成するための教育技法を学ぶ講演を企画する。
3. 学科内FD活動を計画的に進める。
5～6月に各学科の活動目標と方法を共有する。8月に中間評価、2月に最終評価を行う。
4. 教員相互の教育技法を向上させる機会となる各学科内での公開授業を促進する。
各学科10回の公開授業を目指し、FD委員からの推奨と報告形式について各学科で広報する
5. 中央教育審議会などの教育行政動向も理解に努める。

主な活動内容

a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：

〈目標1・2〉について以下の表1のとおり活動を実施し参加率が7割を超えた。欠席者には録画DVDや資料で補い、100%の参加率を目指した。さらに昨年度から学内ホームページのFD活動欄に継続的に掲示し、参加者の意見を公開する工夫を継続した。各研修会のアンケートから参加者の理解度・満足感・教育への活動可能性が高く評価され、意味のあるコメントが多く寄せられ目標は達成できた。

表1. FD研修会の実施状況一覧

開催日	テーマ	講師	概要	参加者
4月3日	新教職員の研修会	学長・法人本部長 関係課課長 FD委員長	①FD委員会より大学の特徴を映像と音楽で紹介 ②学長による教育の本質について講義 ②法人本部長・各講師から効果的なプレゼン	参加者13名、参加率100%
6月 11日	高大接続改革が目指す教育について	文部科学省高等教育局 主任大学改革官 濱口太久未	以下5点の構成で講演は展開された ①「高大接続改革」の理念と経緯②高等学校教育の改革③大学教育の改革④大学入試者選抜の改革⑤今後の高大接続の検討・推進体制	参加者81名、参加率60.0% ・教員53名（55.8%） （大学60.3%、短大40.9%） ・職員28名（70.7%）
12月 19日	主体的で深い学びを引き出すアクティブラーニング	京都大学高等教育研究開発促進センター准教授 山田 剛史	ワークショップ形式で以下の4部で展開。 ①アクティブラーニングを知る（基調講演）②アクティブラーニングを体験③アクティブラーニングをデザイン④アクティブラーニングを共有	参加者98人、参加率72.1% ・教員71人（74.7%） （大学76.7%、短大62.2%） ・職員27人（65.9%）

〈目標3〉学科内FDを促進する

当目標は6年前から始まっているが、学科によっては活動が進んでいなかった。昨年度より継続して、年度当初に委員会で目標・活動内容の共有し、中間評価も設定した。その結果、各学科の特色や状況を生かした活動とともに目標の達成度が明らかになった(表4. 学科内FDの取り組みの概要を参照)。

〈目標4) 公開授業を促進する。〉

①新任教職員の研修会や各学科での委員の呼びかけの結果、昨年より減少したものの、一昨年に比べ1.4倍の報告書があったが学科間の格差がある。②参加者の記録様式と提出方法を検討し改善した。

表2. 公開授業の所属別件数

所属	M科	N科	E科	O科	CCN科	計
件数	1	11	10	14	1	37
(27年度)	(2)	(10)	(6)	(22)	(3)	(43)
(26年度)	(5)	(16)	(4)	(0)	(0)	(26)

〈目標5) 中央教育審議会などの教育行政動向も理解に努める。〉

以下3点を通して、新たなSDのありかたについてFD委員会として重要な役割を果たした。

- 1) 11月の委員会でSD委員長から次年度からのSDの義務化についての文科省の通達文書(平成28年3月31日付)により知る機会を得た。
- 2) FD委員長として、1月の運営会議で次年度からのFDとSDのあり方についての提案を行った。
- 3) 次年度のSDの義務化に伴うSD委員会規定をFD委員長として提案を行った。

標達成度の評価: 1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容(根拠資料・記録)

以下の表3のとおり、会議は毎月1回定例化し計画的に10回の会議を持ち活動を遂行した。

表3. 委員会開催概要

回	月日	委員会の議題
1	4月13日	1)今年度の活動方針 2)今年度の目標ごとの運営方法案 3)今年度の研修案 (それぞれ委員長案資料)
2	5月9日	1)第1回研修のテーマ・方法とアンケート・役割分担について(委員長案資料) 2)第2回研修会のテーマと講師の報告 3)関西地区FD連絡協議会第9回総会の参加に向けて 4)公開授業の参加目標設定 5)各学科内FD研修テーマの提示
3	6月6日	1)関西地区FD連絡協議会第9回総会参加報告(資料あり) 2)学科内FDテーマの提示 3)第1回研修会の準備状況の確認 4)非常勤講師の公開授業への参加方法について
4	7月11日	1)第1回研修会のアンケート集計結果と分析(資料あり) 結果の広報方法 2)公開授業への参加手順の見直しについて
5	9月26日	1)公開授業についてHP「FD委員会」での取り扱いの手順と様式の検討 2)第2回研修会の準備と役割分担 3)各学科FD活動中間評価の報告
6	10月17日	1)第2回研修会の企画と運営方法 2)公開授業についてHP:FD委員会の取り扱いの手順と様式の掲載(資料あり)

7	11月14日	1)第2回研修会運営に関する役割の確認 2)SDの義務化の概要
8	12月12日	1)第2回研修会の準備状況の最終確認
9	2月13日	1)学科内FD活動の報告および報告書の提出期限について 2)第2回研修会アンケートについて(資料あり) 3)SDの義務化に伴うSD・FDの方向性について(資料あり) 4)次年度の新任者研修の計画案について(資料あり)
10	3月13日	1)今年度の活動報告のまとめ 2)次年度活動方針と事業案・予算(委員長案資料あり)

今後の課題(目標)

【次年度の課題】

- 1)次年度から義務化となるSDとの効果的な連携のもとにFDとしての機能をより明確化する。
- 2)教育改革が進む中で、教育の評価としてカリキュラム全体の評価であるAP(アセス、メントポリシー)の評価方法と新しい評価技法であるルーブリック評価を学ぶ研修を企画する。
- 3)各学科の状況の即した教育技法の開発促進を図るために学科内FDの促進を継続する。
- 4)教員相互の教育技法を学び合う機会として公開授業の促進を継続する。

【中長期の課題】

これまでの研修テーマを概観し、今後、5年間で取り組むべきFD研修会のテーマを検討することによって、継続性があり、教員のニーズにあった研修計画の立案を目指す。

表4.学科内FD活動の取り組み概要

	目標	活動の概要	成果
M	授業評価を高める工夫を考えるために、各教員の授業方法の改善、及び科目間の連携を深める。	1)デジタルコンテンツやクリッカー、アンサーパッド、ミニアンケートを含めたmanaba活用など、利用可能なツールを用い学生の理解度向上について意見交換を行った。 2)授業公開可能な教員の同意を得、FD委員を中心に見学を行った。	今回、授業の工夫を教員が評価することにより、学習の目的、目標、まとめなどを客観的に考え直すことができ、各自の授業を振り返る良い機会になった。今後も、授業評価を取り入れ各教員の授業方法の改善、及び科目間連携を深めたい。
N	全学FD活動と関連させ、「主体的かつ深く思考する学生を育成するための教育技法」の在り方を検討する。	模擬授業の見学に基づく意見交換を通して、学生が主体的にかつ深く思考する授業方法について理解を深め、かつ、授業の工夫を他者と共有し、自己の教育技法を再考する機会を得た。実施：8月、参加者23名	研修後のアンケート調査によると8割が満足と答え目標は達成できた。感想として、模擬授業から多くの学びを得、グループワークで意見交換できたことへの満足感が寄せられた。今後は教員の経験年数別の目標や役割の果たし方を考えていきたい。
E	学生が自らの学びを深化させる教育システムの構築を目指し、授業公開を行い、アクティブラーニングの効果的な活用を具体的に検討する。	アクティブラーニング型の模擬授業を見学後、グループワークと発表、反転授業、ピアリーディング、体験—共有—課題探求を経験させる授業など、さまざまな形でアクティブラーニングを授業に取り入れた具体例を学科教員で共有した。	アクティブラーニングには多くの利点と同時に課題があることも議論した。今後、学生の学びを深めていくため、学生が体験後に学びを省察すること、またそれには豊かな言語活動が求められることを教員が理解してアクティブラーニングを授業に取り入れることの必要性を共有できた。
O	定例の勉強会を開催	1)公開授業参加数 14件	1)公開授業参加数14件(昨年度22件)と

	して研究 mind の育成を行い、研究成果をアウトプットして学生教育へ活かす	2)月1回の定例勉強会7回開催(平均参加者数12名)研究の基礎的学習会を実施し、教員からの個別の研究相談には勉強会後に応じる 3)9-10月の期間、柳先生による指導4回開催し3名参加。	減少したため、件数が増えるよう検討する 2)定例勉強会、柳塾の開催が研究実践・研究 mind の育成を図ることの一要因となりテーマ別研究の採択、科研費申請が増加。 3)今後は研究成果の教育への活用を、具体的方法を検討する必要がある。
C C N	実習スクーリングにおける効果的なグループワーク(GW)のあり方を検討する。	研修会を2回実施。1回目はスクーリングにおけるGWを題材に学習目標や対象学生の特性に応じた取り組みについて紹介、ディスカッションした。2回目は主体的な学びを促すため、GWを効果的に取り入れる授業案を検討した。	2回の活動を通して、各領域で実践するGWの課題に気づくことができ、共通課題があることやいくつかの課題解決に向けた改善策についても議論することができ目標は達成できた。
I	教学マネジメント改革の推進に向けて	他大学における同様の試みについて学ぶ取組を重ねてきた。先進的な取り組みがなされている他大学の例をもとに、本学のさらなる改革について検討した。	今年度、機構内FD研修等で得られた先行事例からの知見を踏まえた上で、本学独自の方法により、教学マネジメント第一次改革は終了できた。

7. 図書・紀要委員会 年間活動報告書

委員長 井本 しおん

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・ 紀要・緑葉の投稿規程・査読方法について検討する・ 資料収集について、学生・卒業生からのニーズを汲み上げる方法を検討する・ 機関リポジトリの構築・運用開始
本年度の目標
<ul style="list-style-type: none">・ 紀要・緑葉の規定の整備、査読方法の適正化・ 学生ニーズに基づく資料収集・ 機関リポジトリの運用開始
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>①紀要・緑葉投稿規程の変更（4月・6月改定）主な変更点は次のとおり 英文要旨の英文校正を必須とした、原稿の文字数制限を変更した、投稿原稿はデータ提出とした、テーマ別研究に関しては退職者の投稿も認めることとした。 著作権法の遵守、倫理的配慮や利益相反の明記など、さらにいくつかの変更を予定している。</p> <p>②査読内規の改定（4月）査読回数制限を廃した、原則としてデータでの査読結果提出とした。</p> <p>③学生購入希望図書の募集周知（メール・ポスター・ガイダンスなど）により購入希望の提出が増えた（昨年購入希望件数1件→14件）</p> <p>④購読雑誌タイトルの検討を行い、学科意見の集約をもとにタイトル見直しを実施した。（新規購読5誌、購読中止10誌）</p> <p>⑤機関リポジトリ運営会議をKTU研究開発センターと合同で立ち上げ、リポジトリ運用規程を定めて、それに基づき運用を開始した。（公開29年3月31日）</p> <p>目標達成度の評価：1. できた 2. <u>ほぼできた</u> 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>紀要・緑葉編集委員会を含め10回の委員会を開催した。検討内容については次の通り。他に臨時紀要編集委員会を2回行った。紀要緑葉についての編集業務をそれぞれ行った。</p> <p>第1回委員会（4月18日）本年度活動方針</p> <p>第2回委員会（5月9日）投稿規程・執筆要領変更（テーマ別研究論文は旧職員も投稿可、英文校正は必須、査読回数制限廃止）</p> <p>第3回委員会（6月13日）機関リポジトリの運用について学科周知。紀要投稿の締切についての検討、平成27年度図書館利用状況報告</p> <p>第4回委員会（7月11日）査読内規の変更（6月〆切のスケジュール）次年度購読雑誌、ビブリオKoToLa推薦図書依頼について学科検討持ち帰り</p> <p>第5回委員会（8月8日）緑葉投稿締切延期、投稿原稿について検討、次年度雑誌購入について検討</p>

<p>第6回委員会（9月12日）緑葉投稿確認ビブリオ KoToLa 図書推薦状況確認、学術フォーラム抄録作成状況確認、次年度購読雑誌検討</p> <p>第7回委員会（10月17日）紀要・緑葉編集委員会 緑葉発行（4編）編集修正、紀要投稿（15編）査読者検討</p> <p>ビブリオ KoToLa 推薦図書購入検討、次年度購入雑誌決定、</p> <p>第8回委員会（12月5日）紀要編集委員会（査読状況確認） 緑葉配布について、次年度図書購入希望依頼について、ブックリユースについて</p> <p>第9回委員会（1月23日）紀要編集委員会（査読状況確認） 紀要投稿規程の変更（投稿数の制限、投稿時の倫理的配慮の確認、HP 公開をリポジトリによる公開とする、など）申請書様式の変更、図書館利用細則の変更（貸出制限冊数を5冊→7冊へ）延滞ペナルティの緩和</p> <p>第10回委員会（3月13日）今後の課題、次年度方針、図書館利用状況報告</p>
<p>今後の課題</p>
<p>次年度課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・貸出数の減少状況を鑑み、電子書籍の利用を含めた資料収集方針について検討する <p>中期課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育改革に関する図書館としての取り組みを検討する

8. 研究倫理委員会 年間活動報告書

委員長 澤田 浩秀

本年度の課題
1. 学生に対する研究倫理教育の実施 2. 実施研究審査申請書、チェックリストの記載内容についての見直し
本年度の目標
1. 学生に対する研究倫理教育は、看護学科以外は実施されていなかったため、他学科においても実施すること。 2. 研究審査申請者が申請書等を記載する際にできるだけ効率良く記載できるように、実施研究審査申請書、チェックリストのフォーマットなどについての見直し行う。
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u> 不正行為への対応の取り組み</p> <p>1. 教職員に対する研究倫理教育は、平成 27 年度に e-learning および出版物と規程の通読を各自の責任で行う形式をとり、閲覧後に誓約書を提出していただいた。学生に対する研究倫理教育については、卒業研究の実施される医療検査学科、看護学科、こども教育学科それぞれの学科で、講義形式で実施された、</p> <p>2. 実施研究審査申請書、チェックリストの記載内容についての見直しを行った。これらには、利益相反、および研究倫理教育研修の受講についての記載またはチェックを必要とすることとした。また、同意書とともに同意撤回書の提出を求めた。</p> <p>3. 研究倫理教育研修の受講証の発行について、他機関と共同研究を行なう場合などで提出を求められる場合に備え、希望される教員には発行することにした。</p> <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>1. 本年度は計 11 回の委員会を開き、33 件の申請書の審査と、上記課題について検討した。</p> <p>2. 下記に示す 33 件の研究倫理申請書（医療検査科 4 件、看護学科 10 件、こども教育学科 2 件、口腔保健学科 12 件、教育イノベーション機構 3 件、看護学科通信制課程 2 件）と看護学科、医療検査学科の卒業研究について審議し、33 件分を承認した。</p> <p>平成 28 年度研究倫理申請内容</p> <p>大学</p> <p>16-01 佐野大亮（医療検査学科） 子宮頸がん検診における日本と海外の比較～日本の検診受診率～ 承認（5月17日）</p> <p>16-02 佐野大亮（医療検査学科） 子宮頸がんの啓発活動の認知度と性教育について 承認（5月17日）</p> <p>16-03 西出順子（看護学科） 在宅で生活する精神障がい者と家族のストレスに焦点を当てた支援方法の検討—訪問看護師のストレスへの着目点とケアの成果—</p>

承認 (5月17日)

- 16-04 鵜飼千鶴(看護学科) 地域連携室実習指導者の学習支援の構造 承認(5月17日)
- 16-05 澁谷雪子(医療検査学科) 唾液の臨床検査ー口腔内刺激前後の唾液成分の変動および唾液成分と栄養評価項目との関係ー 承認(5月17日)
- 16-06 野村秀明(教育イノベーション機構) 薬剤の臨床検査～ラクトフェリン摂取による脂質代謝と腸内環境の変化～ 承認(5月17日)
- 16-07 児玉明子(看護学科) EPA 看護師・看護師候補者の退職に至る思いに関する研究 承認(6月10日)
- 16-09 柳本有二(看護学科) 歩行困難者の改善を目的とした歩行支援機の導入について 承認(7月11日)
- 16-10 松尾寛子(こども教育学科) 尼崎市における保育研修についての実態調査と今後の保育研修のあり方についての検討 保留後承認(8月9日)
- 16-11 鎌田美智子(看護学科) 看護学臨地実習科目におけるクライテリア(到達基準)設定とその評価に関する調査研究 保留後承認(8月9日)
- 16-12 伊東美智子(看護学科) 社会人経験後に看護職を選んだ人たちの語りをきくー学びほぐしに着目してー(公表審査課題) 承認(8月9日)
- 16-13 山崎麻由美(教育イノベーション機構) 歯科衛生士養成課程における専門英語教育の教授法及び教材の効果測定 承認(9月13日)
- 16-14 脇本聡美(こども教育学科) 初等英語教育教員養成プログラム開発 保留後承認(9月13日)
- 16-15 近藤みづき(こども教育学科) 幼児期の運動発達における身体知の発生に関する研究ー4歳児への追跡調査ー 承認(1月11日)
- 16-16 岩切由紀(看護学科) 超急性期重症外傷患者の身体機能の安定化に向けた熟練看護師の看護ケアの概念構造 承認(1月11日)
- 16-17 布引治(医療検査学科) 細胞病理標本を用いた癌関連遺伝子変異の検索 承認(継続課題) 承認(2月14日)
- 16-18 木村聡子(看護学科) 精神障がい者に対する学生の「人間対人間としての深い関心を寄せる力」の構成要素の検討 承認(2月14日)
- 16-19 柳本有二(看護学科) 認知症患者の日常生活活動における脳機能状態についてー日常生活活動時の脳波測定からー 承認(3月8日)
- 16-20 伊東美智子(看護学科) 屋根瓦式教育を用いた分娩期看護演習の効果評価 承認(3月31日)

短期大学部

- 16-01 金久弥生(口腔保健学科) 開口力に関連する口腔機能の検討 承認(5月17日)
- 16-02 東麻夢可(口腔保健学科) 豆とばしにおける豆の飛距離に影響を与える口腔機能の検討 承認(5月17日)
- 16-03 濱清華(口腔保健学科) 唾液中の細菌数の変動に影響を与える要因に関する研究ー口腔清掃および安静時唾液分泌量との関連についての検討ー 承認(5月17日)
- 16-04 原久美子(口腔保健学科) 「細菌カウンタ」を口腔保健教育に導入する意義につ

	いての検討 承認 (5月17日)
16-05	金久弥生 (口腔保健学科) 開口力と舌圧との関係性に関する口腔機能の検討承認 (7月11日)
16-06	松原渉 (看護通信制課程) 看護師2年課程 (通信制) 看護学生における暴力被害体験の実態調査 承認 (8月9日)
16-07	金久弥生 (口腔保健学科) 口腔機能と食生活との関連性に関する検討承認 (8月9日)
16-08	武ユカリ (看護通信制課程) 訪問看護師に対する利用者・家族による暴力に関する電話聞き取り調査 承認 (10月14日)
16-09	破魔幸枝 (口腔保健学科) 臨地実習生の自己肯定感と自己意識の変化 (公表審査課題) 承認 (11月18日)
16-10	濱清華 (口腔保健学科) 口唇閉鎖訓練効果の定量的評価に基づく有効な訓練方法の検討 承認 (12月14日)
16-11	足立了平 (口腔保健学科) 口腔の健康が健康寿命の延伸に与える影響に関する研究 (第一報) 口腔機能評価と栄養状態の関連についての検討条件付き承認 (12月14日)
16-12	足立了平 (口腔保健学科) アパタイト担持不織布が口腔内細菌に与える影響に関する研究 承認 (12月14日)
16-13	原久美子 (口腔保健学科) 口腔保健学科学生への液体製剤に関する介入研究承認 (3月8日)
16-14	足立了平 (口腔保健学科) 0.3w/v%セチルピリジニウム塩化物水和物 (CPC) 配合口腔咽頭用スプレー剤使用試験 承認 (3月8日)
今後の課題	
教職員に対する研究倫理教育として、平成27年度に e-learning を中心とした各自の責任での形式を取り入れたが、来年度は研修会を取り入れた形で行うことを企画する。研修会に出席できない教職員をつくらないようにすることと、研修会の講師を選定する必要がある。	

9. 個人情報保護委員会 年間活動報告書

委員長 岩井 重寿

本年度の課題
1. 「いわゆるマイナンバー法」の施行への継続的対応 2. IR 推進室の設置に伴う個人情報の取り扱い
本年度の目標
○ 社会の動向や新しい組織体制をふまえた個人情報保護に関する対応をおこなう。 ○ 継続して個人情報の適正管理に向け、事例報告を通して教職員の個人情報の取扱いに関する問題意識を高める。
主な活動内容・結果
<u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u> ○ (1)「マイナンバー制度」への対応 法施行に伴い運用が開始された「特定個人情報」の取扱いについて、本委員会とのかかわりなど、下記のとおり共通理解を図った。 ① マイナンバー制度の運用は、国制度として実施されるもので、国制度の方針に基づき運用されるものである。 ② 漏洩事案等が発生した場合には、本委員会は事務局等と連携し、第三者的な審議機能を果たし、必要な意見を述べるものである。 等 (2)IR 推進室の設置稼動にかかる個人情報の取扱いについて以下の原則が審議了承された。 ① オリジナル情報の管理責任は、これまでどおり各学科・各課室にあり、IR 推進室はそれらを編集した「IR 情報」について、管理責任を負う。 ② IR 情報の管理のあり方について、及びその情報提供依頼書が審議・承認された。 ○ 同意書、健康調査票などの運用について、事例に沿った報告を受け確認した。 目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった
<u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u> 委員会は6月及び2月に開催された 6月： ○ マイナンバー制度の運用に係る取扱いについて、運営委員会での審議を経、決定した方針について、本委員会で報告を受け、審議了承を得た。あわせて、IR 情報について取扱等を審議、了承を得た。 ○ 学生の同意書の取得について進捗状況の報告を受けた。 ○ 新たな個人情報である「健康調査票」の取得状況等について報告を受けた。 2月： ○ 同意書は学科・キャリア支援課の連携により、全件の回収がなされたことが報告された ○ 健康調査票は、健康管理室において審議され、一部アンケートの文言を修正したこと、及び回収・運用状況について報告された。

○ マイナンバー制度に伴う特定個人情報の収集については、制度に基づき適切に管理運用され、IR 情報についてもマニュアルに基づき管理されていることが報告された。

○ インターネットを介しての情報のやり取りやメールアドレスの取扱等について問題提起がなされ、継続審議となった。

今後の課題

1. 同意書・健康調査票等について、引き続き慎重な管理と運用に努め、改正が必要な場合、本委員会において審議対応する
2. 本学の研究教育の進展に伴い、IR 情報の活用がますます求められることから、その取扱について、運用状況を的確に把握する。
3. 中長期的に、インターネット等、ネット活用に係る情報の取扱について、本学でどのような取り組みが可能なのかを審議する。

10. ハラスメント防止対策委員会 年間活動報告書

委員長 生島 祥江

本年度の課題
ハラスメント防止意識の向上に取り組むとともに、学生に対してハラスメントにかかる相談体制の周知策の強化を図る。
本年度の目標
1. 教職員及び学生のハラスメント防止意識の向上を図る 2. 学生に対して本学のハラスメント防止に対する施策の周知を図る
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>1) 柴山慶太 弁護士（弁護士法人 SOLA 法律事務所）を講師に招き、「その言動が“ハラスメント”」をテーマに、12月26日教職員を対象に研修会を実施し、ハラスメント防止意識の向上を図った。77名の参加があった。</p> <p>2) 4月の学内オリエンテーションにて、新入生にリーフレットを用いて、本学のハラスメントに対する考え方、ハラスメントが生じた場合の相談対応、措置について説明し、学生にハラスメント防止意識をもってもらい、本学のハラスメント防止に対する施策を知ってもらった。</p> <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>1. 委員会を10回開催した。</p> <p>2. 年度初めに委員会規程、ハラスメント対応にかかる相談マニュアルを確認し、委員会を運営した。（平成28年4月1日より新規程に基づき活動）</p> <p>3. 毎回の委員会にて、相談員として委嘱された委員とハラスメント防止対策委員会メールへの相談状況を確認した。委員会に報告された相談事例は2件であった。ハラスメント内容を確認し、教職員のハラスメント防止意識の向上のために、匿名性を遵守しながら委員から各学科・部署に報告した。</p> <p>4. 研修会の企画準備・運営を行った。</p>
今後の課題
<p>1. ハラスメント防止意識の向上のために教職員に対しては定期的に研修会を実施する。（2年に1回）学生には、年度初めの学内オリエンテーションで学生便覧等を用いて啓発する。</p> <p>2. ハラスメントにかかる対応について年度初めの学内オリエンテーションで、委員会の相談対応機能・問題解決機能について学生に理解を得る。また、掲示する。</p> <p>3. ハラスメント防止対策ガイドラインの作成を中長期課題とする。</p> <p>4. 今後も委員会で報告されたハラスメントにかかる相談事例については、全教職員が認知し、ハラスメント防止につながるようにする。</p>

11. 危機管理（災害）委員会 年間活動報告書

委員長 栃倉 匡文

本年度の課題
1. 災害時の学生安否確認のためのシステムの検討 2. 福祉避難所との連携
本年度の目標
(新規事業) ①学生の安否確認システムの構築 (継続事業) ①避難訓練の実施と施設設備の点検等 ②自衛消防にかかる訓練・講習への参加
主な活動内容・結果
1. <u>目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）</u> ： (1) ポータルサイト及びメールによる学生の安否確認システムの立ち上げ 標記システムを立上げ、稼働の検証を行なうとともに、情報の流れについて、教授会（12月19日）、課長連絡会（12月15日）で報告し教職員に周知を図った。その上でオールメールにより学生に周知した。（12月19日稼働開始） (2) 長田消防署による消防団「学生在学団員」3名の辞令交付 及び訓練用資機材（消火器指導セット4基）贈呈式（10月14日 本学） (3) 真陽地区避難訓練における津波避難訓練への学生の参加（11月13日水笠公園） (4) 新入生の避難訓練 （防災マニュアル・避難経路説明、館内放送・確認、消防署通報）（4月8日） (5) 長田区自衛消防隊連絡協議会が実施する長田区消火技術会への参加（職員4名） （10月23日 西代蓮池公園） (6) 自衛消防業務講習会への参加（職員1名）（12月9日神戸市民防災総合センター） (7) 緊急連絡網による連絡訓練を行なった（1月21日（土） 夕方） 2. 自然災害の発生と対応 ① 熊本地方を震源とする地震 4月14日（木） 21:26～ 災害救助法適用市町村（葦北郡芦北町、八代市）の出身在学生 2名 ② 台風16号 9月20日（火） 10:16 暴風警報発令（5:25 大雨・洪水・波浪警報） 2時限以降の休講 本学避難所開設準備（避難者はなかった） ③ 台風18号 10月5日（水） 10:16 暴風・波浪警報 2時限以降の休講（スクーリング中の通信制課程は除く） ④ 鳥取県中部を震源とする地震 10月21日（金） 14:07 災害救助法適用市町村（東伯郡北栄町）の出身在学生 1名 3. 福祉避難所については、神戸市の方針をまって検討協議することとなった。

目標達成度の評価：1.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：

1. 委員会開催 4月8日、11月22日、3月31日

4月 防災訓練の実施に伴い開催し訓練放送の確認等を行なった。

11月 ポータルサイトの立上げ、緊急連絡網の確認を行なうとともに、諸報告を行なった。

3月 新入生に対する避難訓練計画、28年度業務報告と新年度以降の取り組み等について話し合った。

自然災害への対応は、委員長を中心に情報共有に務め、法人本部と連携を図った。

2. 学科代表者を含む緊急連絡網を整備し、土曜日の夕方に確認訓練を行なった。

3. 新2号館の竣工に伴う必要な届を長田消防署に行なった。

今後の課題

1. 危機管理に関わる体制・システムの実施・検証に努める。

2. 委員会委員を中心に、消防団「学生在学団員」等学生の協力を得て、防災訓練を実施する。

3. 2の訓練をふまえ、長田消防署の協力を得て、学内全体の防災訓練の実施を検討する。

12. 就職委員会 年間活動報告書

a. 医療検査学科・就職委員会 委員長 井本 しおん

本年度の課題
1. キャリア支援課と就職委員会が共有できる情報システムが必要。 2. 模擬面接では、学生から改善策をフィードバックできるような工夫が必要。 3. 教養講座などの企画に対する学生からの評価をフィードバックする工夫が必要。 4. 学生の動向確認を効果的に進めるための工夫が必要。
本年度の目標
1. キャリア支援課と緊密に情報共有し、学生の就職活動状況を的確に把握する。 2. M2, M3 の時点でのマナー講習や小論文対策を強化する。 3. 学生の出身地を調べ、M1～M3 の出身地に出向く。 4. 就職先として病院以外の分野にも学生の視野を広げていく。
主な活動内容・結果
<u>1 目標達成に向けた活動内容・結果(根拠資料)</u> 1. キャリア支援課と就職委員会が共有できる情報システムの構築はできなかったが、代替策としてメールによる情報交換を活発に行うことで対処した。 2. M2 では4回のガイダンスにおいてマナーについての説明を強化した。M3 ではほぼ月1回ガイダンスを行い、小論文作成を外部講師による講習も取り入れ重点的に行った。 3. M1～M3 学生の出身地を調べ、広島出身の学生が増えてきていることから、キャリア支援課職員が10施設(広島市5、福山市4、尾道市1)を訪問し、次年度以降の求人情報の提供を依頼する活動を行った。 4. M3 に対し、6月「先輩の話を聴く会」では三和化学研究所、9月「進路勉強会」では日本食品エコロジー研究所や宮野医療器など、幅広い領域を紹介することができた。 5. 課題2, 3については、学生の意見を取り入れ6月に模擬面接のロールプレイを実施して重要ポイントを解説するなど、新たな取り組みを行った。 6. 課題4については、M4 学生を5人の就職委員が分担して受け持ち、速やかに就職活動状況を把握すべく取り組みを進めた。 目標達成度の評価：1. できた 2. <u>ほぼできた</u> 3. あまりできなかった 4. できなかった
<u>2 委員会・組織の主要な活動内容・結果(根拠資料)：</u> 1. 就職委員会を月1回以上開催した。 2. ガイダンス M1：入学式当日の教員紹介時に、平成27年度の就職状況を保護者に説明 M2：4回実施。うち2回は春休みの病院見学に対応するもの M3：ほぼ月1回実施した。履歴書、小論文に必要な文章力を中心に就職試験に必要な基礎力養成を図った。小論文作成では外部講師による演習も実施した。 M4：履歴書、文書作成の指導、面接でのマナー等を前期に月2回の頻度で実施した。 3. 一般教養対策講座・SPI対策講座

<p>昨年とほぼ同様である。</p> <p>公務員・一般教養対策講座、SPI対策講座をM2・M3対象に2日実施した。</p> <p>公務員・一般教養直前講座：M4対象に実施した。</p> <p>4. 病院・企業説明会（企業勉強会）M3対象に2回実施した。</p> <p>6/11：先輩の話を聴く会：病院以外の様々な領域で活躍している卒業生による説明会</p> <p>9/10：進路勉強会：検査センター、健診センター、一般病院、医薬品医療機器販売会社、食品・環境等検査機関という5つの異なる領域を各担当者が紹介。</p> <p>5. 個別就職支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 進路希望調査のための個別面談：M3後期に実施。 ・ 就職試験直前の模擬面接：M4の希望者に年間を通じて実施した。一人に1時間近くかけて指導、アドバイスを行った。
今後の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 12月末時点での就職内定率（本年度約6割）を、8割程度に高める。 2. 応募先選定段階でのアドバイスをより適正に実施できるようにする。 3. 学生の動向確認を迅速に行えるようキャリア支援課との連携をさらに高める。

b. 看護学科・就職委員会 委員長 畑 吉節未

本年度の課題
学生の主体的な就職や進路決定への取り組みを継続し、効果的な進路指導を行う必要がある。
本年度の目標
<ol style="list-style-type: none"> 1) 学生が自己の将来像を自覚して、主体的に進路決定や就職試験を行うための効果的な支援を行う。 2) 看護師、保健師、養護教諭などの学生の志望に応じた支援を行う。 3) 就職指導に生かすために、卒業生の就職状況の把握方法について検討し、就職委員で可能となる活動内容の検討を行う。
主な活動内容・結果
<p>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 3年生に対し年頭計画していた4回の就職支援ガイダンスに加え、今年度の就職環境の変化に応じ、来年度の就職に向けたガイダンスを急遽1月に追加開催した。また、各学生の指導担当を決め、就職進路相談を例年より3ヶ月早く対応する体制を作り、状況に即した活動を実施することができた。 2) 選択制である保健師養成課程や養護教諭養成課程の教員と円滑な連携が図れた。 3) キャリア支援課が窓口となり、卒業生の再就職に関する相談を受けることで就職状況の把握に努めた。しかし、卒業生の就職状況の把握方法については、今後も検討していかなければならない課題である。 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</p>

<p>1) 委員会を 11 回開催した（別途根拠資料、看護学科就職委員会活動の実際）。</p> <p>3 年生に対してタイムリーな時期を考えたのガイダンスやOB・OG 懇談会、教育連携病院との連携活動については、主担当を決め企画し、効率的に活動することができた。</p> <p>また、4 年生に関しては、個別指導、模擬面接の実施、不合格学生に対しては、担当教員と合わせ委員長・キャリア支援課を中心に委員全員で共有し対応した。</p> <p>2) 上記活動内容を通じ、学生への就職進路指導について、学生の主体的な決定を支援する取り組みを図った。学生による就職委員会の支援活動への評価は、良好であった。</p> <p>3) 卒業生の就職状況の把握は、今後の就職指導や再就職者支援につながるため、今後も継続していく必要がある。</p>
今後の課題
学生の主体的な就職や進路決定への取り組みの支援を継続し、効果的な進路指導を行う必要がある。

平成 28 年度 看護学科就職委員会活動の実際

定例会議：第 4 月曜 13：00 ～ 14：30

場所： 7307 多目的室

回	日時	主な内容	参加人数
1	4/4	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度委員会の活動方針と活動計画 ・第 1 回就職ガイダンスについて ・OB・OG 懇談会の日程について 	89 名 (100%)
	4/8	4 年生 第 1 回就職ガイダンス	80 名 (91%)
		3 年生 第 1 回就職ガイダンス	89 名 (100%)
2	4/25	<ul style="list-style-type: none"> ・第 1 回就職ガイダンスの評価 ・OB・OG 懇談会の計画について 	
3	5/23	<ul style="list-style-type: none"> ・4 年生個別面接状況の確認 ・OB・OG 懇談会（第 2 回就職ガイダンス）役割確認等 ・履歴書写真撮影について 	
	5/28	3 年生 OB・OG 懇談会（第 2 回就職ガイダンス） 卒業生 看護師 6 名（5 施設） 保健師 1 名	88 名 (100%)
4	6/27	<ul style="list-style-type: none"> ・OB・OG 懇談会（第 2 回就職ガイダンス）の評価 ・第 3 回就職ガイダンス計画 ・4 年生 進路状況の確認 ・保健師・養護教諭の就職窓口教員との連携について 	
5	7/25	・3 年生への就職ガイダンスの日程・計画について	
	9/2	3 年生 第 3 回就職ガイダンス	87 名 (99%)
6	9/26	<ul style="list-style-type: none"> ・第 3 回就職ガイダンスの評価 ・4 年生 進路状況の確認 	
7	10/ 24	<ul style="list-style-type: none"> ・4 年生 進路状況の確認 ・3 年生 追加就職ガイダンス計画 	

8	11/ 28	<ul style="list-style-type: none"> ・4年生 進路状況の確認 ・3年生 第4回就職ガイダンス計画 ・教育提携病院の説明会（第5回就職ガイダンス）の運営 	
9	12/ 12	<ul style="list-style-type: none"> ・4年生 進路状況の確認 ・3年生 第4回就職ガイダンス計画 ・教育提携病院の説明会（第5回就職ガイダンス）の運営 	
	1/16	3年生 第4回就職ガイダンス	86名（98%）
10	1/23	<ul style="list-style-type: none"> ・就職内定状況確認 ・年間活動まとめ（案）・平成28年度評価と次年度計画 	
	2/27	教育提携病院ときわ病院説明会（第5回就職ガイダンス）	87名（99%）
11	3/27	<ul style="list-style-type: none"> ・教育提携病院説明会（第5回就職ガイダンス）の評価 ・国家試験合格状況の確認、就職内定先との調整 ・次年度ガイダンス計画について 	

c. こども教育学科・就職委員会 委員長 橋本 好市

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・2期生求職者が第一希望職種に内定できるよう指導体制のシステム化を図る。 ・就職指導（就職ガイダンス）の内容を精査し動向に応じた対応を図る。 ・企業、公務員（一般行政職）等、四年制大学生として専門職以外の職域に対応できる就職活動システムを図る
本年度の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・四年制大学に相応した職域開発と内定獲得。 ・企業、公務員等の希望者への適切な対応。 ・公立保育所等への合格者増に向けた自治体ごとの情報収集。 ・インターンシップの積極的活用による早期内定の獲得。 ・前年を上回る小学校教員採用試験合格者（正規採用）増。 ・公立対策講座及び模擬試験への受講者増。 ・各委員及び学科教員が学生のパーソナリティを把握した適切な就職指導。 ・各領域で開催される就職フェアへの参加促進。 ・就職試験対策模擬面接の実施。
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>①3回生に対しては、4月～1月にかけて計9回の就職指導ガイダンスを実施した。 これに加えて、ゼミ毎の進路決定面接、公立対策試験講座・模擬試験等の参加、企業向け対策講座等も実施している。</p> <p>②4回生に対しては、前年度就職指導ガイダンスに引き続き、3回実施した。 これに加えて、年度を通して就職試験対策模擬面接を就職委員会メンバーにて実施し、各自治体や法人の特色を考慮した面接力の向上を図った。</p> <p>③就職フェアについては、3月開催の兵庫県福祉フェアを皮切りに、概ね8月までの各職種</p>

の就職フェアへ希望学生を参加するよう促した（2～4 回生へ参加を促す）。参加者数の多いフェアには教員が引率（現場確認）を行った。

- ④5月～2月に開催される各専門職連盟の教員向け就職懇談会等へも職域と地域を考慮した上で教員を派遣した。
- ⑤学生が、希望職場を決定する過程及び希望職場内定獲得のために3 回生後期より（早い学生では2 回生後期から）インターンシップ（保育サポーター、スクールサポーター）を活用するよう働きかけた。
- ⑥1 期生の就職先訪問（御礼及び状況伺い、今後のお願い）として、兵庫県内の全組織体47 施設へ伺った。
- ⑦初めての取り組みとして、学生の見やすさを考慮し、研究棟5 階共有スペースに求人情報を領域ごとに掲示し、かつ、採用試験日程を別途一覧化したものを掲示した。スペースの都合上、就職委員会で専門的観点から掲示情報を精査した（全ての求人情報はキャリア支援課にて閲覧可能ということは学生に伝達済み）。
- ⑧採用試験時への提出書類への添削指導を委員の専門性にに基づき詳細に行い、適切な書類作成に配慮できるよう指導した。

以上の内容に関する詳細の根拠資料は、【就職委員会配布資料及び議事録、キャリア支援課との連携】から把握できる。

目標達成度の評価：1.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：

- ①毎月1 回以上の委員会を開催
参加者：こども教育学科就職委員、キャリア支援課<木村課長・片尾課員>
- ②求職に関する社会的動向の把握、適切な対応への認知を委員会内で共有する。
- ③学生との面談を通じて知り得た学生希望就職先へのインターンシップ（保育サポーター、スクールサポーター）依頼。
- ④内定者数及び当該者の適切な把握と学科内情報共有への取り組み。
- ⑤研究棟5 階に求人情報を掲示するにあたって、求人情報の精査及び採用試験日程一覧表を掲示。
- ⑥公立採用試験の受験方法として、複数地域の採用試験を受験する指導を行う。
- ⑦保護者会開催
日時：3月4日（土）
10：30～13：00 1 年生保護者会 参加者 15 組（面談2 組）
全体会后、コース毎に分科会
14：00～16：30 3 年生保護者会 参加者 18 組（面談11 組）
全体会后、職域毎に分科会

以上については、根拠資料【就職委員会議事録及び配布資料、キャリア支援課との連携】にて把握できる。

● 2期生就職実績 ●

2期生 卒業生 84名、求職意思表示者 80名

- ①公立 保育所・幼稚園 6名 (7.5%) ・保育所；神戸市 (3名)
西宮市・尼崎市 (各1名)
※ 1期生：赤穂市 (1名)
・幼稚園；太子町 (1名)
- ②公立 保育所 臨時保育士登録 3名 (3.8%)
- ②社会福祉法人 保育所 (認定こども園) 21名 (26.3%) 内、町外郭団体1名
- ③学校法人 幼稚園 (認定こども園) 5名 (6.3%)
- ③社会福祉法人 児童養護施設・障害福祉施設・高齢者施設・社会福祉協議会
11名 (13.8%) 内、市・県外郭団体3名
- ④公立小学校 正規採用 8名 (10.0%) 兵庫県 (2名)
神戸市 (2名)
大阪府豊能地区 (1名)
大阪市 (2名)
東京都 (1名)
- ⑤公立小学校 講師登録 18名 (22.5%)
- ⑥企業 7名 (8.8%)
- ⑦進学：兵庫教育大学大学院 1名 (1.3%)

計 80名

● 2期生の就職成果 ●

委員会内において下記の点に留意した就職指導を徹底したことが、2期生の就職成果につながったと考える

- ①組織の規模、将来的安定性、待遇面、キャリアアップ、定着率について
- ②法人内での転勤の可能性 (専門性を活かした)
- ③一法人一組織ではなく一法人複数組織かどうか
- ④公立以外の外郭団体へも視野を広げる
- ⑤男子学生の公務員の可能性 (警察等を含む比較的容易な公務員の職種探し)

以上の点を踏まえ就職指導を行った結果、四年制大学に相応した組織体への就職が拡大した (例、外郭団体、社会福祉協議会等)。組織体として大きな法人へ内定することができた (本学科初法人等への内定を獲得できた)。

今後の課題

- ①専門職短期大学としての伝統に加え、四年制大学として定着するにあたり、男子学生の増加による一般職への就職指導に課題が残る。本学科は専門職養成・排出を第一義的責任としているものの進路変更希望学生、特に男子学生への支援、つまり「ポケット学科」に相当する要素も求められる。したがい、公務員一般行政職が困難な学生が比較的受験可能な公務員種、例えば警察・消防、又は企業等々への就職指導もキャリア支援課と強化していきたい。男子学生の専門職以外の領域での就職率向上は、今後の四年制大学のあり方として学科運営の鍵となろう。

- ②短期大学時代の伝統と実績を踏まえつつも、就職先としてはその組織規模に着目していかなければならない。つまり、四年制大学卒者として求められる社会的（現場）ニーズに対応し、キャリアを活かすことのできる職域と組織体を把握することに努め、専門職としての待遇が保障されている「ホワイト」法人、「ビッグネーム」法人等への内定を獲得できるよう委員会内での情報共有を図り、就職指導を徹底していく。
- ③入学生の増加には、就職実績が鍵となることは周知の通りである。したがって、当該委員会が単なる内定指導委員会に陥らないよう、高校生の志望・入試から卒業までの時系列で就職を把握できるような委員の意識作りを図っていきたい。
- ④保護者会について、1年生保護者の参加人数が例年少ない。主たる3年生保護者への手厚い対応を考慮し、そのあり方及び開催時期について検討していく。
- ⑤小学校教員採用試験合格者数を二ケタに再度引き上げる努力を教員養成コースと連携して取り組んでいく。

d. 口腔保健学科・就職委員会 委員長 上原 弘美

本年度の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 3年間を通じた就職支援活動（ガイダンス含む）の実施。 2. 就職活動の状況を学科教員が共有して学生の希望する進路選択を支援する。 3. 国家試験への取り組みと並行しての就職活動となるため、国家試験委員会と情報を交換し、学生の学習状況を鑑みながら、支援していく。 4. 求人施設開拓を行い、病院・企業への就職支援を継続して強化する。 5. 卒業生の再就職等の就職支援の基盤作り
本年度の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・学生が個々の能力を発揮できる就職先を選択できるように支援する。 ・就職委員会と3年生担任、キャリア支援課担当者、また国家試験対策委員会とが、情報を共有し、多面的に学生を支援する。 ・就職ガイダンスを適時に開催し、就職への意欲を高める。 ・既卒生の勤務する施設へ挨拶に出向くなどして連携を強化する。 ・卒業前にもガイダンスを開催し、卒後の働き方について指導する。
主な活動内容・結果
<p>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年次に2回（4月・11月）、3年次に6回の（4月・5月・9月・11月・12月・3月）ガイダンスを開催した。 ・そのうち、2年次11月と3年次4月には、キャリアサポーターを招き、自己の経験から在学生に対しアドバイスをしてもらい、進路選択の支援をおこなった。 ・3年次5月のガイダンスでは、自己分析の時間を設け、自己アピールポイントの整理や、将来のなりたい自分を探り、進路選択への準備とした。 ・希望者には就職委員による個別面談をおこなった。 ・求職の状況は、キャリア支援課が把握したものを、逐次担任・就職委員にメール配信し、情報共有に役立てた。

- ・国家試験委員会から、校内模試等の成績結果を提供してもらい、就職支援の参考とした。
 - ・希望者にはキャリア支援課と就職委員で模擬面接を実施した。
 - ・求職希望の既卒生が来学した際には、就職委員会委員が面談をおこない、再就職の相談に乗った。うち、1名は企業への就職が決まった。
 - ・既卒生の勤務する病院等へは、キャリア支援課担当者による訪問、挨拶をおこなった。
- 目標達成度の評価：1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった
2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：

- 1) 就職委員会の開催 8回
- 2) ガイダンスの開催 2年次：2回 3年次：6回
- 3) キャリアサポーターの話を聞く会の開催
 - 3年生：4月：病院・企業に勤務する、また専攻科へ進学した卒業生
 - 2年生：11月：小児歯科・矯正歯科・一般歯科医院に勤務する卒業生
- 4) 小論文講座の開催 1回 8月 病院・企業・進学希望者19名

今後の課題

- ・学生一人一人が自分の目指す将来の姿をイメージしながら大学生活を送れるように、早期より適時にガイダンスを実施する。
- ・国家試験への取り組みと並行しての就職活動となるため、国家試験委員会と情報を交換し、学生の学習状況を鑑みながら、支援していく。
- ・既卒生の勤務する病院等との連携を深め、採用状況などの情報を確保するようにする。

13. 国家試験対策委員会 年間活動報告書

a. 医療検査学科・国家試験対策委員会 委員長 坂本 秀生

本年度の課題
最終学年の国試対策だけでなく、履修制限者を含めた成績不振者へ学科全体での対応
本年度の目標
成績不振者の早期対策を行い、少しでもよい国家試験合格率を上げる。 既卒生の国家試験合格率の上昇。
主な活動内容・結果
<p>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</p> <p>年初に年間予定を立て、それを達成するために毎月1回の国試対策委員会にて基本的計画を確認し、学生の学習進捗状況を確認しながら組織的に国試対策を行った。特に前期の模試では成績不振者を早期に把握し、個別指導に近い形式で補習を行った。</p> <p>後期の総合医学検査演習試験の結果を毎回解析し、ポータルシステム及びmanabaを利用して国試対策での注意点を伝達した。また、学生達の不安を除き学生意欲を上げるため、要所所でガイダンスを行った。</p> <p>国家試験の頻出項目を学習できるよう、最新版の国家試験問題を含めた国試対策問題集を作成し、3年時から授業の参考資料及び国試対策用の資料として、在学生だけでなく国試対策を希望する卒業生にも配布した。</p> <p>合格率をみると、本学新卒者88.1%であり、全国新卒者の89.9%と同等であった。合格者の内訳を確認すると4年で卒業した学生は92.0%であるのに対し、5年以上で卒業した学生は55.6%と合格率に大きな差が生じた。また、既卒生に関しては50.0%と全国平均の28.5%をはるかに上回った。卒業生合格者の内訳を確認すると浪人1年目でしかも大学に通った者だけが合格し、2年以上浪人している者では1名の合格のみであった。</p> <p>前期から成績不振者、浪人生への指導を行った成果もあり、特に既卒生の合格率を挙げられた点は評価できる。これらの合格率達成は課程外での教員に献身的とも言えるサポートがあった。</p> <p>【根拠資料:国試対策委員会議事録、2016年度版国試対策問題集】</p> <p>目標達成度の評価：①.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった</p> <p>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</p> <p>3月31日 62回国家試験オリジナル問題模試</p> <p>4月15日 M4第1回模擬試験</p> <p>4月22日 第1回委員会 年間スケジュール決定、成績不振者への対応策</p> <p>4月25日 成績不振者へ補習開始 (5月24日までの平日に毎日90分)</p> <p>5月19日 M4第2回模擬試験</p> <p>5月26日 第2回委員会 国試対策問題集配布、既卒生への国試対策案内</p> <p>5月26日 M4前期1回目補習開始 14名(6月17日までの火～金1限目)</p> <p>6月6日 既卒生へ国試対策案内発送</p>

6月14日	M4 第3回模擬試験
6月24日	第3回委員会 60回国試改変問題作成、M3, M4: 模擬試験について
7月5日	M3 第1回模擬試験
7月15日	M4 第4回模擬試験
7月22日	第4回委員会 M4 夏補習の概要決定
8月25日	第5回委員会 成績不振者の把握と対策、後期の予定確認
8月26日	M4 第5回模擬試験
8月28日	卒業生によるガイダンス
9月30日	第6回委員会 全国模試の解析、学内模試作成
10月7日	M3 第2回模擬試験
10月28日	第7回委員会 M4:成績不良者と欠席者の把握
11月25日	第8回委員会 医歯薬模試2回分結果から動向分析
12月6日	M4 後期2回目補習開始 (12月28日まで)
12月13日	M3 第3回模擬試験
12月17日	臨床検査学教育協議会模試A
12月25日	第9回委員会 M4:成績不良者への補習方法、今後の補習策
1月20日	M4 後期3回目補習開始 (1月29日まで)
1月27日	第10回国委員会、M4:国試直前の対応
2月3日	M4 後期4回目補習開始 (2月19日まで)
2月12日	臨床検査学教育協議会模試B
2月17日	第11回委員会 国試ガイダンスの確認、模範解答作業の確認
2月20日	国試受験ガイダンス
2月22日	第63回臨床検査技師国家試験、大阪商業大学にて激励
2月23日	模範解答作成
2月23日	学内自己採点、国試後ガイダンス、協議会への報告
3月24日	第12回委員会 63回国試の分析、27年度の振り返り
今後の課題	
よい国試合格率をここ数年は継続しているが、それを達成ため教員の負担がかなり多い。国公立や私学の伝統校のように、学生が自ら能動的に学習を行える仕組みを整えたい。	

b. 看護学科・国家試験対策委員会 委員長 谷口 由佳

本年度の課題
1) 学生の主体的な取り組みの支援 2) 学習環境の整備
本年度の目標
学生が主体的に国家試験に対する学習姿勢を培い、学習方法を確立できるよう支援する。そのために、以下の内容を検討し、活動を進めていく。 1) 学生の主体的な取り組みの支援

- ① 学生国家試験対策委員の指導・支援
- ② 模擬試験結果から要支援学生を検討し、主体的に学習できるよう指導・支援する。
- ③ 3年次の早期から国試の取り組みへの企画・運営について具体的に指導・支援する。
- ④ 低学年（1年生・2年生）が、国試を意識した取り組みができるよう支援する。

2) 学習環境の整備

- ① 後期には「国試学習」のための教室を確保し、学習環境の調整を図るとともに、学生たちが主体的に学習に取り組めるよう支援する。
- ② 医学書院 WEB での学習環境が整うよう支援する。

主な活動内容・結果

1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：国家試験対策委員会議事録

1) 学生の主体的な取り組みの支援

①学生国家試験委員の指導・支援：学生国家試験対策委員の提案により毎月1～2回の学習会が行われた。教員は、学習会の教材を準備するなどの支援を行った。しかし、学習会への参加者は少数となり、「問題を解くだけなら一人ですのと変わらない」などの意見が聞かれた。学習会の内容や進め方について、助言する必要があるがあった。

②要支援学生の指導・支援：毎回の模擬試験結果から要支援学生を選別して面接し、学習方法の確認や助言を加えていった。国家試験直前まで成績が低迷していた学生には、試験前日まで具動的な学習方法の指導や精神的な支援を行った。

③3年次早期からの国試取り組みへの具体的指導・支援：9月に模擬試験を実施したが、参加者は半数であり、国家試験の受験者としての自覚や主体性の不足が感じられた。

④低学年（1年生・2年生）への国試取り組みへの支援：低学年用模試を作成し、実施した。受験者数は、2年生は8割以上であったが、1年生は1割程度であった。

2) 学習環境の整備

①「国試学習」用教室の確保：夏期休暇中に国試学習用の教室を確保したが、利用者は少数であり、図書館やカルティベ、ハローホール等で学習する姿がみられた。そのため、後期授業開始後は教室を確保をしなかったが、ハローホールの照明や空調の不備、図書館やカルティベの騒々しさなどに不満の声をあげる学生もおり、国試学習用教室の確保の必要性が感じられた。また、本年度は受験会場が遠方となり、ほぼ全員が前日の宿泊を余儀なくされた。急遽、大学の協力を得て宿泊施設の手配を試みたが、時期的に団体での予約は難しく、結果的には、学生が直前になって自身で宿泊施設を探すことになった。

②医学書院 WEB による学習環境の整備：定期的の問題・解答・解説を印刷し、研究棟3階ロビーの国試コーナーに設置した。学生用のパスワードでは解説が印刷できないという不具合があり、使いづらいという学生の意見が多く聞かれた。

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：国家試験対策委員会議事録

毎月1回の委員会を開催した。4年生への国家試験対策を中心に、学生の学習状況の把握、および要支援学生への対応を検討していった。4年生については、学生国家試験対策委員と共に年間計画を立て、円滑な実施が図れるよう支援した。低学年については、模擬試験を実施したり、3年生には実習前のガイダンスにより、国試取り組みへの動機づけを行った。

<p>1) 4年生国家試験対策(対象:看護師国試受験者 86名・保健師国試受験者 26名)</p> <p>①国家試験ガイダンスの実施:4月、8月、11月、2月(計4回)実施</p> <p>②看護師模試の実施:6月、8月、9月、11月、12月、1月(計6回)実施</p> <p>③保健師模試の実施:8月、11月、1月(計3回)実施</p> <p>④看護系予備校による講座:8月、9月、11月、1月(計4回5日間)実施</p> <p>⑤本学教員による講座(母性看護学、小児看護学):12月(各1コマ)実施</p> <p>⑥神陵文庫・看護系予備校合同 問題集・参考書販売会:6月(2日間)実施</p> <p>⑦要支援学生対象集中補講:8月(2日間)実施</p> <p>⑧要支援学生との面接:模擬試験の結果に応じて適宜実施</p> <p>2) 3年生国試対策(対象:87名)</p> <p>①国家試験ガイダンスの実施:9月、12月、2月(計3回)実施</p> <p>②看護師模試の実施:8月、11月、1月(計3回)実施</p> <p>3) 2年生国家試験対策(対象:85名)</p> <p>低学年用模試の実施:7月、9月、11月、12月、1月(計6回)実施</p> <p>4) 1年生国家試験対策(対象:83名)</p> <p>低学年用模試の実施:10月、1月計2回実施</p>
<p>今後の課題</p> <p>第106回看護師国家試験については、本学の合格率は92.4%と全国平均88.5%を上回る結果が得られた。しかし、新卒者でみると、全国平均94.3%に対し、本学の合格率は94.2%とわずかに下回っている。不合格となった者は、4年で卒業所要単位を修得できなかった者や、再履修科目や再受験科目を抱えながら進級してきた者であり、国試の模擬試験結果からも、要支援学生として指導を重ねてきた者であった。これより、このような学生を低学年時から注視し、国家試験に向けた計画的な学習に取り組めるよう支援していくことが必要であり、科目担当者との連携も含め、学科全体での対応が課題と考える。</p> <p>一方、第103回保健師国家試験については、本学の合格率は92.9%と全国平均90.8%を上回り、新卒者も96.2%と全国平均94.5%を上回る結果が得られた。保健師国家試験対策については、目的意識を高くもち、看護師国家試験と並行して早くから学習準備することの重要性を常に意識させている。今後の課題としては、保健師として就職を希望する学生も増えていることから、就職委員会との連携を密にしていく必要がある。</p>

c. 口腔保健学科・国家試験対策委員会 委員長 福田 昌代

<p>本年度の課題</p> <p>①過年度生の学習支援</p> <p>②基礎科目の成績向上</p> <p>③学生の主体的な学習方法の検討</p>
<p>本年度の目標</p> <p>国家試験合格100%を目指すため、自主的な学習を支援し、成績不良者に対しては個別に学習支援を行う。また、カリキュラム変更に伴う国家試験対策スケジュールを効果的に計画する。</p>

主な活動内容・結果

1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：

- ・100%合格を目指し、業者模擬試験を12回、校内模試を10回実施した。この模擬試験を効果的な時期に配置し、学生の学習結果に繋がる資料として活用した。また、学生個人にも自分の成果を確認する資料として活用させた。
- ・基礎科目の学習を強化するため、前期の実習期間中帰学日に基礎科目の試験と解答解説を行った。また、8月初旬に基礎科目の業者補講を学校で開催した。
- ・自己評価・振り返りシートを作成し、毎回自分の成績を確認させ、それを教員が把握し学習方法や現状に問題のある学生を早期に発見して面談等で対応できるように工夫した。
- ・12月末の時点で成績不良の学生には保護者を交えて面談を行い、学習を促した。
- ・昨年度に引き続き学生国家試験委員を選出し学生リーダーとして積極的に学習を促す工夫を行った。
- ・問題の難易度によって成績のバラつきがあったため、難易度を高く設定し、学生の対応を行った。成績不良の学生については個別に勉強会を開催し、学習力の向上に努めた。

<結果>

- ・合格率100%だった。（全国合格率93.3%）全国合格率が昨年より2.7ポイント低下したが、難易度を高く設定した対策が本学100%合格に結びついたと考えられる。

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：

①委員会の開催

月1回（第4月曜開催）

内容は委員会議事録参照

②国家試験ガイダンスの実施

第1回：4月8日（金）国家試験受験について、年間スケジュールについて

第2回：9月26日（月）官報、後期スケジュールについて

第3回：12月19日（月）国家試験受験案内、願書記入方法説明

第4回：12月20日（火）願書記入

第5回：3月2日（金）国家試験受験に対する心構え、受験票配布

第6回：3月7日（火）自己採点、免許申請について

③業者模擬試験の学校実施（12回）

④校内模擬試験（10回）の作成・実施（過去国家試験問題ならびに模擬試験問題を改変）

⑤教員オリジナル模擬試験の実施とそれを活用した補習の実施

⑥DES歯学教育スクール夏期講習会学校開催：8月10日（水）

⑦成績不良者の三者面談の実施（12月20日21日）

<結果>

- ①により学科の国家試験対策の方向性の決定、問題点などを解決することができた。
- ②により学生に国家試験に関する内容についての確に伝達することができた。
- ③④⑤⑥により学生自身が学力を把握することができた。また、成績については個別指導の資料として使用することができたため、国家試験全員合格に導くことができた。

⑦により、保護者にも現状を把握していただき、学習の協力体制を整えることができた。
今後の課題
次年度の課題
①過年度生の学習支援 学習期間が成績不良により延長している学生に対する支援を早期に始める。
②学生の主体的な学習方法の検討 学生国家試験委員の活動の活性化 相互学習サポートの取組み 国家試験対策におけるポートフォリオ導入の試み -模擬試験結果の自己評価、振り返りシートの充実-
③出題基準の変更に伴う過去問題の見直し
中長期的な課題
①入学後の早い時期での学習方法の獲得
②1-2年前期のカリキュラム過密に伴う、専門基礎科目の学習不足
③過年度生を減らす方法の検討
以上は、学科として取り組まなければならない課題である。

d. 看護学科通信制課程・国家試験対策委員会 委員長 山岡 紀子

本年度の課題
新卒者は3年連続の合格率向上、既卒者は合格率が再び前年度を上回ることを目指す。
本年度の目標
1. 「2年で卒業&2年で国試合格」するための支援を強化する。 2. 既卒者が真剣に国試合格を目指し、覚悟して学習に取り組むための支援を実施する。
主な活動内容・結果
a. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料：通信制課程会議録）
1. 入学式の午後に実施する学習説明会において国試対策の説明を行う際、今年度は国試対策を進めるための分かりやすい資料を配布し具体案を提示すると共に、1年次から取り組む必要性について過去問を例に示した。また、過年度生対象の国試オリエンテーションでも資料を新たに作成し、いつ何をどうすれば良いのかというスケジュールの提案や、ここで行動しなければその後どうなるか等を、過去の事例を示しながら説明した。さらに、必修模試を半日実施としてより多くの学生が来校しやすいように変更（結果、昨年よりも受験者増加）、国試対策行事の際はその時々の学生に必要な助言や声掛けの実施、国試対策以外の学修上の助言も行う等の支援を実施した。
2. 今年度は、春期スクーリング日程の都合もあり既卒者のための国試オリエンテーションの開催を見送ったが、第105回国試不合格者には第106回国試受験に向けた文書を国試対策資料と共に郵送した。文書の内容を一新し、なぜ不合格となったのか、どう振り返れば合格につながるか、今後何をどう行えば合格できるのかを具体的に示すと共に、甘えを断ち切り言い訳をせず苦手と向き合う必要性を記した。また、不合格者全員との電話学習相談の際も同様の内容を伝えた。さらに、既卒者の中で最も合格率の低い大阪会場での国試受験者は、国試受験手続ガイダンスの際に来校してもらい学習方法等について直接助言を

行った。同様に、模擬試験や講座のため来校した既卒者には、例年にも増して声掛け・指導を実施した。

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料：通信制課程会議録）

- 1) 国家試験対策オリエンテーション（神戸）：3月27日（日）・31日（木）
（東京）：4月3日（日）
- 2) 解剖と疾患と看護がつながる講座：〈循環器〉6月25日（土）55名
〈呼吸器〉7月2日（土）49名
〈消化器〉7月9日（土）47名
- 3) 専門基礎模試および解説 DVD 視聴：10月8日（土）・9日（日）88名
- 4) 必修模試および解説 DVD 視聴：10月15日（土）・16日（日）92名
- 5) 国試ベーシック過去問講座（3日間）：10月29日（土）～31日（月）50名
- 6) 国家試験手続きガイダンスおよび社会保障制度 DVD 上映会
（神戸）：11月10日（火）・12日（木）・15日（日）
（東京）：11月14日（土）
- 7) 全国模試（総合力判定）：12月3日（土）・4日（日）91名
- 8) 必修予想 200 問特訓講座（2日間）：12月17日（土）～12月18日（日）50名

今後の課題

第 106 回看護師国家試験は、既卒者の合格率は 35.6%であり、全国の 2 年課程通信制学校既卒者合格率（24.5%）および本課程の昨年度既卒者合格率（26.6%）を上回った。受験回数別にみても、2 回目受験者は 57.7%（昨年度より 18.8%↑）、3 回目受験者は 41.2%（昨年度より 16.2%↑）と過去最高レベルの上昇となり、今年度の課題を達成できたと考える。次年度も、既卒者が再挑戦の意欲を維持し、必要な学習を継続するための支援を続けたい。

新卒者は 3 年連続の合格率向上を目指していたが、合格率は 65.4%であり、全国の 2 年課程通信制学校新卒者合格率（75.6%）および本課程の昨年度新卒者合格率（79.3%）を下回る厳しい結果となった。入学年度別にみても、15 年度生で 73.1%、14 年度生は 48.4%、13 年度生は 60.7%であり、いずれも全国平均より低い結果を示した。

過去 3 年間で振り返ると、2 年で卒業できた学生は全国平均と同様の合格率を維持していたが、今年度（15 年度生）は 2.5% 下回っている。また、昨年は 2 年で卒業できた学生（14 年度生）よりも、在籍 3 年目の学生（13 年度生）の合格率の方が 6.6% 高かった。これらより、2014 年度以降に入学した学生の学習到達状況が不十分であった可能性が示唆される。本課程は他の 2 年課程通信制学校とは異なり、短期大学士の学位取得に必要な単位修得を要するため、これまでの学習の進め方を再検討し、学生が最小の負担で最大の学習効果を発揮できる具体的な学習支援&国試対策を考案・実施することが喫緊の課題であると考えられる。

もう一つ他校にはない本課程の特徴として、学生が全国各地に居住していることが挙げられる。これまでの国試対策講座や模試は本学開催が中心であったため、遠方の学生には居住地近くの事業者を紹介していた。しかし、大阪会場での国試受験者の合格率が 69.2%であったのに対し、東京会場の受験者の合格率は 40.0%と大幅に低いことから推察されるように、遠方に居住する学生が「サポートを受けている」と実感しづらく、不安や孤独を感

じやすいことが学習を進めることを難しくしている可能性がある。遠方に住む学生にも、教職員の顔が見える、あるいはサポートを実感できるような学習支援&国試対策を実施することが急務であると考え。

以上より、1)短期大学士取得&国試合格するための効果的かつ効率的な対策・支援、2)遠方に住む学生も本学に来校できる学生同様に支援を実感できる体制づくりについて、課程全体で検討および実施することが今後の課題である。両課題ともに早急に検討を開始し、次年度は1%でも合格率が向上するように取り組みたいと考える。

14. 臨地実習委員会 年間活動報告書

a. 医療検査学科・臨地実習委員会 委員長 岩井 重寿

本年度の課題
<p>本年度は臨地実習の運用を包括的にすすめる2年目に当たることからさらなる円滑な実習実施にむけての充実を図る。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 運用項目とその内容の見直しに向けた問題点の検討2. 学生にガイダンスや各実習施設の情報供与・引継ぎによる円滑な実習遂行3. 実習施設数の維持・確保
本年度の目標
<ul style="list-style-type: none">● 委員役割分担の明確化と実行● 感染予防に対する学生状況の早期把握と対応● 前年度の実習を背景とした臨地実習の意義や留意点の指導● 実習学生に実習施設先概要の提示による実習モードへの導入● 新規等実習施設への対応
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none">● 定例委員会は9回開催した。第1回目に本年度委員の役割分掌17項目を決定したことで年度をとおして総括的運用がほぼ円滑にできた（委員会議事録、参照：配布資料）。● 前年度から進めてきたワクチン接種等の実施経歴や書類不備学生に対してキャリア支援課と進めたが、完備には学生の対応遅延により時間を要した（委員会議事録、参照：キャリア支援課取り纏め資料）。● 前年度の実習評価に基づいて4月の第一回・第二回ガイダンスで接遇、態度、言葉遣い、個人情報保護、学内への連絡・報告体制などを資料とともに指導した（委員会議事録、学科議事録、参照：委員会、ガイダンス配布資料）。連絡・報告体制、特に事故対応では一層の充実が求められる。● 前年度学生による実習送り書を中心に学生が臨む実習施設について予備情報を与えたことで、実習が実感できました、実習前施設訪問が有意義なものとなった（学科議事録、委員会保管資料）。● 実習施設変更承認の手続き依頼で2施設へ訪問して、最終的に本年度学生配属対象施設にできた。（参照：施設から教務課へ）。 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none">● 学生調査と施設回答に基づき52施設97名の学生配属計画案を作成し、教授会承認後に学生開示した（委員会議事録、教授会議事録、学科会議議事録、参照：共有フォルダ）。これにより学生の臨地実習へのモチベーションが高まった。● 臨地実習事前打合せ会を施設参加のもとで行い運用に有意義な開催となった（委員会議事録）。

<ul style="list-style-type: none"> ● 巡回教員に施設事前訪問・巡回についての報告と関連資料を配布した（学科会議、参照：教員配布）。大学と施設間の確認が深まった。 ● 前年度の実習御礼状と配属できなかった施設へのお詫び状を郵送した。 ● 臨地実習冊子校正後に学生等に配布した（参照：学生配布資料、巡回教員保管資料）。 ● 学生の実習中作成問題を manaba に掲載した（委員会議事録、manaba） ● 実習評価と巡回教員提出の報告書を取り纏めた。来年度に向けての準備資料となった。
今後の課題
<p>【次年度】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習にかかわる事故等の連絡体制と対応に関する見直しと整備 2. 実習印刷物の改訂 3. 実習施設数の維持・増設 <p>【中長期】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 臨地実習の各種事項に関してキャリア支援課、教務課、および健康管理室との間で連携強化を図る。さらに、実習施設との詳細な打ち合わせも必要である。 2. 医療現場環境に対応できるより一層の学生指導

b. 看護学科・臨地実習委員会 委員長 生島 祥江

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・平成29年度の実習計画案を、早期から、実習施設、看護学校他関連諸施設との調整を行い、学生の学習成果が得られるように立てる。 ・実習施設との臨地実習指導者連絡会や研修会を通して、指導者の資質維持・向上に取り組んでいく。特に、研修会に参加いただけない施設には、看護部に広報活動を行い、臨地実習指導者の参加を促していく。 ・キャリア支援課と協力して学生の感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認の年間計画を施行する。
本年度の目標
<p>臨地実習に伴う問題を明らかにしながら、臨地実習が効果的に実施できるように取り組むとともに、次年度以降の実習計画に反映させていく。臨地実習指導者連絡会および研修会を通して、指導者の資質維持・向上に取り組んでいく。</p>
主な活動内容・結果
<p>1. <u>目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）</u>：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎月第3月曜日4時限を定例として委員会を開催した。 ・平成29年度の実習計画調整を平成27年度末から施設依頼し他校との調整を経て、年間の実習計画案を立てた。 ・臨地実習において発生したアクシデント、インシデントを定例委員会で報告し、原因と対処を確認した。 ・臨地実習指導者連絡会は、臨地実習科目の目的・目標、内容の確認と学生の実習後の目標到達状況を確認するために、実習施設ごとに適宜開催し、臨地実習指導者との連携を図った。

- ・ 臨地実習指導者研修会について年度初めから検討し、平成 29 年 3 月 3 日、テーマ「患者に必要な看護を考えることができる学生を育てる」のもと、教育学部こども教育学科光成研一郎教授の基調講演、グループワークを実施し、研修会を終えた。

目標達成度の評価：1. できた **2. ほぼできた** 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：

- ・ 毎月第3月曜日4時限を定例とし、今年度は11回委員会を開催した。
- ・ 平成28年度の臨地実習計画案を3月学科会議にて報告した。
- ・ 各臨地実習科目の計画案を委員会で検討後、学科会議で審議し、教授会で決定後実施した。（学生配置については学科会議で承認後実施した。）
- ・ 臨地実習指導者連絡会を関連臨地実習科目に応じて企画・運営した。臨地実習中は、実習施設と随時連絡調整した。
- ・ 3月3日実施した臨地実習指導者研修会を企画・運営した。（学外参加者：43名、学内参加者：25名）広報活動したにも関わらず昨年に引き続き参加者のない施設があった。
- ・ 臨地実習において発生したアクシデント、インシデントを委員会で共有し、学内授業も含めて実習指導に反映させた。
- ・ 看護学科教員全員で学生指導する看護活動基礎実習と課題別総合実習の企画を行った。臨地実習要綱、看護活動基礎実習要領の内容を見直し一部修正した。
- ・ 学生の感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認のための年間計画に基づき、委員で確認作業を行い、臨地実習の運営がスムーズにいった。

今後の課題

- ・ 平成30年度の実習計画案もこれまでと同様に、早期から、実習施設、看護学校他関連諸施設との調整を行い、学生の学習成果が得られるように立てる。
- ・ これまでと同様に、適宜実習施設との臨地実習指導者連絡会を開催すること、そして研修会を通して、指導者の資質維持・向上に取り組んでいく。
- ・ ほとんどの実習施設で学生の感染症の抗体価及びワクチン接種状況報告を求めている。入学直後の臨地実習に向け、キャリア支援課と協力して新入生の確認作業を施行するとともに、在校生については年間計画に基づく確認作業を継続する。

c. こども教育学科・臨地実習委員会 委員長 松尾 寛子

本年度の課題

- ・ 新カリキュラムが実施されるにあたり、1年生からの実習実施に向けた計画を立案するとともに、実施後の改善点等について検討する。
- ・ 実習準備室の設置により、各実習がより効率的に行えるように実習室を中心とした全体の流れを構築する。
- ・ それぞれの実習における事前指導等の調整を図り、共通した実習指導が行えるよう連携を深める。

本年度の目標

<ul style="list-style-type: none"> ・旧カリキュラムと新カリキュラムが並行するため、それぞれの学年の4年間の実習を踏まえ、適切な実習が行えるよう計画・準備を行う。 ・実習施設との連絡を密にし、本学実習準備室を活用しながら、充実した実習が行われるための内容の確認を行う。
<p>主な活動内容・結果</p>
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年間を見据えた学年ごとの実習計画表に基づき、資格・免許状取得に向け4年間の実習を見通した活動を進めた。 ・実習実施に当たり、事前指導の欠席者に対しては別途指導した。また、履修細則にある単位未修得者に対して、今後の心構えなどについて個別に面談し指導を行った。 ・新カリキュラム実施にあたり、基礎研究演習Ⅰ内での実習内容の検討を行い実習を実施した。 ・実習準備室の活用について、新カリキュラムの実習事務手続き、書類の保管場所など、実習準備室の助手と連携を図りながら進めた。 ・新カリキュラムにおいて、旧カリキュラムと実習配置時期が異なる場合の日程の検討を行った。 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p>
<p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨地実習委員会 9回（28年4/2、6/10、7/8、9/9、10/3、11/7、12/5、29年2/6、3/6、） ・月1回月曜日を定例会としたが、委員全員の都合のよい日を設定するのが難しかった。 ・施設実習担当1名、保育所実習担当2名、幼稚園実習担当1名、小学校実習担当2名、助手1名、教務課事務担当1名の計8名の委員で役割を分担しながら実施した。 ・実習準備室が研究棟へ移動し、助手が配置され本格的に活動を開始した。提出物、書類などの管理を行った。各実習とも実習関係書類の提出先が統一された。 ・実習委員会で検討した事案については、学科会議で提案し、学科教員全員が共有できるよう共通理解を行った。事前に実習委員会で検討することにより、学科会議での提案がスムーズに行えた。〈詳細はE科臨地実習委員会議録参照〉
<p>今後の課題</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・新カリキュラムの実習のための本実習依頼や、実習依頼のための事前指導等が本格的にスタートするため、実習準備室と連携を図りながら、各実習が効率的に行えるようにする。 ・新カリキュラムの実習が滞りなく実施できるように、教務課事務担当が実習準備室に事務引継ぎを行う。 ・新カリキュラムと旧カリキュラムの実習時期が異なるものもあるため、実習施設との調整を図り、それぞれの実習が滞りなく実施できるようにする。 ・新カリキュラムの実習について、計画立案をし、実施後の改善点等について検討する。

d. 口腔保健学科・臨地実習委員会 委員長 原 久美子

本年度の課題
<p>1) 神戸常盤大学短期大学部歯科診療所（以下、学内歯科診療所）における臨地実習の充実を図る（増加した日数の実習内容）。</p> <p>2) 帰学日指導の充実を図る（KJ法による振り返りを定着）。</p> <p>3) 年間スケジュールに基づいて、滞りなく臨地実習がおこなえる体制の充実を図る。</p> <p>4) 感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認システムの適切な運用を図る。</p>
本年度の目標
<p>1) 学内歯科診療所における臨地実習の充実を図る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内歯科診療所を臨地実習施設として明確に位置づけ、実習日数を増やし内容の充実を図る。 <p>2) 帰学日指導の充実を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨地実習振り返り指導にKJ法を導入し、まとめる力・考える力・発表力の向上を図る。 <p>3) 年間スケジュールに基づいて、滞りなく臨地実習がおこなえる体制の充実を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・委員相互の連携を密にし、スムーズに実習を行う。 ・定例臨地実習委員会を開催し、委員全員の意見が臨地実習に反映できるようにする。 さらに、学科会議に報告し、学科教員全体の意識統一を図る。 ・臨地実習指導者会議を2回開催し、当科の教育方針を臨地実習指導者に理解して頂くとともに、指導者間の情報交換を行い、臨地実習教育が円滑に行えるようにする。 ・新規実習施設を開拓し、全学生が効果的な実習をおこなえるよう環境を整える。 <p>4) 感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認システムの適切な運用を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成したマニュアルに従い、キャリア支援課と連携して適切な時期に確認を行う。
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>1) 学内歯科診療所における臨地実習の充実を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1学生の学内歯科診療所実習日数を3日間から6日間にした。 （診療補助実習Ⅰ：2日、総合歯科実習：3日、地域口腔保健支援実習Ⅰ：1日） ・増加した実習内容として、①学生相互の症例検討実習を1日増やし、対象把握について検討する時間を増加した。②歯科診療所歯科衛生士の業務を見学し、症例についての意見交換を行う機会を設けた。③地域貢献実習として、「えん」および「コミュニティハウス」において、乳幼児や成人・高齢者に対する歯科保健指導を見学し、様々なライフステージの対象者とかかわる機会を作った。 <p>2) 帰学日指導の充実を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・週1回の実習振り返りでは、学生を3から4つの実習施設をまとめたグループに分け、相互に振り返り事項を確認した後、グループ代表が発表を行った。全体で指導事項を共有することで翌日からの実習の糧としていた。 ・課題を抱える学生には、個別面談を行い離脱することなく実習を終えた。 ・全体振り返りにKJ法を導入した。初めに、講義を行い、グループワーク、発表、教員からのコメントという流れで行い、全体振り返りでは、KJ法でグループワークを行う

ことが定着した。

- 3) 年間スケジュールに基づいて、滞りなく臨地実習がおこなえる体制の充実を図る。
 - ・年間スケジュールを作成し、委員および臨地実習担当教員に周知したことで、円滑に準備が進み、問題なく臨地実習をおこなうことができた（臨地実習会議議事録）。
 - ・臨地実習委員会に、学内歯科診療所の担当教員を入れたことで、学内歯科診療所実習に関する実習を滞りなく行うことができた。
 - ・臨地実習委員会を定期的（1回/月）に開催し、急を要す場合はメール会議も行った。
 - ・臨地実習指導者会議を2回開催した（臨地実習指導者会議議事録）。
 - ・学生数に即して施設と調整を行い全学生が滞りなく効果的な実習を行うことができた。
- 4) 感染症の抗体価及びワクチン接種状況をマニュアルに従って確認し、適切な時期に学生に周知指導ができた。（臨地実習会議議事録）。

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：

1) 臨地実習委員会

- ・臨地実習委員会を毎月第3月曜を定例として12回開催し、学科会議で報告し周知した。（臨地実習会議議事録）。
- ・診療所運営会議に積極的に働きかけた。
- ・巡回評価基準について専任・非常勤で統一した意識を持てるよう検討を行った。
- ・臨地実習要綱および要領の表記法を統一し整備を図った。
- ・キャリア支援課と連携を図り、感染症の抗体価及びワクチン接種状況の確認を行った。

2) 臨地実習指導者会議

- ・2回開催（平成28年8月18日・平成29年3月22日）（臨地実習指導者会議議事録）
 - 第1回の会議では、実習の概要説明に加え、各科目担当者から本学科の教育内容を説明後、「医科歯科連携教育について」と題して授業内容を紹介し、本学の教育内容について理解を頂いた。さらに実習施設相互の理解を深めるため、「臨地実習における学生指導の情報交換」というテーマで意見交換会の時間を設けた。
 - 第2回の会議では、実習の概要説明に加え、各科目担当者から本学科の教育内容を説明後、「オーラルリハビリテーションにおける栄養管理の必要性」と題して講義を行い、本学の教育内容への理解を頂いた。さらに、「臨地実習における学生指導の情報交換」として科目別にテーマを設定し、意見交換を行った。

今後の課題

次年度に取り組む課題

- 1) 臨地実習のあり方を見直す。
- 2) 実習目標に沿った適正な臨地実習施設の確保に努める。

中長期にわたる課題

- 1) 実習目的に沿い滞りなく臨地実習が行える体制を整え、その充実を図る。

e. 看護学科通信制課程・臨地実習委員会 委員長 中野 順子

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・遠隔地（東京）での各領域別実習事前オリエンテーション実施の評価と検討 ・健康診断書のワクチン接種実施の徹底 ・基礎・看護マネジメントオリエンテーションにおける実習直前のフォロー体制の検討 ・学生数に応じた実習施設の確保の継続
本年度の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・遠隔地での効果的なオリエンテーション実施方法の確立 ・健康診断書の感染症抗体価の低値の学生でワクチン接種未実施者の減少 ・基礎・看護マネジメントオリエンテーション実施後の実習前フォローの工夫 ・領域別・エリア別実習施設の確保に向けた取り組みの推進
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京会場でこれまで各科目の担当教員が全員でオリエンテーションを施行していたが、効率化を図り少人数で実施した。その為 PC, 紙資料を使用することで内容を担保した。関東地域において学生からの目立った問い合わせの増加や不都合はなかった。 ・健康診断書に、感染症の抗体価の基準値を明記し、基準値以下はワクチン接種を実施し、実施日を記入の上、提出するよう口頭と文書で説明した。結果、未実施者が減少した。ワクチン接種を厳しく要請する施設の増加がある為、今後も継続が必要。 ・昨年度より診断書の提出時期に関連し、基礎・看護マネジメント実習事前オリエンテーションの実施を早めた。実習開始日まで期間があったが、レポート提出期限から実習開始日までの期間が短く、実習直前のフォローは出来なかった。結果、質問には電話で対応出来たが、中でも記録物の質問が目立ったので、今後検討が必要。 ・領域別・エリア別の学生予測数と施設の受け入れ数を可視化出来る表を早期より作成した。これにより新規施設の開拓、受け入れ依頼数の増減を早期に検討出来たことで確保につながった。しかし、実習施設の格差がある為、今後は学生の動向に基づいた領域別施設数だけでなく、実習の質の確保に向けた取り組みも必要。 <p>目標達成度の評価：1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間を通し毎月1回定例の委員会を開催し、活動内容の検討・運営にあたり、課程会議で報告・情報共有を図った。結果、課程会議時間の省力化につながった。 ・各領域別実習事前オリエンテーションを前年度末の3月、2回実施（本学、平日と日曜日）、4月初旬（東京）で実施した。早期の実施はレポートへの動機づけとなり、今後継続。 ・4月：年間スケジュールに基づき、委員会の開催日と活動内容を確認し決定した。 ・5～6月：実習配置の為の準備と配置作業の実施、及び資料送付の為の作業の実施。 ・7～10月：実習期間中の対応の為の当番を決め、連絡メモとファイルにより情報共有した。 ・10月：基礎・看護マネジメント実習事前オリエンテーションの実施。（本学2回、東京1回） ・10月末：全実習施設への実習終了の挨拶とお礼の電話を分担して実施。今後継続。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・10～12月：次年度の実習依頼のための施設訪問および連絡調整の実施。（148施設）・1月：領域別実習終了後の「実習のまとめ」の施設向け報告書の作成と送付。（126部）・年間を通して要請のあった施設の指導者会・連絡調整会議への参加。（11施設） |
|--|

今後の課題

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・健康診断におけるワクチン接種実施の徹底・基礎・看護マネジメント実習事前オリエンテーションでの記録物の説明方法の工夫・学生数に応じたエリア別・領域別実習施設の数と質の確保への取り組み |
|---|

15. 通信教育委員会 年間活動報告書

委員長 長尾 厚子

本年度の課題
<p>1) 受験者数の確保</p> <p>①関東地方の受験者数の確保</p> <p>②関西地方の受験者数の確保 (特に兵庫県内)</p> <p>2) 実習施設の確保</p> <p>①関東地方および母性・小児の実習施設の確保</p> <p>3) 国家試験合格に向けての支援の強化</p>
本年度の目標
<p><活動方針・目標></p> <p>1) 受験者数の確保に向けて、関東方面の広報活動を強化し広域的な受験者確保に努める。</p> <p>①関東地方は、事務局・教員との連携のもと広報活動を強化する。</p> <p>②関西地方(特に兵庫県内)の広報活動を強化する。</p> <p>2) 実習施設の確保</p> <p>①関東地方の学生の実習施設を確保する。</p> <p>②母性・小児看護学領域の実習施設の確保</p> <p>3) 国家試験合格のための支援を強化する。</p> <p>①国家試験対策委員会の活動を支援する。</p>
主な活動内容
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果 (根拠資料) : 通信教育委員会議事録</u></p> <p>1) 受験者数の確保</p> <p>昨年度は 161 名であったが今年度は 114 名であった。昨年度同様、自己推薦入試を 5 回にし、さらに早期からの受験を可能にしたが、早期の受験者数は昨年度より減少している。自己推薦入試での受験生は 59%、推薦入試は 39%で、次年度も自己推薦入試での応募者に期待したい。また、一般入試での応募者がここ数年若干名のため、入試方法の検討が課題となる。関東地方の広報活動も神奈川・東京・千葉・埼玉・静岡県など広域にわたりリビング誌等の掲載、看護協会への説明会、東京会場での入試説明会も実施した。東海・信越を含むと東京会場での受験者は 25 名であり昨年より減少している。今年度は関西地方特に京都・滋賀方面の受験者が少ないため、京都・滋賀への広報活動として、事務職員も含めた病院訪問等実施したが、受験生の確保には更なる広報の工夫を考える必要がある。また、京都スクーリング会場での受講生の激減から、受験生の確保と、京都会場の見直しを図るため、石川県金沢市へのスクーリング会場変更を計画し、今後の受験生確保には、関東・北陸・関西と広域の広報活動が課題となる。</p> <p>2) 実習施設の確保</p> <p>関東地方の入学生の実習が開始し、新たに実習施設を 4 施設(全実習施設 138 施設)確保した。今後は、特に母性・小児の領域の実習施設の確保には困難をきたしているため関西地方でも確保が必要となる。また、スクーリング会場変更に伴う北陸 3 県・長野県北部の実習施設の開拓が課題となる。</p>

3) 国家試験合格のための支援

国家試験対策委員を中心に、模擬試験の実施・学習会の開催等、合格のための支援を実施している。106回看護師国家試験合格率は新卒 65.4% (昨年 79.3%)、既卒 35.6% (昨年 26.6%) であった。今年度は新卒の合格率は低下し、逆に既卒の合格率が上昇している。今後も国家試験対策委員を中心に、支援の継続が課題である。

(通信教育委員会記録、課程会議記録、入試委員会記録)

目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果 (根拠資料) : 通信教育委員会議事録

通信教育委員会は毎月第2月曜日を定例にし、平成27年度は11回開催した。構成メンバーは、通信教育委員長・通信制課程の専任教員と事務職員である。

1) 教育課程及び単位認定に関する事項

①既修得単位の認定について

放送大学では毎年開講科目の変更や追加があるため、入試要項作成に向けて新しく開講された科目を確認し既修得科目を検討、追加した。また、他大学・専門学校での既修得科目の認定についても教授会での審議事項として提出するための審議を行った。

2) 授業、試験および単位の認定に関する事項

授業については、時間割および会場についておよび試験の実施について検討した。

3) 入学試験・広報活動に関する事項

一般入試・推薦入試に加えて、受験生の確保に向けて自己推薦入試を昨年度より3回追加し、計8回の入学試験を実施した。広報活動は、看護協会の進学説明会に出席し、学校案内・資料配布を行った。また、関東方面をはじめ、地方紙などの紙面広告を幅広く行った。今年度資料請求数は541と昨年度(676)より減少傾向にある。今後、これまでの関西地方・関東地方はもちろん東北3県・長野県北部等への広報活動が課題となる。

4) 入学・卒業・退学・休学・除籍等学生の身分に関する事項

卒業認定に関する通信制課程原案、および、退学・休学・除籍・復学についても教授会の審議に向けて準備した。

5) 学生の賞罰に関する事項

昨年度から「水田亘記念賞」が廃止となり「学長賞」の受賞者はいないが、通信制学生の受賞についても今後検討課題となる。

6) スクーリングおよび学外実習に関する事項

スクーリング授業科目・実習および実習スクーリングの実施に当たって、地方会場(京都・東京)の予約が1年前であることから、次年度の時間割について検討した。

7) 国家試験対策

模擬試験の実施、受験手続、国家試験に関する事項について検討した。

8) その他

①毎月のレポート提出状況の報告：全科目のレポート提出状況の把握。

②再提出レポート、年度替わりのレポートの取り扱いについて確認。

(通信教育委員会記録、課程会議記録)

今後の課題

1) 受験者数の確保

- ① 関東地方の受験者数の確保
- ② 関西地方の受験者数の確保（特に兵庫県内）
- ③ 北陸3県の受験者数の確保

2) 実習施設の確保

- ① 関東地方および母性・小児の実習施設の確保
- ② 北陸3県の実習施設の確保

3) 国家試験合格に向けての支援の強化

16. 遺伝子組換え実験安全委員会 年間活動報告書

委員長 澤田 浩秀

本年度の課題
平成 23 年度に「神戸常盤大学遺伝子組換え実験安全管理規程」が制定され、さらに遺伝子組換え実験安全委員会が設立された。本年度は、新たな遺伝子組換え実験計画に対する申請書の審査、遺伝子組換え実験教育訓練を実施した。
本年度の目標
1. 新たな遺伝子組換え実験計画に対する申請書の審査 2. 遺伝子組換え実験施設としての緑風館 5 階に立ち入る教職員および立ち入る可能性のある学生（医療検査学科）に対する遺伝子組換え実験教育訓練（講習会）の実行
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>1. 平成 28 年度は、新たな遺伝子組換え実験計画承認申請書が 3 件提出された。 2. 教職員および医療検査学科 2 回生に対する遺伝子組換え実験教育訓練は、学科ガイダンスの行事に組み込まれ、平成 28 年 4 月 4 日（月）に実施した。 目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>1. 平成 28 年度に提出された遺伝子組換え実験課題等は下記の通りである。 ①実験課題名：アフリカトリパノソーマ原虫の TbUNC119BP 遺伝子の機能解析 審査対象者：医療検査学科教授 鈴木高史 審査日 4 月 28 日 審査結果：承認 ②実験課題名：Presepsin の産生機序解明に関する研究 審査対象者：医療検査学科助教 溝越祐志 審査日 4 月 28 日 審査結果：承認 ③実験課題名：Crispr/Cas9 system を用いたノックイン系の確立 審査対象者：医療検査学科助教 溝越祐志 審査日 8 月 8 日 審査結果：承認</p> <p>2. 教職員および医療検査学科学生に対する遺伝子組換え実験教育訓練は、遺伝子組換え実験安全委員長の澤田浩秀安が講師となり、約 1 時間の講習会として実施した。教育訓練の有効期間は 3 年間であり、2 回生以上の学生で教育訓練受講者は卒業時まで教員同伴の元で緑風館 5 階の入室が可能である。教職員の場合は、前回の教育訓練から 3 年経過した場合は、再度受講しなければ、遺伝子組換え実験安全管理規程第 14 条より緑風館 5 階の入室が不可となる。</p>
今後の課題
次年度も、新たな遺伝子組換え実験計画に対する申請書の審査、教職員および医療検査学科 2 回生に対する遺伝子組換え実験教育訓練を実施する。

17. 健康保健センター 年間活動報告書

委員長 森松 伸一

本年度の課題
1. 全国大学保健管理協会および同協会近畿地方部会が行う諸事業に積極的に参加・協力する。 2. 健康管理室と学生相談室の情報共有化を図る
本年度の目標
1. センターから健康に関する情報を適宜発信する。 2. 健康管理室と学生相談室の情報共有化を図る。
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>1.本学ホームページに健康保健センターニュース（No.1～8）として掲載し、感染症を中心に季節に応じた健康障害に対する注意を喚起した。またキャリア支援課掲示板にダイジェスト版としてポスターを掲示した。</p> <p>2.M2 学生に三類感染症（腸管出血性大腸炎感染症 O26）発生時（5月26日発症、5月31日確定）には学生の居住地である奈良保健所および大学所在地の長田保健所と協力して対応するとともに教職員（tokiwa-all 利用）および学生（ポータル利用）全員にメール配信するとともに二次発生がないか注視・監視した。</p> <p>3.入学後すぐに実施される学外オリエンテーションまでに健康問題（健康障がい）がある学生をセンターで抽出し、各科でメンバーを通じて情報を共有し、2日間の学外オリエンテーションに備えた。</p> <p>4.平成29年度からの新入生対象「健康調査票」記入にあたっては理解しやすいように改定するとともに、医療系各学科に合わせた提出期限を設けた「感染症予防のための抗体検査および予防接種について」では実習病院が要求する検査法にするため、4疾患の抗体検査を全て IgG EIA 法に統一した。</p> <p>全国大学保健管理協会加盟校として以下の会議・集会に参加した。</p> <p>a.運営委員校として全国大学保健管理協会近畿地方部会運営委員校会議に出席し前年度の会計報告をした（平成28年6月10日、梅田ターミナルスクエア）。</p> <p>b.世話人校として全国大学保健管理協会近畿地方部会研究集会・総会に参加した（平成28年7月28日、和歌山県立医科大学・紀三井寺キャンパス）。</p> <p>c. 全国大学保健管理協会近畿地方部会保健師・看護師班研究集会・総会および看護職代表者会議に出席した（平成28年9月15日、和歌山県立医科大学・高度医療人育成センター）。</p> <p>d.第54回全国大学保健管理研究集会に参加した（平成28年10月5・6日、大阪国際会議場）。</p> <p>目標達成度の評価：1.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった</p>

<p>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 第1回健康保健センター会議（平成28年4月25日A会議室） 2. 第2回健康保健センター会議（平成29年1月27日A会議室） 3. 第1回点検実施代表者連絡会「学生の健康を保持増進する活動の連携に関する会議」（平成29年3月10日A会議室） 4. 第3回健康保健センター会議（同上） 5. 入試関連行事（オープンキャンパス4回、推薦入試・センター試験・一般入試12回）での救護担当者の配置（医師資格を持つ者）
<p>今後の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 平成27年度後半からキャリア支援課に養護教諭武田氏が採用・配属されたが、健康保健センター業務が学生健康調査票の整理と管理、学生健康診断結果の整理と管理、体調不良学生への対応等多岐にわたるため、また学生の健康に関する情報の管理を一元化するため、専任として健康保健センター業務に専念させたい。 2. 同じ学生が何度も利用することもあるためカウンセリング（予約制）を必要とする他の学生が利用しにくいとため、学生相談室カウンセリングルームの開室を週1回から2回に増やす。 3. 学生の健康調査・健康診断に関連した連携では健康管理室と学生相談室との情報の共有化を一層図る。即ち、健康調査、健康診断票、抗体検査・予防接種票を一括管理し、入学後の保健室・カウンセリング利用状況から必要な学生の健康に関する情報を在学中に加えていく。 4. 本学ホームページに健康保健センターニュースが掲載されていることを全学メールなどにより学生・教職員にもっと周知する。 5. 感染症予防チェックリストを作成したものをフローチャートにして学生、教職員にそれぞれ配布し、感染症予防に役立ててもらうとともに可能であれば感染症予防の実地訓練を行う。 6. パニック障害など『心の病』を持った（疑いのある）学生を早期に見つけるための「コツ」や「ポイント」をまとめたチェックリストなどのリーフレット（フローチャート）を作成する。

a. 健康管理室 責任者 井本 しおん

<p>本年度の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 健康調査票、健康診断結果、予防接種・抗体検査結果など学生の健康情報を適正に管理・運営する体制を整備する必要がある。 2. 健康管理室の備品・医薬品については、必要なものを配備し、物品管理が適正に行われる管理体制を構築する必要がある。 3. 学生や教職員に、健康に関する情報をより積極的に発信していくことが望ましい。
<p>本年度の目標</p>
<p>上記課題の解決・実行</p>
<p>主な活動内容・結果</p>

1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：

1. については、平成 27 年 10 月に養護教諭の武田奈々子氏が主に健康管理室の業務に携わる常勤職員としてキャリア支援課に配属され、学生の健康診断や抗体検査などの健康情報の適正管理が進行中である。しかし、健康管理室や学生相談室の利用状況を学生毎に整理することなど、まだいくつか課題が残っている。
2. 健康管理室の物品の整備・管理体制構築については、まだ途上である。
3. 健康保健センター長から健康に関する重要情報を、ホームページや掲示などで適宜発信できている。

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：

- 平成 28 年度新入生から健康調査票を導入し、学生の健康管理に役立てている。
- 学内傷病者および体調不良を訴える者への対応を行った。平成 28 年度の健康管理室利用者数は 91 名（M:23、N:37、E:14、O:17）であった。主な症状は、生理痛（11）、体調不良（8）、胃腸症状（17）などで、外科的症状（けが、打撲など）も 33 件あった。前年度の利用者数は 51 名であり、大幅に増加した。また、Will の適用となった件数が 26 件あり、うち、学内や登下校中の事故が 15 件、賠償（受託物破損・紛失）事故を含む臨地実習中の事故が 11 件であった。
- 4 月に健康管理室が研究棟（7 号館）1 階に移転した。必要物品の整備は途上である。
- 禁煙すすめ隊の活動：学生委員会と共同で取り組んでいる。これまでの敷地内パトロールや喫煙者数調査等の活動に加え、本年度は健康フェアに出展して禁煙についてのアドバイス・指導を行った。

今後の課題

1. 健康調査票、健康診断結果、予防接種・抗体検査結果に加えて、歯科検診結果も含め学生の健康情報を適正に管理・運営する体制整備を、さらに推進する必要がある。
2. 健康管理室の必要物品を整備・管理する体制を早急に構築する必要がある。

b. 学生相談室 責任者 原 久美子

本年度の課題

1. カウンセリングルームの実質的な縮小方針が打ち出された中で、学生のカウンセリングに対するニーズをきめ細やかに把握し、エビデンスに基づいたカウンセリングルームの充実を図る。
2. 学生の心の問題について把握できたものについては、かかわる教員へのコンサルテーションや研修などを検討する。

本年度の目標

- 1) 開室が、昨年より一日減の、週に一回（月曜日午後）になったため、学生が利用しやすい体制を考える。
 - 月曜日以外でも、メール予約をキャリア支援課でもできるようにする。
- 2) 学生が気軽に相談できる体制を整える。

<ul style="list-style-type: none"> ・気軽に相談してもらうには、まず、カウンセラーの顔を覚えてもらうことであるという観点から、各学科の各学年に対して、5月を中心に、授業の前後でPRの時間をとる。 <p>3)箱庭療法を実施し来談のきっかけを作る。</p> <p>4)開室日減の対策として、学生サロンを紹介する。</p> <p>5)開室日の増を要望していく。</p>
<p>主な活動内容・結果</p>
<p>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：（会議議事録）</p> <p>1) メール予約をキャリア支援課でもできるようにした。</p> <p>2) 全学科・学年に対し、授業の前後に、カウンセラーが出向いて、カウンセリングルームの紹介をした。出向けない時はビデオを使用した。</p> <p>3) 箱庭療法の体験日を後期に3日間計画し、実施した。9名の予約があったが、実施日に暴風警報が発令され休講になったため、参加者数は4名であった。</p> <p>4) 学生サロン利用者数 述べ 393名 実数 98名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者数が多く、対応教員の本来の業務に支障が起きる可能性があるため体制について引き続き検討していく。 <p>5)29年度より、開室日数増となった（毎週金曜日午後）</p> <p>6)本年度のカウンセリングルームの開室</p> <p>開室日時：毎週月曜日 12:00～17:00</p> <p>開室日数：授業期間中 28日</p> <p> 休暇中 4日</p> <p>7)カウンセリングルームの利用者数</p> <p>延べ 79名（昨年度は114名）、実数 14名（昨年度は17名）であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象者の減ではなく、開室日数の減の影響と考える。 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p>
<p>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：（会議議事録）</p> <p>1)相談室会議開催</p> <p>6回開催し、会議の中でカウンセリングルーム、学生相談サロンに来室している学生のケースカンファレンスも合わせて行った。</p> <p>2) ミニ箱庭を引き続きキャリア支援課に設置した。</p> <p>3) 一人で悩む学生のためにポスターを作成し、学内各所に貼付してカウンセリングルーム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生相談サロンの存在を紹介した。 <p>4) 引き続き名刺サイズ広報物を全学生、教職員に配布した。</p>
<p>今後の課題</p>
<p>【次年度に取り組む課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カウンセリングルーム内の環境や予約方法、HP等の広報を見直し、学生がより利用しやすい環境を整える

- ・健康管理室や IR 推進室等、他部署との連携を図り、きめ細やかに支援できるような体制を整える

【中長期にわたる課題】

- ・カウンセリングルームの開室日の増も含め、充実を図る。

18. 神戸常盤ボランティアセンター 年間活動報告書

センター長 中田 康夫

<p>本年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生スタッフの育成、学生による自主的な活動の促進 ・有事の際（特に災害時）のボランティア活動者の養成 ・センターや学生活動の発信、広報
<p>本年度の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム上の問題も踏まえた上で、学生が主体となって活動と他の学生を繋いでいくボランティアセンターを目指した学生スタッフの育成 ・有事の際（特に災害時）のボランティア活動者の養成 ・幼稚園・高等学校との連携の質の向上 ・登録学生増強のため、学生の活動の様子やセンターの取り組み等の情報発信の強化
<p>主な活動内容・結果</p> <p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・本年も引き続き、学生スタッフの育成について検討した。学生たちへの聞き取り調査から、ボランティア活動の紹介や広報については、参加経験のある学生からの体験談に基づく紹介や先輩や友人等同じ学生という立場の者からの誘いが、参加するきっかけになるとの回答が得られた。これに対し、試験的に学生スタッフの組織化を試みる等して、次年度も引き続き検討を重ねる。 ・有事の際のボランティア活動者の育成としては、2016年3月に長田区社協との共催による災害ボランティアセンター運営者研修を受講した学生が、2016年8月の熊本地震災害支援活動に参加し、災害ボランティアとして活動し、学生リーダーとして役割を果たした。またこの支援活動では、長田区社協と協働することで兵庫県の助成金を獲得した他、活動に社協の職員が同行し、学生たちに災害時の現地の状況や避難所・仮設住宅の運営状況について説明を行う等、日頃の連携を活かした活動を行った。大学コンソーシアムひょうご神戸主催事業「東日本大震災学生ボランティア登録事業」には学生リーダーとして1名が参加した。 ・数年前より、幼稚園とは、1.17KOBEに灯りをinながたのろうそく作りを園で行うとともに、保護者への追悼行事の案内等連携をしており、高校とは、密な連携のもと学内広報や学期毎のボランティア説明会を実施した。結果として幼稚園保護者が1.17KOBEに灯りをinながたの会場に園児と訪れる等、連携が徐々に定着してきている。 ・情報発信の強化に対する取り組みについては、学生に対してはポータルや掲示板等での広報活動を実施しているが、学生のみならず教職員に対する広報についてもブログ等の活用を検討する必要がある。情報発信の強化の部分でも学生スタッフによる積極的な広報活動を展開できるよう、今後検討を行う。 <p>目標達成度の評価：1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p><2017年3月末現在のボランティア登録者></p>

ボランティア登録者数 合計 227 人 (内訳 大学 175 人 高校 52 人)
 医療検査学科 30 人 (内訳 1 年 5 人 2 年 0 人 3 年 17 人 4 年 8 人)
 看護学科 21 人 (内訳 1 年 6 人 2 年 2 人 3 年 9 人 4 年 4 人)
 こども教育学科 37 人 (内訳 1 年 6 人 2 年 8 人、3 年 10 人、4 年 13 人)
 口腔保健学科 87 人 (内訳 1 年 9 人 2 年 25 人 3 年 53 人)
 高等学校 52 人

<2016 年度活動件数・延活動者数>

- ・活動数 54 件 (依頼総数 75 件)
 内、本 VC が主体あるいは他団体との協働による事業・・・15 件
 地域団体・福祉施設等からのボランティア依頼件数・・・60 件
- ・延活動者数・・・大学 290 名、高校 104 名

<活動の概要>

行事名	内 容
LOVE49 キャンペーン in KOBE	子宮頸がん予防啓発イベントの企画・運営
熊本地震支援募金活動	街頭及び学内での募金活動
ふれあいわくわくフェスタ	障がい者事業所合同音楽会の企画・運営
長田在宅支援センター夏祭り	高齢者施設夏祭り手伝い
長田区自立支援協議会つどう部会	発達障害児を対象にした行事の企画、実施
おやつはべつばら	Tooth☆ピッカーズによる歯磨き指導
熊本県災害支援ボランティア活動	神戸市社協、長田区社協との共催による益城町等での炊き出し、後片付け等
TOKIWA 健康フェア	炊き出し、被災地支援活動報告
一七市拡大版 2016	・一七市拡大版運営支援 (受付・着ぐるみ・アンケートの実施)
学祭	関東水害被災地復興支援ブース出展、募金活動
大黒地区防災訓練	炊き出し
1.17 KOBE に灯りを in ながた 2017	炊き出し、募金活動、会場設営など
災害ボランティアセンター設置訓練	長田区社協との共催による災害ボランティア研修、訓練

上記活動のほか、長田ボランティアセンター運営委員会への参画や、長田区自立支援協議会つどう部会・防災プロジェクト、一七市拡大版 2016 実行委員会、1.17KOBE に灯りを in ながた 2017 実行委員会、「子宮の日」LOVE49 キャンペーン in KOBE 実行委員会等へ参加し、地域団体との連携・協働のもとに活動を行っている。

ボランティアセンターの運営に関しては、年 2 回 (6・3 月) の運営委員会を開催して運営に関する協議を行うとともに、円滑な運営を行うため、年間 3 回 (6・12・3 月) のスタッフ会議を開催して法人内の委員による喫緊の課題の検討と情報共有を行った。

今後の課題

- ・平成 29 年度からの新しい組織体制の中での、より有用な運営方法を確立すること。

- ・有事の際（特に災害時）のボランティア活動者の養成を引き続き実施する。
- ・幼稚園・高等学校との連携の質の向上を引き続き実施する。

19. 地域交流センター 年間活動報告書

センター長 中村 忠司

本年度の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域交流センターの運営体制の確立 2. わいがやラボ、地域交流センター全体の広報活動 3. コミュニティハウス事業への学生の参画 4. 地域活動に参加するためのより良い学内の環境整備
本年度の目標
<ol style="list-style-type: none"> 1. 学園の地域交流および地域貢献活動の総合窓口として機能する 2. 地域活動の拠点である「わいがやラボ」の広報活動を行う 3. 既存の地域活動に加え、新たに地域の活性化に繋がる事業を計画する
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <p>多様化する地域社会のニーズに対応するため、学園の知財を使って事業を展開するとともに学生の「学びの場」を創出した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 公開講座 2. 学生の地域活動 3. 長田区との連携活動 4. 離島プロジェクト（小豆島町） 5. TOKIWA 健康フェア 6. コミュニティハウスでの活動 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域活性化事業 高齢化社会の課題である高齢者の健康と福祉を中心とした公開講座などの活動を行った。（13 講座を実施し受講者数 366 名であった） TOKIWA 健康フェア 2016 では、健康をテーマに 25 を超えるブースを出店し、1,000 名を超える参加者を記録した。（「地域交流センター地域活性化部会（A）「平成 28 年度 公開講座」実施一覧」を参照。） 2. ボランティア（一般）事業 地域活動拠点「わいがやラボ」を中心に、学生企画イベントや離島プロジェクトを展開。各学科の専門性を活かした様々な活動を行い、地域貢献を果たしながら、その経験を自らの成長に役立てている。（「〈平成 28 年度〉「地域交流センター チーム B」合宿事業について」を参照。）
今後の課題
<p>学内外および学生に対して積極的な広報を行うことができ、地域から多くの依頼を受けることができた。しかし、過密なカリキュラムにより、意欲ある学生が参加できず、依頼</p>

を断らざるを得ないケースもあった。

教学マネジメント改革により、これから始まる「地域との協働 A」などの授業も取込み、学生が地域活動へ参加しやすい学内環境の一層の充実を図る。

20. 国際交流センター 年間活動報告書

副センター長 柳田 潤一郎

本年度の課題
1. 「大学コンソーシアムひょうご神戸」への事業提供の継続 2. ネパール交換研修の実施 3. 「イングリッシュ・イブニング」（学生の英語力の向上）の実施 4. 新規事業の実施 5. 学生、教員の国際交流活動環境の整備と支援
本年度の目標
1. アメリカ、フィリピンおよびネパールでの学生派遣プログラムの計画と本学学生だけでなく他大学の参加も呼びかける。 2. ネパール交換研修（本年度はネパール訪問）の計画と実施を成功させる。 3. 「イングリッシュ・イブニング」を国際交流センター主催で行う。 4. 青年海外協力隊員（JICA 関西）による講演会を行う。 5. 研究棟 1 階同窓会室内に国際交流センター（GCC ルーム）を設置する。
主な活動内容・結果
<u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u> センター構成員は、イノベーション科 1 名、医療検査学科 2 名、看護学科 3 名、こども教育学科 1 名、口腔保健学科 1 名、看護通信制課程 1 名、神戸常盤女子高校 1 名、および職員 5 名の 15 名で構成され活動した。 平成 28 年度は、月例のセンター会議を計 11 回開催し、サブグループに分かれての活動を行った。（大学コンソーシアム、ネパール交換研修、イングリッシュ・イブニング、新規事業・将来構想提案） 目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった
<u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u> 1. 新年度ガイダンス（平成 28 年 4 月） 新年度ガイダンスにて、国際交流センターの活動について、各学科の委員および職員が説明を行った。 2. 「大学コンソーシアムひょうご神戸」学生派遣プログラム（兵庫県下のコンソーシアム参加大学学生が参加可能）を平成 28 年 9 月 10 日～19 日に実施した。訪問先は、アメリカ、フィリピン、ネパールで、各国の医療事情を日本と比較し、学習した。 3. 「イングリッシュ・イブニング」は、前期、後期とも無事終了した。 4. JICA 青年海外協力隊の講演会を 2 回実施した。第 1 回は、7 月 4 日に行い、青年海外協力隊 OB による全般的な解説とモンゴルに派遣された助産師の経験談。第 2 回は、12 月 12 日に行い、本学卒業生でマラウイに派遣され臨床検査技師として病院および臨床検査技師の養成校で教育にあたった経験を発表された。 5. 同窓会室の一部を国際交流センターとして使用したい旨、同窓会および法人部長との

調整の結果、10月より、毎週、月、水、金曜日を学生に開放することにした。また、教職員からの海外関連の図書やオーディオ機器の設置も行った。

6. ネパール交換研修生の募集と選考については、3回の説明会後募集を開始し7月23日に選考会を行った。その結果、学生7名、高校生1名、同窓生1名および引率教員4名が12月21日～29日にネパールを訪問し、現地学生との交流、現地医療機関・学校の見学およびホームステイを行い異文化体験、交流を行った。なお、研修報告会は3月27日拡大教授会前に行った。

7. 臨床検査学教育学会（8月31日～9月2日）において、本学の国際交流活動について発表した。（柳田、鈴木）

今後の課題

1. 学生の国際交流への関心を高めるために、国際交流センターの活用促進、JICA 青年海外協力隊OBや留学生の体験談、あるいはABC ニュース等海外メディアの積極的利用等、の計画と実行を行いたい。

2. 「大学コンソーシアムひょうご神戸」への海外研修プログラムは、例年どおりの実施を考えているが、他大学の学生参加も積極的にアピールしていきたい。

3. 来年度（29年度）のネパール交換研修については、受け入れの年であるが、ネパール交流20周年および本学創立110周年の合同記念行事として、平成30年度に、受け入れおよび派遣を考えている。（法人本部、同窓会および国際交流センターとの協議）

4. 他大学の国際交流センターとの交流を計画する。

5. 新たな国際交流プログラムの計画を推進する。

21. 教職支援センター 年間活動報告書

センター長 光成 研一郎

本年度の課題
E科2期生・N科6期生の教員採用試験合格を目指した効果的な支援を実施する。
本年度の目標
(1) 学生の大多数が受験する近畿圏の主要自治体の採用試験日程の前傾化、出題分野・形式等の変更に対応した支援体制を早急に立ち上げ支援業務に生かす。 (2) E科に関しては、支援体制が有効に機能するよう教職支援センターと学科の役割分担・補完の在り方等を随時見直していく。
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：教職センター会議議事録、各種計画案等</u></p> <p>目標(1)については、第1回センター会議(4/15)にて基本方針と具体的方策を共通理解 ・基本方針→情報を適切に収集・分析し学生の指導・支援業務に速やかに反映させる ・具体的方策→次のことを基本として連携・分担しつつ学生支援の充実を図る</p> <p>①出願手続支援：「文章表記欄」指導は学科、「その他の項目・最終点検」はセンター ②筆記試験対策：「一般教養・時事」はセンター、「教職・専門教養」は学科 ③人物試験対策：「論作文・模擬授業」は学科、「面接・討論・場面指導」はセンター さらに、この支援体制を効果的に機能させるため以下の手立てを講じた ④E科学生に対しては、「受験対策特別時間割」(4/18～7/23)を実施、「体育・音楽実技」指導の実施(7～8月)。N科学生には臨地実習を考慮しセンターが計画的に指導 ⑤学生へ「採用試験本番」を見越した取組の周知徹底(ガイダンス・学習会)</p> <p>目標(2)については、試験日程に合わせて学生の準備状況やニーズを判断し、定例の会議等で確認していった。また、第5回センター会議(9/16)では受験対策全般の「総括」を行い、支援体制は概ね円滑に機能したと共通理解された。 《成果》受験者総数(E・N科計:32名)→1次合格者数(E科20名)→最終合格者数(8名)</p> <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：教職支援センター会議議事録、各種計画案、学習会等への出席表等</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「教職支援センター会議」を8月を除き毎月開催(年間11回) ・「定例学習会(含：春季集中)」をE・N科全学年ごと毎週開催(年間389コマ) ・「学力把握テスト(教職支援センター作成)」を年3回実施(4・10・1月：延べ335名) ・「弱点フォロー勉強会」を夏季休暇中に3回実施(8・9月：59コマ：延べ123名) ・「秋・春季セミナー(公立志望E・N科2～3回生対象)」を実施(55コマ：延べ132名) ・「東アカ『教職教養・人物対策・基礎力養成』講座」を実施(4～1月：延べ117名) ・「養護教諭合格者座談会・小学校教諭合格者座談会」開催(4・11月：延べ63名)

今後の課題

1. 次年度は「新学習指導要領完全実施」の先行実施前年に当たる。改訂の趣旨やポイントを押さえた教職・専門教養指導を充実させ、学生の採用試験対策を支援する。
2. 中長期課題として「恒常的に2桁の公立学校合格者を輩出できる体制の確立」を目指す。当面は学生の学びの常盤風土（異学年・OBとの交流、学び合い）醸成に注力。

22. K T U 研究開発推進センター 年間活動報告書

センター長 足立 了平

本年度の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究活性化の取り組みを継続する 2. 本学の研究成果公表システムを構築する（リポジトリ） 3. 他委員会や他部署との協働
本年度の目標
<ol style="list-style-type: none"> 1. 科研費、テーマ別研究費への申請数を増加させる 2. 機関リポジトリの構築と学内公表の機会（場）を確保する 3. 他委員会・センターと協働する
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ別研究の改革：区分、審査基準の変更、学科研究サポートの新設 テーマ別研究申請数（H27）14件 ⇒（H28）23件 ・夏の研修会（8/29）：「科研費獲得のコツ」（児島将康先生・久留米大学） 参加者79人（学内64人／学外15人） ・常盤学術フォーラムでのH29年度科研費に関する説明会（10/15）： 参加者70人 科研費申請数：（H28年度）22件 ⇒（H29年度）26件 2. <ul style="list-style-type: none"> ・機関リポジトリの構築：研究者のための研究の発表、公表の場（プラットフォーム）としてHP内に「神戸常盤大学・短期大学部 機関リポジトリ」をアップ ・神戸常盤学術フォーラム開催（10/15）：学科長推薦演題／テーマ別研究費採択者演題／卒業生による研究発表（ホームカミングプレゼン）／一般演題 ・研究内容がより広い範囲で公表され、論文への引用件数が増えるよう教員業績のデータを research map へ移行 3. H28年度は、図書館、図書・紀要委員会、研究倫理委員会、自己点検・評価委員会と連携 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ別研究の公募・審査・採択者発表 （学内HPに掲載、ほぼ全員が学術フォーラムで発表し、論文化済） ・神戸常盤学術フォーラム開催（10/15・抄録を紀要に掲載） ・研究者ハンドブックの改訂（HPに掲載） ・研究実績報告書作成（学内HP掲載） ・利益相反マネジメントに関する書類の提出 ・K T U 学術業績：論文5編。学会発表3題

今後の課題

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 研究活動の活性化－研究の量とともに質を高める2. 研究成果公表システムの活用3. 研究倫理に関する強化 |
|--|

23. 口腔保健研究センター 年間活動報告書

委員長 野村 慶雄

本年度の課題
① 地域の口腔保健関連事業への参画（継続） ② 附属ときわ幼稚園・神戸常盤女子高校、新入生の歯科検診、TOKIWA 健康フェアの歯科検診等 ③ 口腔保健に関する研究業績の蓄積 ④ 歯科診療所の活性化
本年度の目標
① 地域の口腔保健関連事業への参画 ② 附属ときわ幼稚園・神戸常盤女子高校、新入生の歯科検診 ③ TOKIWA 健康フェアの歯科検診等の口腔保健事業 ④ 口腔保健に関する研究・啓発業績の蓄積（歯科検診結果の解析含む） ⑤ 歯科診療所の活性化
主な活動内容・結果
<p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u></p> ①地域の口腔保健関連事業への参画（継続） 長田区連携事業 <ul style="list-style-type: none"> ・平成 28 年度長田区子どものむし歯予防のための検討会議 ・長田区・神戸常盤大学連携協定にもとづく打ち合わせ会 ・長田区民まちづくり会議 にこやか部会 啓発活動 <ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援センター「えん」での口腔保健啓発事業 （歯科診療所運営会議議事録） ・コミュニティハウス「お口の健康道場」（成人コース、高齢者コース）開講 （学科会議、歯科診療所運営会議議事録） ・口腔保健啓発のための講演・研修 ②附属ときわ幼稚園・神戸常盤女子高校、新入生の歯科検診、TOKIWA 健康フェアの歯科検診等 <ul style="list-style-type: none"> ・新入生歯科健診：344 名 ・神戸常盤女子高校歯科健診：815 名 ・附属ときわ幼稚園歯科健診：53 名 ③ TOKIWA 健康フェアの歯科検診等の口腔保健事業 TOKIWA 健康フェア 2016 歯科健診・相談：39 名 （学科会議、歯科診療所運営会議議事録） ④ 口腔保健に関する研究・啓発業績の蓄積（歯科検診結果の解析含む） 附属ときわ幼稚園、神戸常盤女子高等の歯科健診結果を解析し、経年推移を合わせて分析した。（学科会議、歯科診療所運営会議議事録） 研究業績 著書：4 論文：5 ⑤ 歯科診療所の活性化

- ・口腔ケア（新入生含む）：588名（平成27年度の6割増）
新入生の口腔保健に対する行動変容の結果、受診者増に伴う活性化を達成した。
- ・フッ素塗布 7回 41名（平成27年度48名）
- ・神戸市検診事業の「後期高齢者(75歳)歯科健康診査」を追加した。
(歯科診療所運営会議議事録)

目標達成度の評価：1. できた 2. **ほぼできた** 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：

- ① 口腔保健研究センター（1回）、歯科診療所運営会議（12回）を開催し、口腔保健研究センターのフィールドの一つである歯科診療所の活性化について検討した。予防的診療業務に加え「神戸市40歳総合健診歯周疾患検診」・「神戸市妊産婦歯科健康診査」・「後期高齢者(75歳)歯科健康診査」を追加した。（歯科診療所運営会議議事録）
- ② 子育て支援センター「えん」での出前講座と幼児への定期的フッ素塗布を実施した。
(歯科診療所運営会議議事録)
- ③ 長田区こどものむし歯予防のための検討会議（2回）に参加し、長田区の乳幼児のう蝕予防について検討・提案した。（歯科診療所運営会議議事録）
- ④ 長田区民まちづくり会議（3回）に参加し、長田区における健康教育を通しての啓発活動を行った。（歯科診療所運営会議議事録）
- ② 地域のみならず全国において口腔保健啓発の講演会・研修会等において34回出務した。

今後の課題

次年度取り組む課題

- ① 地域の口腔保健関連事業への参画
- ② 口腔保健に関する研究業績の蓄積
- ③ 歯科診療所の活性化対策継続

中長期にわたって取り組む課題

- ① 口腔保健センターの在り方に関する検討
(歯科診療所の在り方を含む)

24. 神戸常盤大学子育て支援センター「子育て広場えん」

センター長 中田 尚美

本年度の課題
大学付属の子育て支援センターとしての役割を見直し活動の充実を図る
本年度の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・活動内容の整備 ・スタッフの業務内容の見直し
主な活動内容・結果
<p>1. <u>目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）</u>：</p> <p style="text-align: right;">各月の日程表・日報・記録ファイル参照</p> <p>長田区との連携事業 ふれあいプラザ（月1回子育て応援プラザ）健康相談（月1回保健師）子育て相談（月3回子育てサポーター）</p> <p>西神戸医療センターとの連携事業 ベビーマッサージ（7月～9月 月1回助産師）</p> <p>法人及び学科間の連携事業 0科：個人カルテ作成による継続的な歯の相談（前期月1回、後期「お口あーんして」に改称、毎週実施）フッ素塗布 前期7, 8月後期は月1回実施（担当：御代出先生）N科：まちの保健室（6月、10月 主担当：庄司先生）</p> <p>E科：親子のふれあい遊び（6月近藤先生）七夕コンサート（7月瀬川先生）足型を学生がアートにします（9月藤本先生）パネルシアター、ブラックシアター（10月松尾先生）付属ときわ幼稚園：幼稚園説明会（8月）神戸常盤女子高等学校：「えん」の見学体験会（6月担当：近藤先生、川井先生）</p> <p>学生受け入れ事業 0科：総合歯科実習、診療補助実習Ⅰ（2年後期）フッ素塗布のサポーター N科：まちの保健室サポーター E科：瀬川・藤本・松尾・中田ゼミ生</p> <p>稼働日数：年間210日 年間入場者数：合計3817名 一日平均8.6名</p> <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>2. <u>委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）</u>：</p> <p>えん運営委員会にてスタッフの業務内容の見直し案を作成するとともに、活動内容について検討を重ねた。その結果、次年度より①見守り主体のスタッフの業務を拡大し、環境整備と環境の構成及び保育の企画・実施も含むこととする。②4学科の専門性を活かし、大学付属の子育て支援センターとして地域に貢献できるプログラムとして「ときわカフェ」を開催する。</p>
今後の課題
<p>次年度課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者数の減少傾向に鑑み、「えん」の活動内容の充実を図る <p>中期課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援施設における「えん」としての取り組みを検討する

25. ライフサイエンス研究センター 年間活動報告書

責任者 坂本 秀生

<p>本年度の課題</p> <p>研究が行い易いように共同利用機器などの使用環境を整える。また、利用者同士の情報交換を活発にする。</p>
<p>本年度の目標</p> <p>本センター利用者の研究が活性化され、学内外での競争的研究資金獲得につなげる。 科研費などの学外研究費を1人でも多く獲得出来る環境を整える。</p>
<p>主な活動内容・結果</p> <p><u>1. 目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）：</u> 坂本秀生：1) ヒト Cables 遺伝子の機能解析、2) POCT 対応装置の機能評価。 井本しおん：「ヘミンによる細胞死誘導は Ferroptosis に合致するかどうかの検討」 澤田浩秀：1) マウスモデルを用いたパーキンソン病の予防の研究、2) 近赤外光トポグラフィ装置及びウェアラブル脳波を用いた認知症予防の研究 柘倉匡文：ネコ免疫不全ウイルスを用いたエイズウイルス潜伏感染モデルの構築。 鈴木高史：1) CHO-1細胞へのCRISPR/Cas9システムを用いたノックインシステムの構築、2) アフリカトリパノソーマ原虫のTbUNC119分子、TbUNC119BP分子に対する抗体作製。 澤村暢：1) FGA ノックアウト細胞を用いたフィブリノゲン合成・分泌に関する研究、2) DSCR9 の発現・機能解析に関する研究。 溝越祐志：1) プレセプシン産生機序の解明、2) CRISPR/Cas9 を用いたゲノム編集系の確立 高岡 裕：1) 東洋医学（鍼灸）での骨格筋修復・再生機構の分子細胞生物学的解明、2) 薬物代謝と分子標的薬作用の <i>in silico</i> 数理モデル化と <i>in silico</i> DR、3) クリニカルパスの研究 大田美香：1) 東洋医学（鍼灸）での骨格筋修復・再生機構の分子細胞生物学的解明、2) フェムト秒レーザー照射が骨格筋に及ぼす効果の研究 菅野亜紀：1) 電子カルテの量・質的監査プログラムの研究、2) 病院内施設・設備のカラーユニバーサルデザインの研究、3) クリニカルパスの研究、4) 薬物代謝と分子標的薬作用の <i>in silico</i> 数理モデル化と <i>in silico</i> DR 高松邦彦：1) 遺伝子発現解析の応用研究 西村チーム（西村直行、佐守秀友） 1) 研究立ち上げ準備、2) 腸管系病原菌検出キットの開発、3) ノロウイルス検出キットの開発、4) 環境中ノロウイルス検出キットの開発、5) ベンチャー会社設立準備</p> <p>目標達成度の評価：①. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：</u> 坂本秀生：研究代表者として科学研究費基盤（C）、研究分担者として兵庫県COE研究費を得た。著書1冊、国際学会発表を2回、国内発表を8回、学術論文和文3編発表。 井本しおん：研究代表者として学内テーマ別研究に採択。国内学会で1発表。論文：和文1編、英文1編。</p>

<p>澤田浩秀:国内発表を1回、招待講演を1回発表</p> <p>栃倉匡文:英文論文1編、国内発表を2回行った。</p> <p>鈴木高史:研究代表者として科学研究費補助金萌芽的研究、本学テーマ別研究費を得た。国内学会発表1回、研修会発表2回、学術論文英文を4報発表した。</p> <p>高松邦彦:研究代表者として本学テーマ別研究費を得た。国際学会発表を1回、国内発表を2回、学術論文英文を2編、学術論文和文を3編発表。</p> <p>澤村 暢:国内学会2回、共著論文和文1編発表。</p> <p>溝越祐志:研究代表者として学内テーマ別研究費を得た。国内学会発表を2回発表。</p> <p>高岡 裕:科学研究費基盤研究(C)に研究代表者として1課題、研究分担者として3課題、日本医療研究開発機構(AMED)から研究分担者として1課題、HPCI採択課題(京コンピュータ)で申請代表者として2課題、AMEDの研究課題(分担)、国内学会発表5回、出前授業(宮城県立泉館山高校)1回、原著論文4本(欧文)、技術報告論文1本(和文)を発表。第17回日本クリニカルパス学会学術集会最優秀賞</p> <p>大田美香:科学研究費基盤研究Cの研究代表者、原著論文2本(欧文)、技術報告論文1本(和文)を発表。</p> <p>菅野亜紀:科学研究費基盤研究Cの研究代表者、研究分担者として2課題、国際シンポジウム発表1回、国内学会発表2回、原著論文(英文)3本、技術報告論文(和文)1本を発表。第17回日本クリニカルパス学会学術集会で最優秀賞を共同受賞。</p> <p>西村チーム(西村直行、佐守秀友)JSTの未来社会創造事業にテーマ「環境中ノロウイルス制御」を提案した。ベンチャー会社設立し、2017年4月5日に設立登記を完了した。</p>
<p>今後の課題</p>
<p>研究活動の促進に寄与し、利用者の利便性を上げる。</p>

26. 事務局 年間活動報告書

事務局長 中野潤一

<p>本年度の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2号館の竣工と3号館耐震改修工事の適切な進捗管理（庶務課） 2. 新会計基準のもとでの適切な予算・決算処理（経理課） 3. カリキュラムの変更後の円滑な授業運営の推進（教務課） 4. アドミッションポリシーに基づく入学者選抜の在り方等の検討（入試広報課） 5. 健康管理室業務の充実及び就職に関する学生支援業務の確立（キャリア支援課） 6. 私立大学等教育研究活性化設備整備事業補助金の活用の検討（学術推進課） 7. 学生募集のなお一層の広報の展開（通信制課程事務課） 8. 図書館の電子サービス拡充と利用認知の向上（図書館事務室） 9. E科2期生・N科6期生の教員採用試験合格を目指した効果的な支援実施（教職支援センター事務室）
<p>本年度の目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本年度の課題に対し、各課職員は、法人本部並びに学科・各委員会・教員と連携を密にし、ながら、円滑な業務を遂行する。 2. 職員は担当業務の研鑽に努め、効率的な業務の執行に努める。 3. 職員間の意思疎通を諮り、情報の共有化を図る。
<p>主な活動内容・結果</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <u>目標達成に向けた活動内容・結果（根拠資料）</u>： <ol style="list-style-type: none"> (1) 法人本部と連携しながら、事故なく新2号館の竣工～移転～仮設の撤去等を行った。また夏期休業期間に3号館の耐震・改修工事を行ない、教育環境の整備を行った。 (2) 新に全職員による前月分証票書類・資金収支元帳等のチェック・確認作業を要請し正確な組織的事務処理に勤めた。 (3) 教学マネジメント改革に伴い、各科・各教員との連携のもと、大幅なカリキュラムの変更に対応し、シラバスに反映した。 (4) 少子化社会に向けた競合大学の増加等による受験者確保の競争激化のなかで、高校現場のニーズ、高校生の意識等を正確に捉え、ホームページの充実や着実な入試広報に取り組み、一定の受験者を確保した。また在学生の母校訪問は、オリエンテーションを充実し、単なる入試広報だけでなく、学生の振り返り、高校との信頼関係の醸成に努めた。 (5) 健康管理室の移転拡充と養護教諭資格者配置などにより、学生の健康管理の充実を図った。また、完成年度2年目として、就職にむけ学科と連携し、学生支援の効率化・充実化に努めた。 (6) 「大学タイプ1(教育の質的転換)」を活用・採択により、3号館改修にあわせた教育環境の充実を図った。また研究実績報告書の提出要請をはじめ、適切な実績管理とともに、教員の科研費申請促進支援など本学の研究力向上に勤めた。 (7) 課員(2名)のみならず他課の職員(5名)の協力を得て、広く医療機関(220施設)を訪問し、受験募集に取り組んだ。 京都(28)滋賀(15)石川(32)東京・神奈川・静岡(59)千葉(71)兵庫(15) 計 220 施設

(8) HPからの貸出し予約等、機能の充実と普及及び、機関リポジトリの運用にかかる規定・制度の整備に取り組んだ。

(9) センター会議(毎月実施)を通じ、学科・センター事務室連携の下、自治体の採用傾向、学生の学びを踏まえたきめ細やかな指導に勤め、一次試験 20 名合格、採用合格 8 名を果たした。

事務局全体として、法人本部と連携したSD研修への積極的参加、地域行事への参加など職員の研修に取り組んだ。また今年度から、課長連絡会を毎週開催し、各課室の連携、担当職員への情報共有に取り組んだ。

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

2. 委員会・組織の主要な活動内容・結果（根拠資料）：

- (1) 教授会、自己点検・評価委員会、後援会等の運営・支援、適切な事務処理
- (2) 目的別予算の執行の定着を踏まえた予算執行による適切な数値管理
- (3) 教学マネジメント改革に係る諸調整について学長会議、教務委員会と連携実施
- (4) 本学の求める人材、受験者のニーズ等に基づく受験科目の見直し等、入試委員会での検討
- (5) 各科教員はもとより、各科就職委員会、国家試験対策委員会、学生委員会等と連携
- (6) KTU 研究開発促進センターとともに研究者の支援、教学マネージメント改革支援
- (7) 法人本部との連携で、通信制課程事務課を含む事務局職員による医療機関訪問
- (8) 図書館運営、図書館利用・情報リテラシーに関わる授業支援、図書・紀要委員会においての紀要・緑葉の発行
- (9) 教職支援センター会議、諸勉強会・学習会、及び個別指導、合格者座談会実施のほか、新に神戸市教育委員会説明会の開催調整等

今後の課題

- (1) 新学長の事務的補佐を通じた大学運営への貢献と 110 周年記念事業への参画
- (2) 学納金滞納や多様な雇用形態への対応、厳しい財政状況にむけた財政規律の確立
- (3) あたらしいカリキュラムの履修・運営にかかる正確な管理
- (4) 西部地域への新たな広報展開などによる受験者の確保
- (5) 少子化や病院経営の厳しさ、診療報酬の改定による看護師求人の縮小等、厳しい求人状況への対応
- (6) 新たな補助金の確保と新学長のもと、テーマ別研究のあり方等、研究環境の検討模索
- (7) 29 年度受験者減の実態把握と修業年限の短縮(10 年→7 年)の影響を見据えながら、医療機関訪問の継続と東京会場での説明会の充実、金沢地域での新規説明会展開など学生確保の取組み
- (8) 教学改革に対応した学生の学び支援として情報リテラシー教育支援、機関リポジトリの運営など研究支援の取組み
- (9) 「新学習指導要領完全実施」先行実施に向けた対策と、「恒常的に二桁公立学校合格者」輩出にむけた取組み

第2部 本年度の「学生による授業評価」学科別のまとめ

I. 概要

本学では、自己点検・評価委員会が中心となり、非常勤を含めた全教員に対して学期毎に学生による授業評価を実施し、評価結果を教員が今後の授業改善に活用する取り組みを進めている。

さらに、教員個人の取り組みに留まらず学科及び大学全体のFD活動に資するべく、自己点検・評価委員会で「学生による授業評価」結果の学科別年間平均値データの解析・考察と、各教員の授業改善策をとりまとめた授業評価報告書を作成している。授業評価の調査結果を学科内FD活動に活用するとともに、授業評価報告書を年次報告書に掲載し、授業改善に向けた情報を大学全体で共有することを目指している。

1. 調査から結果の活用まで

本学の学生による授業評価実施からその結果の活用までの流れを以下に示す。

- 1) 対象科目：原則として、全教員（非常勤教員を含む）の全ての授業科目を対象としている。卒業研究、臨地実習などの科目は除外している。
- 2) 調査時期・方法：各科目の最終授業時に科目担当教員がアンケートを配布する。回答は学生が回収し、事務局へ届ける。
- 3) 評価結果の返却：科目ごとに集計された評価結果を、前期開講科目は後期のはじめに、後期開講科目は年度末に各教員に返却する。
- 4) 教員による「授業評価報告書」作成：各教員は、評価結果を検討し今後の授業改善対策等を「授業評価報告書」としてまとめ、評価結果とともに学科長に報告する。
- 5) 教員による「学生へのメッセージ」作成：各教員は、評価結果を受けて「学生へのメッセージ」を作成し、カテゴリ別の評価結果とともに学生にフィードバックする。「学生へのメッセージ」は、学内3か所に設置された冊子を閲覧する、または学内サーバーにおかれたデータを学内コンピューターから閲覧するという2通りの方法で学生に公開する。
- 6) 授業改善策の共有：授業評価を組織的な授業改善に繋げるために、個々の教員が挙げた授業改善策を教員間で共有する。まず、学科長に提出された授業評価報告書に記載された授業改善策を自己点検・評価委員がとりまとめ、学科会議等で提示して学科教員で共有する。さらに自己点検・評価委員会で全学科の授業改善策をとりまとめ全学的に共有する。
- 7) 授業評価報告書作成：各学科の自己点検・評価委員は「学生による授業評価」の学科別年間平均値データを解析・考察し、学科内の授業改善に向けた取り組みをまとめて学科別の授業評価報告書を作成する。報告書は学科教員の意見を反映して作成する。作成された報告書は年次報告書に掲載し、大学ホームページで公開する。

2. アンケート設問項目および回答様式

アンケートの設問項目・回答様式、対象学科を下表に示す。

	設問項目	回答様式	対象学科
①	学科共通（CCNを除く）の設問項目	5段階評価	M、N、E、O
②	学科毎の設問項目	5段階評価	M、N、E、O
③	看護学科通信制課程独自の設問項目	5段階評価	CCN
④	記述式で回答する設問	記述式	M、N、E、O、CCN

M：医療検査学科、N：看護学科、E：こども教育学科
O：口腔保健学科、CCN：看護学科通信制課程

① 学科共通（看護学科通信制課程を除く）の設問項目：

カテゴリー	問	設問
I 学生自身	3	この授業への出席状況は？
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業1回あたりの平均時間）
	5	この授業に意欲的に参加した。
II 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。
III 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。
	11	授業の進行速度は適切だった。
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。
IV 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。
V 総合評価	16	この授業を受けて満足している。

② 学科毎の設問項目：

医療検査学科

M	17	【実習科目】レポートや課題などのチェックは適切だった。
	18	【実習科目】器具・備品・試薬などの準備は適切だった。
	19	【実習科目】スタッフの補助・対応は適切だった。

看護学科

N	17	【演習科目】到達度の確認は適切であった。
	18	【演習科目】(複数教員授業の場合)教員間の連携、対応は適切であった。
	19	抽象的な内容については、適度に事例を示して具体的な説明があった。
	20	授業内容は、教員独自の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。

こども教育学科

E	17	教員の学生への対応は公平であった。
---	----	-------------------

口腔保健学科

O	17	【実習科目】実習器材や材料の準備は適切に行われた。
	18	【実習科目】教員の人数や配置は適切であった。

③ 看護学科通信制課程の設問項目：

カテゴリー	問	設 問
I 学生自身	3	あなたはシラバスを読んで授業内容を確認して臨みましたか。
	4	3日間の授業に意欲的に取り組みましたか。
	5	この授業を受けて今後の学習に意欲的に取り組みますか。
II 授業内容	6	授業内容は無駄や重複がなく順序立てて整理されていた。
	7	専門的内容に対し、わかりやすい説明があった。
	8	抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった。
	9	授業内容は表面的ではなく教員自身の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。
III 授業方法	10	聞きやすい話し方だった。
	11	授業の進行速度は適切だった。
	12	授業の要点・テーマ・目的がわかりやすい展開であった。
	13	板書・スライド・教材などの使い方は適切だった。
	14	ノートをとるための時間はちょうど良かった。
	15	学生への質問の量、タイミングや方法は適切であった。
IV 学習成果	16	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。
	17	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。
	18	自分で調べ、考える姿勢の大切さに気づいた。
V 総合評価	19	この授業を受けて満足している。

④ 記述式で回答する設問（全学科共通）

- ① この授業でよいと思った点があれば書いてください。
- ② この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。
- ③ 教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。

Ⅱ. 各学科の調査結果報告

1. 保健科学部 医療検査学科

1. 授業評価実施数

- ① 授業評価アンケート回答数(延べ人数):9,509名(受講者数10,724名、回答率88.7%)
- ② 学科長に報告書が提出された科目数:87科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布(図1)

平成28年度前後期医療検査学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図1に示す。

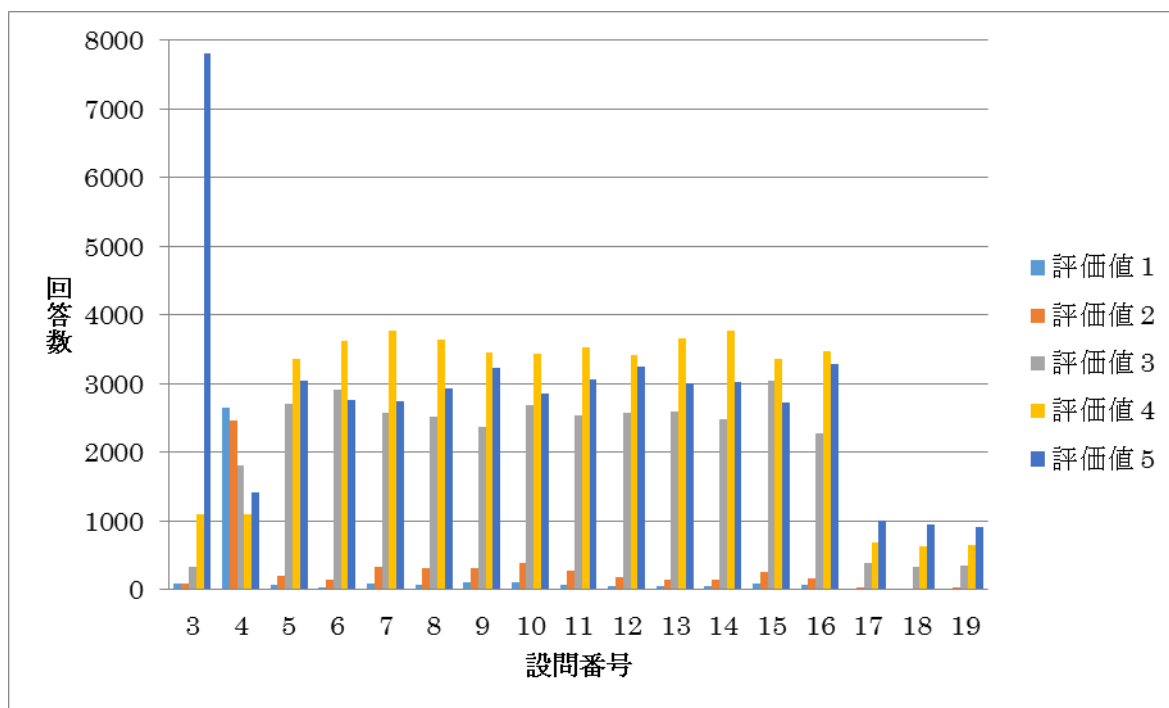


図1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値(表1)

各設問の平均値を表1に示す。問5～19のうちで平均値が高い設問は、問17(実習レポート等のチェック・指導)、問18(実習準備)、問19(実習スタッフ)と、実習科目に対するものであった。実習科目に関する設問を除くと、問12(質問や意見への対応)、問14(基本的な知識を得た)、問16(満足度)が高かった。一方、平均値の低い設問は問10(板書、スライド、教材などの使い方はわか

りやすく適切だった)、問 15(自分で調べ考える姿勢を身につけた)であった。なお、問 3(出席率)及び問 4(学習時間)は他の設問と選択肢が異なるため比較からは除外している。

設問番号	3	4	5	6	7	8	9	10	
平均値	4.74	2.59	3.97	3.94	3.92	3.95	3.99	3.90	
設問番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19
平均値	3.97	4.01	4.00	4.01	3.88	4.05	4.22	4.28	4.24

表 1 設問別平均値

3) カテゴリー別平均値(表 2)

平成 28 年度のカテゴリー別平均値を表 2 に示す。各平均値は昨年度より 0.4～0.8 ポイント上昇している。カテゴリー I の学生自身がやや低くなっているが、設問 3(出席率)と設問 4(学習時間)は他の設問と選択肢が異なるため、一概に比較はできない。

	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 全体評価
H 28 年度	3.77	3.94	3.97	3.96	4.05

表 2 カテゴリー別平均値

3. 集計結果の解析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価

設問別にみて高い評価を得たのは、実習科目に関する設問 17～19 で評価平均は 4.22～4.28 であった。次いで高い評価を得たのは、設問 16(満足度:評価平均 4.05)、設問 12(学生の質問・意見への対応:評価平均 4.01)、設問 14(基本的な知識を得た:評価平均 4.01)、設問 13(新しい考え方・発想を得た:評価平均 4.00)であった。一方、評価が相対的に低かったのは、問 15(自分で調べ、考える姿勢を身につけた:評価平均 3.88)、設問 10(板書、スライド、教材などの使い方が適切だった:評価平均 3.90)であった。

この結果から、例年通り実習科目については担当教員の指導が学生に高く評価されていることがわかる。一方、学習成果に対する評価では、学生は授業を通じて「基本的な知識」を得たと感じているが、「自分で調べ、考える姿勢」は知識ほどには身につけていないとしている。但し、何れ

の設問も評価平均が 3.8 以上と肯定的回答が多かったことから、特に大きな問題点はないものと考えられる。

カテゴリー別評価の年次推移(図 2)をみると、すべてにおいて昨年度を上回る高い評価であり、教員が継続的な授業改善に取り組んでいる結果であると思われる。なお、全体平均(全学科・学年)と比べるとほぼ同じ結果となっている。

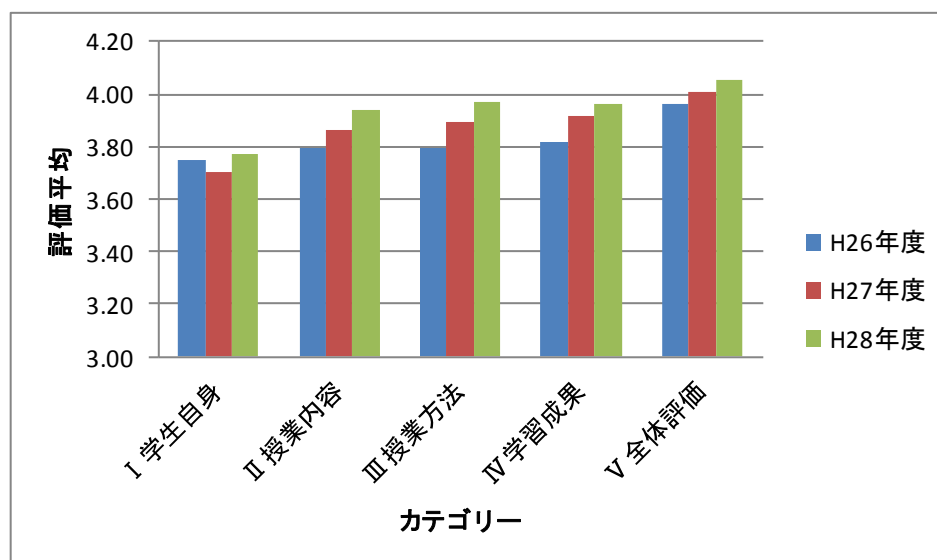


図 2 カテゴリー別評価平均の年次推移

2) 学年別評価 (表 3)

学科長に提出された前期及び後期の授業評価アンケートを学年別に集計し、比較した(表 3)。その結果、4 年生(平成 25 年度入学生)の全評価平均が他の学年よりやや低く、3 年生(平成 26 年度入学生)の評価がやや高い。なお、平成 26 年度入学生の評価は常に高い傾向にあり、入学年度によって授業評価に対する取り組み方や評価基準は変動することがわかる。また、これまでの解析により 1 年次の評価結果は総じて高く、後期に比べて前期に高い傾向にあることを確認しているが、平成 28 年度入学生においても、前期 4.10、後期 3.82 と、やはり前期の評価が高かった。

学年 (入学年度)	カテゴリー別評価平均					全評価 平均
	I	II	III	IV	V	
1 (H 28)	3.83	3.97	3.99	3.94	4.04	3.95
2 (H 27)	3.79	3.90	3.94	3.95	4.03	3.92
3 (H 26)	3.95	4.05	4.08	4.15	4.17	4.08
4 (H.25)	3.61	3.71	3.78	3.84	4.00	3.79

表 3 平成 28 年度 学年別評価結果

3) 授業形態別評価 (表4)

学科長に提出された前期及び後期の授業評価アンケートを授業形態別に集計し、比較した(表4)。その結果、実習科目は講義・演習科目より、すべてのカテゴリーにおいて高い評価となっている。また、前年度の授業形態別評価結果と比べると、講義・演習、実習科目ともすべてのカテゴリーで評価が高くなっている。

形態	カテゴリー別評価平均					全評価 平均
	I	II	III	IV	V	
講義・演習	3.70	3.89	3.94	3.93	4.02	3.89
実習	4.33	4.11	4.12	4.21	4.25	4.20

表4 平成28年度 授業形態別評価結果

4. 授業の改善策の検討

今年度も学科長宛に提出された授業評価報告書に、多くの授業改善策が提案された。提出された報告書の中から、効果があったと記載されていた改善策や授業における問題点とされるものを以下に示す。

<授業方法>

- ・ 毎回の実習の最後に口頭試問を課す方法を試験的に採り入れた。スケッチ終了後も真剣に口頭試問の準備をしている姿が印象的であった。
- ・ 時折学生を指名し、黒板に解答を書かせる方式を採り入れた。
- ・ 教科書に準拠しながらも、重要ポイントを学术论文も引用しながらスライドでまとめ、わかりにくい所は板書で説明。
- ・ 手技をカメラに映し、実況中継をしながら説明を行ったところ学生に好評であった。
- ・ スライドを用いた授業よりも資料と学生とのやり取りで授業を進めていく方が好まれる意見があった。
- ・ 確認テストを取り入れ学生の理解度を確かめながら授業の質を高める。
- ・ 長い待ち時間が発生することが予測される回は事前に予告しておき、学生の自主学習に充てられるようにする。
- ・ 学生による授業内容のまとめ(復習)や課題発表(予習)などを取り入れ、授業時間外に学生が学習に取り組むスタイルを作る。
- ・

<評価・課題・レポート等>

- ・ 実習で提出されたレポートをチェックし、原理や結果の解釈などに関して論理的な思考ができ

ない学生には、直接指導するなど積極的な指導を行う。

- ・ 学生自身に学習時間(予習＝基本的な知識)を設け、スムーズかつ興味のもてる授業にしていく。
- ・ 全ての学生が日常的な自己学修を行うよう、成績に加える小テストを実施。
- ・ 各回の授業後の課題として、manaba コースを利用した問題を課し、授業内容を毎回復習する機会を設ける。

<視聴覚・配布資料・テキスト>

- ・ 実習内容を学生が予習しやすいように、実習書の内容や配布時期について考慮する。
- ・ テキストを補う形の補助プリントの配布と、必要な項目をまとめてマナバのコースコンテンツで見られるようにしたことが学生に評価された。
- ・ 配布資料で学習の重要ポイントを明確に示す。

<授業環境、その他、問題点、>

- ・ 低学年時から学習習慣をつけさせることが重要。
- ・ 学生の質問への対応時、相手が理解できたかどうかを見極めるよう努力する。
- ・ 科目間の連携により、習得度向上を目指した指導。
- ・ データ解析を考えて行うように指導する。
- ・ 自習用に書籍を紹介。

授業形態別評価ではすべてのカテゴリーにおいて実習科目が講義・演習科目よりも高い評価となっていることは先に述べた。しかし、実習科目の平均よりも高い評価を受けている講義・演習科目もある。これら評価の高い講義・演習の授業見学を学科内 FD 研修とし、教員自身が授業改善に向けての参考とするのも一案である。

2. 保健科学部 看護学科

1. 授業評価実施数

- 1) 授業評価アンケート回答数(延べ人数):5,905名(受講者数7,257名、回答率81.4%)
- 2) 学科長に報告書が提出された科目数:39科目

2. 学生による授業評価の集計結果

- 1) 設問別回答分布(図1)

平成28年度前後期看護学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図1に示す。

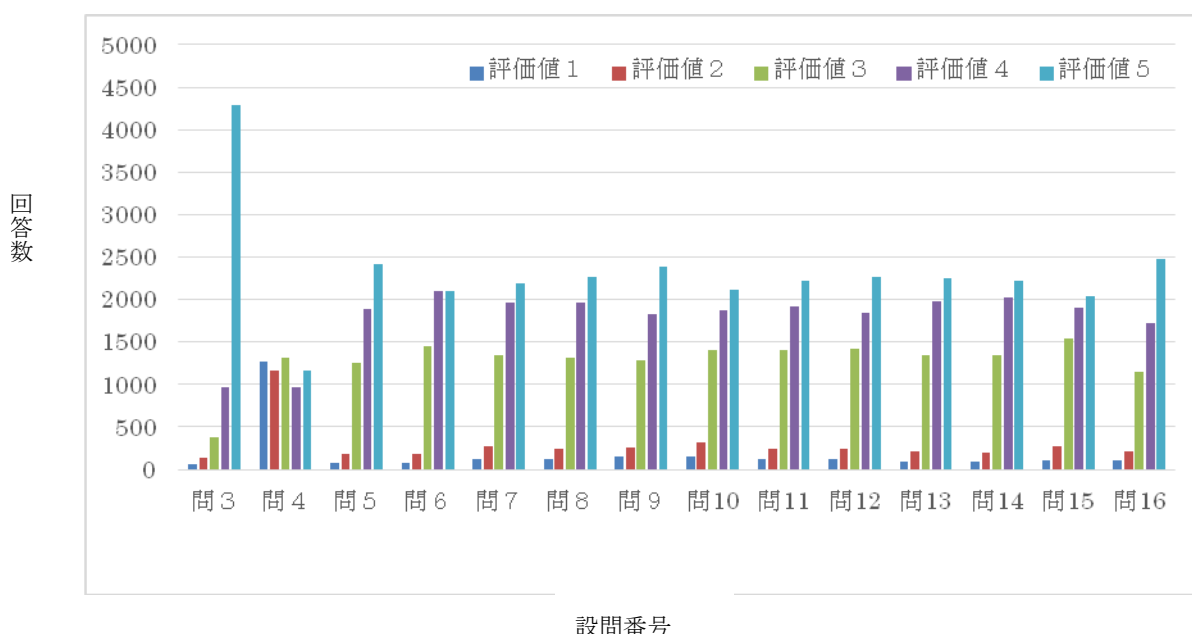


図1 設問別回答分布

- 2) 各設問の平均値と昨年度調査との比較(表1、図2)

各設問の平均値を表1に示す。設問別平均値は、問4「学習時間」を除くと、全て3.9以上と高い評価を得ている。特に4.1以上と高い評価を得たのは、問5「この授業に意欲的に参加した」問16「この授業を受けて満足した」であった。また、最も平均値が低かったのは問4「学習時間」であった。

さらに、昨年度の調査と本年度調査の設問別平均値の比較を図2に示す。平均値は、問3「出席状況」のみ-0.03ポイント低値となったが、その他の項目においては0.03~0.13ポイント高値となった。

設問番号	3	4	5	6	7	8	9	10	11
平均値	4.59	2.93	4.10	4.01	3.98	4.02	4.03	3.94	4.00
設問番号	12	13	14	15	16	17	18	19	20
平均値	4.00	4.04	4.04	3.94	4.10	3.99	3.95	4.06	4.02

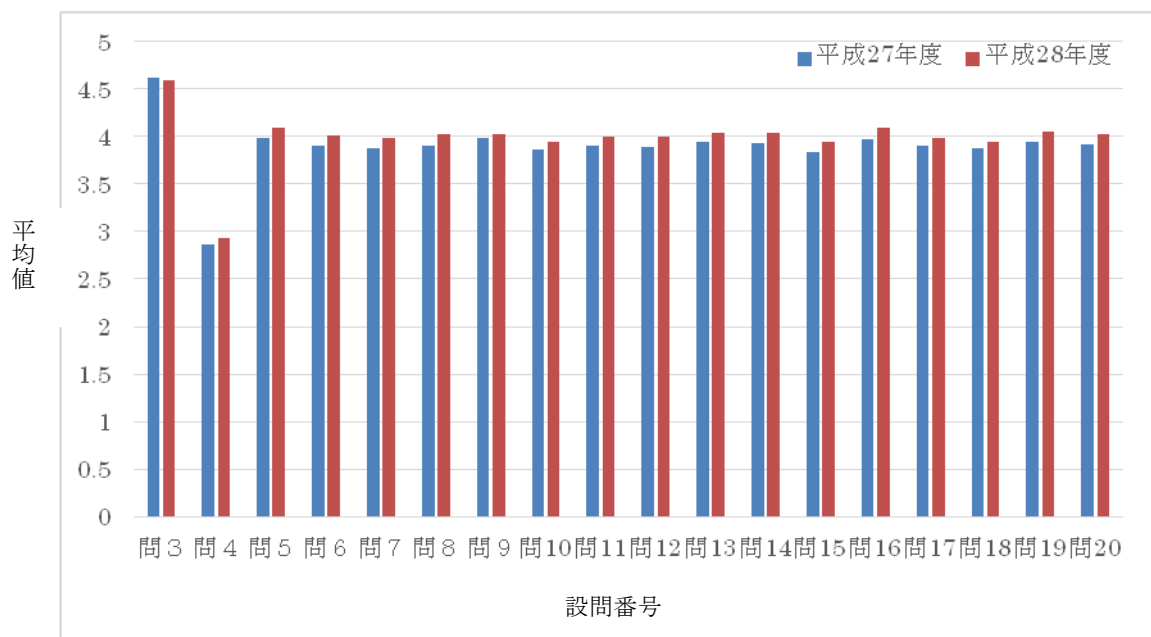


図2 調査実施年別設問平均値

	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 全体評価
H 28 年度	3.9	4.0	4.0	4.0	4.1

表2 カテゴリー別平均値

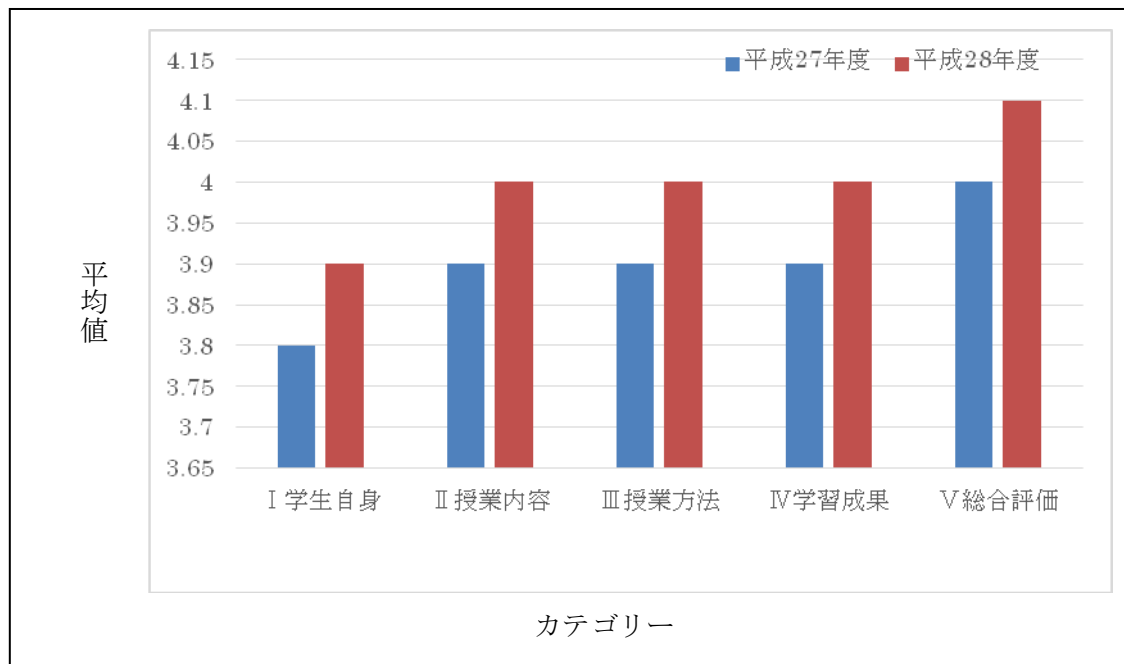


図3 カテゴリー別評価平均の年次推移

3) カテゴリー別平均値(表2、図3)

平成28年度の категория別平均値を表2に示す。平均値はカテゴリー1「学生自身」以外は4.0位上と高い評価を得ている。また、昨年度の調査と本年度調査の категория別平均値の比較を図3に示す。カテゴリー別平均値はすべての項目において昨年より+0.1ポイント高値となった。

3. 集計結果の解析と問題の所在

設問4以外は全て3.9以上と高評価を得た。一方で「授業以外に学習した時間」は昨年同様2.93ポイントと低い評価であった。また、その内訳を詳しくみると、21%の学生が授業以外に学習した時間は0時間と答えている。さらに、「自分で調べ、考える姿勢が身についた」は3.94ポイントで4.0ポイント未満であった。

この結果から、担当教員の指導が学生に高く評価されていることがわかる。しかしながら、「授業以外に学習した時間」が少ないことや、「自分で調べ、考える姿勢が身についた」が4.0ポイント以下で、設問全体の中では下位であったことから主体的な学修はできていないと考える。今後は、学生が主体的に学習できるような工夫が必要である。

さらに、学科別設問項目18「複数教員の授業の場合教員間の連携、対応は適切だった」は3.95と4.0未満であった。また、「先生によってやり方(教え方)が異なる」という自由記述もあった。

この結果から、授業を担当する教員間で指導内容及び方法の統一ができていない可

能性がある。今後は、学生が教員による指導の違いをできるだけ感じないよう、指導内容及び方法を統一するための方策の検討が必要である。

カテゴリ別評価の年次推移(図 3)をみると、すべてにおいて昨年を上回る評価であり、教員が継続的な授業改善に取り組んでいる結果であると思われる。

4. 授業の評価と改善策の検討

学科長宛に提出された授業評価報告書に、評価できる点と問題点および改善策が提案された。以下に、評価できる点を授業方法、授業内容、教材、学修環境に分けて示す。また、問題点とその対策を示す。

<評価できる点>

1) 授業方法

【全員参加型の授業（グループワーク）】

- ・ グループワークを主軸として、学生の学びを引き出しながら講義を展開していった。その結果、一方向的な授業については、改善できたと考えられた。

【臨床とのユニフィケーション】

- ・ 施設で働く本学の卒業生が、一時限の授業を担当し、入所者の生活を VTR を活用しながら説明してくれた。このことは学生が学習意欲を高めるとともに、実際を理解する一助となった。
- ・ 演習に本学卒業生を交えた。学生は卒業生をロールモデルと考え、臨床を踏まえての助言や指導をもらうことができた。この体験は臨床への心構えや考え方の示唆になった。

2) 授業内容

【経験を生かした実例を話す】

- ・ 自身の経験を生かした具体例の提示した結果「実習や先輩の例を挙げて、具体的なことを説明するのが分かりやすくてよかった。」などの自由記載もあり、評価できる。

【理解度の確認】

- ・ 授業の最後に受講票を配布し、学んだことや疑問に思ったことを自由に記述してもらい、学生の理解度を確認しながら進めていった。
- ・ 各単元終了時にミニテストを行い、理解度を確認しながら授業を進めた。

【疑問にタイムリーに答える】

- ・ 学生の疑問については、次の授業時間の冒頭で可能な限り応えるよう努めた。
- ・ LMS システム (manaba) を活用した教育方法を取り入れた結果、授業中にリアルタイムに、学生のコメントを共有することが可能となった。
- ・ マナバでの質疑応答に答えるようにした。

【成果や努力をフィードバック】

- ・ 全員参加型の授業（グループワークと発表）を行い、最優秀賞や感動したで賞など、表彰したところが良かった。

3) 教材

【小説・映像を取り入れる】

- ・ 小説を題材に取り上げた（映画も取り入れた）。主人公の生き方を通して問題解決の過程を学ぶことは、目に見えない思考を客観視することへの手がかりとなった。
- ・ 視覚教材「ナーシングチャンネル」（京都科学）を1ヶ月間トライアル契約し、VTR（解剖生理とフィジカルイグザミネーション）がいつでも視聴できるようにした。その結果、事前にVTRを視聴して授業を受けた学生は、「授業が分かりやすかった」と授業後のアンケートにコメントしていた。
- ・ 最新の研究を紹介したことが良かった。
- ・ 国家試験対策として、昨年度の問題を解説し効果的に学修してもらった。

4) 学修環境

【図書・視覚教材を充実させる】

- ・ 授業外で見る視覚教材や国際問題の図書を大幅に増加して、学生が自由に閲覧できるようにしたことはよかった。

【シミュレーターを常にスタンバイさせる】

- ・ シミュレーターが何時でも使えるように、演習室内に「ラボ」を開設したことは、学生の自主的な学修支援に繋がった。

<問題点と改善策>

1) 学生自身

- ・ 問題(1)：授業以外の学習時間が非常に低い評価となっている（2点台）。
→対策：レポート課題、宿題プリントなどを検討する。

2) 授業方法

- ・ 問題(1)：グループワークにおける学生個々の参加度や参加態度にばらつきがみられた。

→対策：全ての学生が意見を出せる環境づくりなど、学生皆が主体となって授業へ
参画できるような方法を検討していく必要がある。

・問題(2)：複数の教員が授業を担当する科目で「先生によってやり方（教え方）が異なる」という意見があった。

→対策：各単元の中核内容について教員間で意見交換の場をもち、差を最小にする。

3) 学修環境

・体育館が寒い。

4) その他、今後取り入れたいこと

・ポートフォリオを充足させて15回の授業に用いる。

・アクティブラーニング的要素を取り入れたい。

・専門看護師、認定看護師、ナースプラクティショナー、特定行為などエキスパートナースに関する最新知識について関心が高いため、これらを整理し取り入れていく。

以上が学科長に提出された報告書に記述されていた。＜評価できる点＞に関して、授業を担当する教員は【全員参加型の授業（グループワーク）】を取り入れ、学生が主体的に学習できるよう工夫をしている。また、臨床で働いている本学卒業生に授業に参加してもらうことで、学生の臨床看護に対する興味関心を喚起している。この取組は【臨床とのユニフィケーション】として、看護教育の未来を志向する取り組みでもあり、非常に評価できる。

さらに、授業内容も、小テストを取り入れて、単元毎に【理解度の確認】をする、学生の【疑問にタイムリーに答え（る）】などの工夫している。これは、学生がポイントを押さえて学修する支援になっている。さらに、〇〇賞等を設けて【成果や努力をフィードバック】する取り組みなどは、学生の学修意欲を高めることに繋がっていると考える。

また、教材も【小説・映像を取り入れる】【図書・視覚教材を充実させる】【シミュレーターを常にスタンバイさせる】など学修環境を整える努力もなされ、学習成果に繋がっている。

＜問題点＞としては学生の「授業以外の学習時間が非常に低い（評価）」ことが挙げられた、また、授業方法としては、主体的な授業方法としてグループワークを取り入れたものの「グループワークにおける学生個々の参加度や参加態度にばらつきがみられた」ことが挙げられた。さらに、「複数の教員が授業を担当する科目では、教員によって教え方が異なる」ことが挙げられた。これらの問題は、複数の教員から挙げられ

ている内容であり、それぞれの教員が、解決策を立案している。そのため、その成果を期待したい。しかしながら、複数の教員が同じ問題を抱えているため、学科会議などで、情報を共有し解決策について、検討する機会を設けても良いのではないと考える。

3. 教育学部 こども教育学科

1. 授業評価実施数

授業評価アンケート回答数（学生の延べ人数）：5,771名

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布（図1）

平成28年度前後期こども教育学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図1に示す。

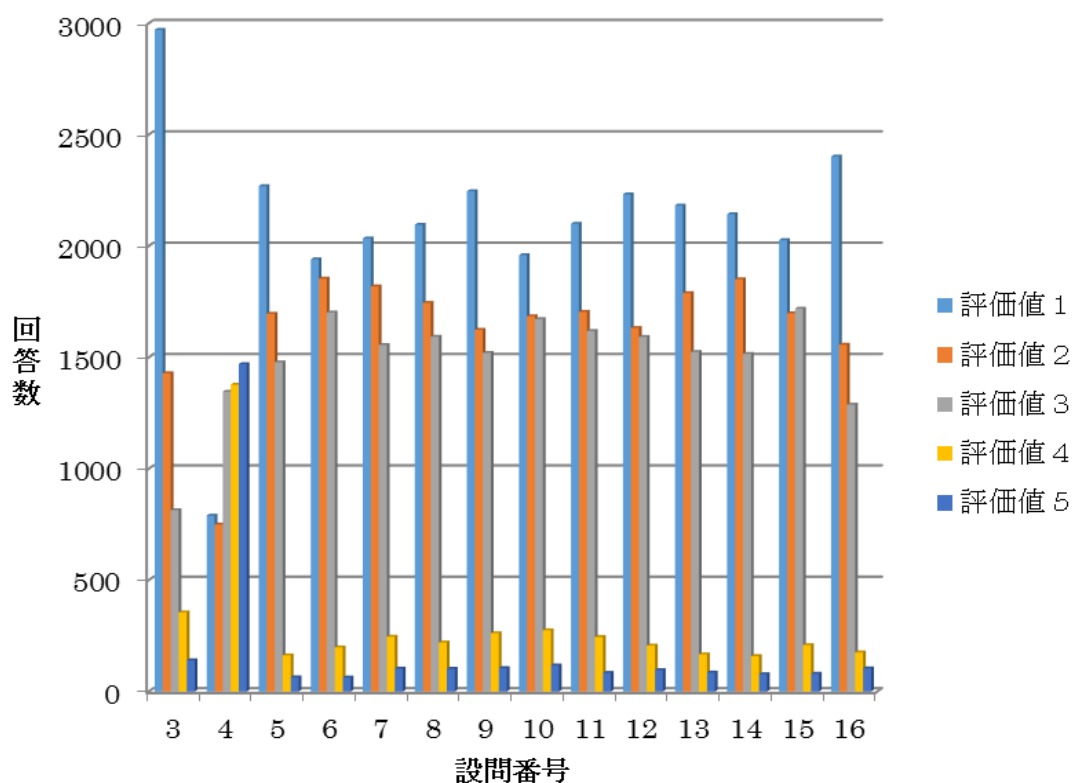


図1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値（表1）

各平均値は 2.65～4.18 の間に分布していた。最も平均値が高かったのは設問3の「この授業への出席状況は？」(4.18)であった。また、最も平均値が低かったのは設問4の「この授業に関連して、授業以外に学習した時間。(授業1回あたりの平均時間)」(2.65)であり、中央値である3を下回っていた。

表1 設問別平均値

設問番号	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
平均値	4.18	2.65	4.05	3.94	3.94	3.96	3.98	3.89	3.95	3.99	4.01	4.01	3.94	4.08

3) カテゴリー別平均値 (表 2)

各平均値は 3.6～4.1 の間に分布していた。高いものから V 総合評価> III 授業方法= IV 学習成果> II 授業内容> I 学生自身の順であった。

表 2 カテゴリー別平均値

I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 総合評価
3.6	3.9	4.0	4.0	4.1

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価

設問別評価では、設問 3～16 の各設問における平均値上位 3 項目は、問 3「この授業への出席状況は？」(4.18) が最も高く、続いて設問 16「この授業を受けて満足している。」(4.08)，設問 5 の「この授業に意欲的に参加した」(4.05) であり、いずれも 4.0 以上であった。

また、最も平均値が低かったのは、設問 4 の「この授業に関連して、授業以外に学習した時間。(授業 1 回あたりの平均時間)」(2.65) であり、例年指摘されている正課外の学習時間の短さが今年も同様にみられた。その他の項目はすべて 3.8 から 4.1 未満の範囲に分布であり、やや肯定的な回答であった。これらの項目すべてにおいて最頻回答は 5 (そう思う) であり、昨年度調査における最頻回答 3 (どちらでもない, ふつう) と比べると、いずれの項目も高い評価であった。なお、学科独自項目のため平均値上位 3 項目からは省いたが、問 17「教員の学生への対応が公平」については 4.16 と高い評価であった。

次に、カテゴリー別評価では II 授業内容と I 学生自身の 2 カテゴリーが全学科平均値よりも 0.1～0.2 ポイント低い結果であった。カテゴリーの中で最も低かったのは昨年同様 I 学生自身である。このカテゴリーに含まれる授業時間外の学習時間の少なさが平均値を下げる結果となった。

2) 昨年度調査との比較 (図 2, 図 3)

まず、平成 27 年度調査と平成 28 年度調査の設問平均値を図 2 に示す。

全体的には昨年と同じ傾向であるが、設問 3 以外の項目はいずれもポイントが上がっていた。(得点分布: 3.6 から 4.0 未満→3.8 から 4.1 未満)。昨年度は 4 を超える項目が 1 つだけであったが、今年度は 6 項目に増えていた。

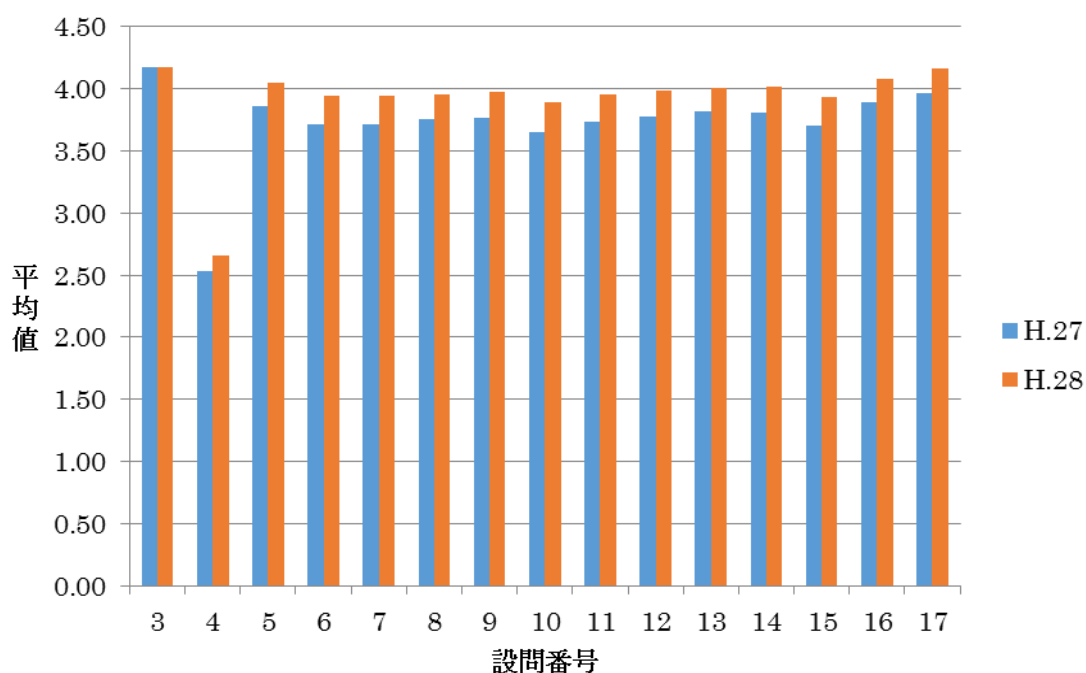


図2 調査実施年別設問平均値

次に、平成27年度調査と平成28年度調査の 카테고리平均値を図3に示す。
 昨年度の結果と比べると、すべてのカテゴリにおいてポイントが上がっていた。平均値の分布も昨年の3.5~3.9から3.6~4.1と上昇していた。特にⅢ授業方法は最も平均値の差が大きく0.3ポイント上昇していた。近年の授業方法改善のさまざまな取り組みの成果が数字となって現れてきたものとする。

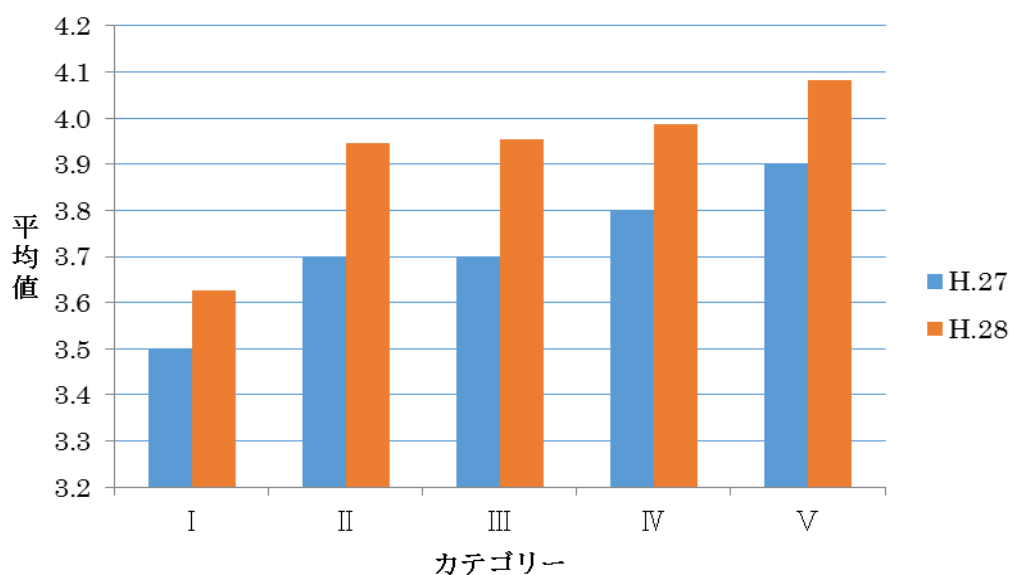


図3 カテゴリ平均値

4. 授業の改善策の検討

「学生による授業評価」を受けて学科長宛に提出された報告書の中で、多くの授業改善策が提案された。以下に改善策としてカテゴリーに分類した結果を何例か示す。

●評価

- ・平常点のあり方を検討する。
- ・模擬授業の評価のあり方（グループ内相互評価、指導案や授業づくりへの参加度）を検討する。
- ・確認テスト等を取り入れる。
- ・中間テストを実施する。

●授業方法

- ・個人学習と協働学習の両方を適切に取り入れる。
- ・一人ひとりに応じた指導法を検討する。
- ・LMS システムである「manaba」による反転授業を体験させる。
- ・電子黒板の操作方法など、ICT 機器を活用できる能力を育成する。
- ・1 授業回ごとにパーソナルポートフォリオの作成を計画する。
- ・グループワークや模擬保育を少人数で行う。
- ・保育現場で使用している教材や教具を使用する。

●教員間の連携

- ・担当教員間での連絡内容、授業内容、進度の進め方、評価など年度始め等に科目内で統一させる。

以上、数多くの改善策が学生による授業評価アンケート結果を受けて学科長に提出される報告書から上がっていた。例年、よりよい授業を展開するための方法や取り組みが提案され、全学的に授業改善に対する教員の意識も高まってきている。今回の調査結果からも、学生が主体的に学びに臨めるように、学生のモチベーションを上げる工夫が検討されている。本学科においても、先述のカテゴリー評価における授業方法のポイントが上昇したことは1つの結果といえる。しかし、平均値の変動にとらわれて一喜一憂するのではなく、教員個人や学生の特性を検討し、授業内容に応じた授業方法が展開されているかどうか各自が振り返り、検討し続けていく必要がある。

また、昨年に引き続き、複数教員担当科目やオムニバス科目の教員間の連携に関する改善策の記載がみられた。科目主担当教員と他の担当教員間、あるいは非常勤講師と各学科教務委員との間の連携不足を担当教員自身が感じていながら改善に至っていないようだ。教員の専門性や科目の特性などにより、連携が難しい場合もあるかもしれないが、担当教員が連携の意識化を図り早期の解決が望まれる。

4. 短期大学部 口腔保健学科

1. 授業評価実施数

① 授業評価アンケート回答数(延べ人数)5028名(受講者数4202名、回答率83.6%)

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布(図1)

平成28年度前・後期口腔保健学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図1に示す。昨年度と比較して、すべての設問において評価5が増加した。評価4がおおいのがここ数年の特徴であったが、今年度は学生の評価が高い傾向になっている。特に設問5の「意欲的な授業参加」が高い。

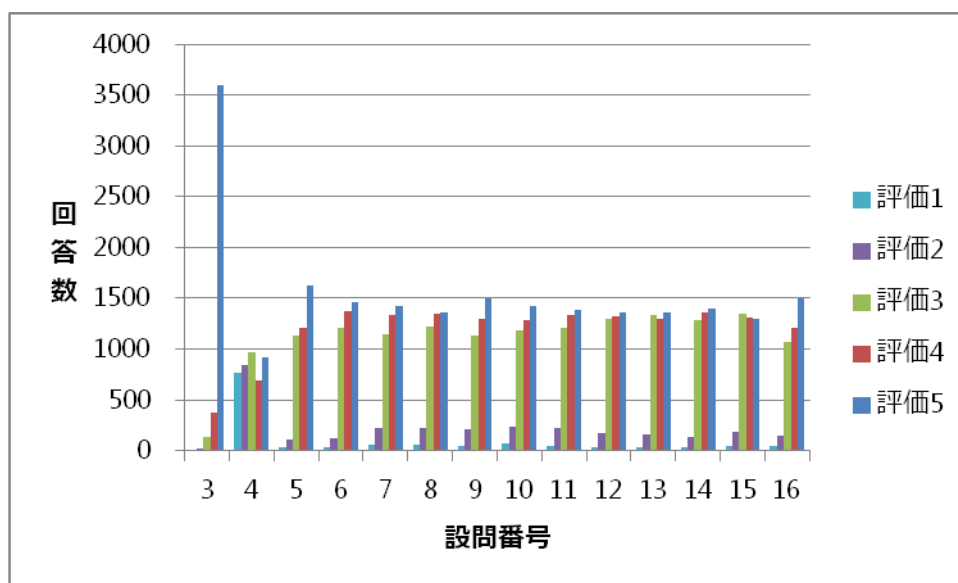


図1 設問別回答分布

2) 設問別平均値(表1)

平成28年度の各設問の平均値を図2に示す。昨年度と同様、設問3「授業への出席状況」の平均値が4.82と突出して高く、設問4の「授業以外の学習時間(授業1回あたりの平均時間)」が他の設問に比較して極端に低い評価であるのは例年と変化がないが、設問3においては初めて3.0を超えた。その他の項目はすべて3.87~4.04の範囲に分布しており設問間に大きな差は認めなかった。

設問番号	3	4	5	6	7	8	9
平均値	4.82	3.03	4.04	3.98	3.91	3.89	3.95
設問番号	10	11	12	13	14	15	16
平均値	3.89	3.91	3.91	3.91	3.94	3.87	4.00

表 1 設問別平均値

3) カテゴリー別平均値(表 2)

平成 28 年度の категория別平均値を表 2 に示すⅡ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは昨年度とほぼ同じであるが。カテゴリーⅠの学生自身は、昨年度よりも上昇した。これは、設問 4「授業時間外学習時間」および設問 5「意欲的な授業参加」の向上によるものと考えられる。

	Ⅰ 学生自身	Ⅱ 授業内容	Ⅲ 授業方法	Ⅳ 学習成果	Ⅴ 全体評価
H 28 年度	3.97	3.93	3.91	3.91	4.00
H27 年度	3.84	3.90	3.91	3.91	4.02

表 2 カテゴリー別平均値

3. 集計結果の解析と問題の所在

設問別平均値において設問 3 が最も高く (4.82)、設問 4 が最も低い評価 (3.03) となっているのは例年のそして全学的な傾向である。しかし、設問 4 は前年の評価 (2.62) から大幅に改善されたことは評価できる。設問 4 の回答分布をみると評価 4 および評価 5 が増加していることがわかる。前年は、評価 1、2、3 > 評価 4、5 であったが、今年度は評価 1、2、3 ≒ 評価 4、5 である。評価 4 (授業外学習時間 1 時間以上)、評価 5 (同 2 時間以上) の増加が平均値を上昇させている。授業方法の改善により、授業時間外学習時間が少しずつ確保されているように感じる。

設問 3 は例年、他学科に比較しても高い平均値であり、ほとんどの学生が意欲的に授業に参加していると考えられる。

さらに昨年度以前は、設問 5 から設問 14 において評価 3 (どちらでもない普通) が圧倒的に多く、1、2 が非常に少ないという傾向が認められていたが、今年度はこの設問すべてにおいて評価 4、5 が評価 3 よりも多くなっており、ここでも教員の努力が伺われる結果となった。

評価が比較的高い (5 が 4 よりもかなり多い) 設問は、5「意欲的に参加」、9「聞きやすい話し方」および 16「満足度」であり、比較的低評価 (5 と 4 の差がない) の設問は 7「授業内容の理解」、8「知的好奇心を惹起」、11「進行速度」、14「基本的

な知識」、15「自分で調べ、考える姿勢」であるのは、これもほぼ例年通りの結果である。

また、設問7から11にかけて評価2が他の設問に比較してやや多いのは、評価4、5の対比で成績の2極化ともいえる状況と考えられる。

ここ数年の傾向ではあるが、学生は授業には常に意欲的に参加しており、一部には授業内容や進行速度に不満を持つ者もいるが概ね授業には満足している学生が多いことに気付く。しかし、自ら調べ考える姿勢が弱く、授業時間外の学習が極端に少ないことから授業そのものが「自ら考え、自ら習得する」授業にはなっておらず、いまだに「教えられる」ことが中心であることを物語っている。教員が目指すべきものは、学生が「疑問を感じそれを考えて解決する」ことを意識した授業方法の確立であり、常に知的好奇心を刺激するような授業内容である。そのためには、研究に立脚した深い学びや科学的にももの見方考え方の教授であり、同時に manaba などを利用した予習重視（翻転）授業である。しかし、平成26年度、平成27年度との比較で評価3が経年的に減少し、今年度は評価5が上昇したことは、今年度の学生のみに特徴的な傾向ではなく、授業内容の見直しが図られている成果であると考えたい。

図2に示すように本学科も経年的にみると授業改善の成果は現れているが、今後も、学生の授業時間外学修時間が確保できるようなカリキュラム改革や斬新な授業方法の導入など画期的かつ継続的なFD活動が求められる。

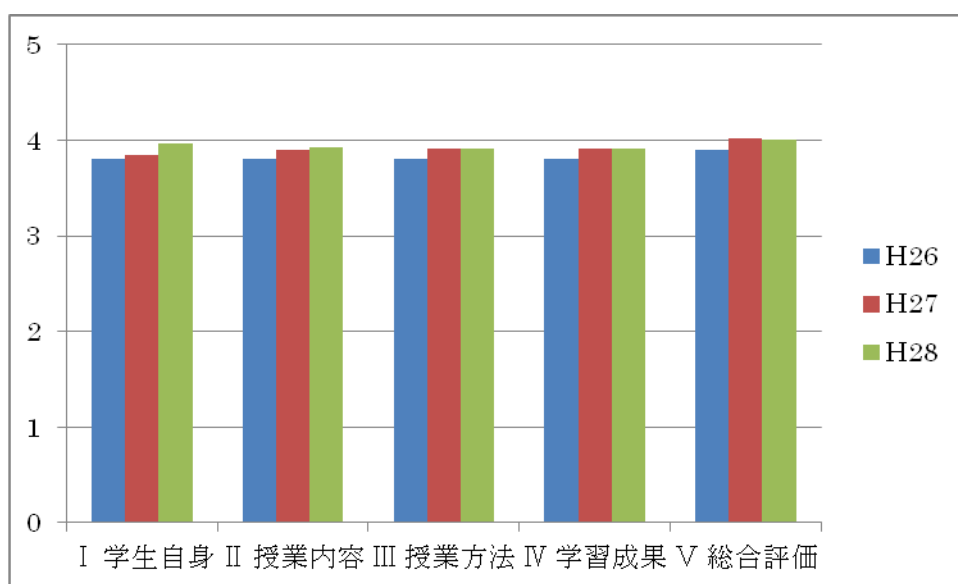


図2 カテゴリー別評価平均の年次推移

4. 授業の改善策の検討

学科長宛に提出された授業評価報告書の中から、授業改善策や授業における問題点とされるものを以下に示す。

<授業方法>

- ・今年度、授業資料の大幅な改訂を行い、冊子として1つのノートを配布することにした。
- ・授業外の学習時間を増やすため課題を出す。
- ・自ら課題を見だし、調べる作業を取り入れたい。
- ・私語の注意をもう少し増やす
- ・授業内容を見直し、分かりやすく解説を行う。
- ・授業進行度を教科書上で示すこと
- ・適切な進行をし、時間内に終了するようにする
- ・事例を通してそこから自分たちが出来る活動を考えるというグループワークを行ったことで、学生が意義やニーズを理解する事が出来やすかったように感じた。今後とも適した事例をあげながら、学生にとって分かりやすい授業展開を考えていきたい
- ・改善すべき点に関しては、授業評価の学生からのコメントで指摘された配布資料の問題点を受け授業資料を見直したところ、昨年度から内容を追加していたにも関わらず、学生へ配布したプリントのスペースを広げる対応をしていなかったことが分かった。授業内容の見直しの際に、関連する資料の見直しも見落とさないよう注意したい
- ・グループワークと発表形式を継続する
- ・学生の学習意欲を高められるような内容の授業にしたい
- ・らに主体的に取り組めるように工夫をしたい
- ・興味を持たせる工夫を授業内で取り入れる
- ・自信をもって参加できるようにする
- ・科目の重要性を理解させる工夫をする

<評価・課題・レポート等>

- ・スライドの速度を遅くする。
- ・実技とつながるようなレポート内容を検討する
- ・歯科衛生士関連専門誌のレポートを充実させる
- ・学習成果をもっと出せるよう、課題の出し方などを工夫し、授業外での学習時間を増やすことにつなげたい

<視聴覚・配布資料・テキスト>

- ・資料の内容については、日々進化させるように、時事の話題なども取り入れながら、興味ある授業を展開していきたい
- ・配布資料は総てカラー印刷とし学生にわかりやすい資料とする。
- ・パワーポイントを使うときに教室のモニタが小さいため、次年度は少しでも大きいスクリーンがある教室を使用できればよいと考える。
- ・資料の内容については、修正を加えながらより良いものにしていきたい

<その他>

- ・毎年、少しずつ向上できるように、修正を加えていきたい。来年度は試験の点数

が上がるように、成績不良者の確認と指導に取り組みたい

5. 短期大学部 看護学科通信制課程

1. 授業評価実施数

- ① 授業評価アンケート回答数(延べ人数) : 1152名(受講者数1251名、回答数92.0%)
- ② 課程長に報告書が提出された科目数: 8科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別解答分布 (図1)

平成28年度前後期 看護学科通信制課程の学生による授業評価調査の設問別解答分布を図1に示す。

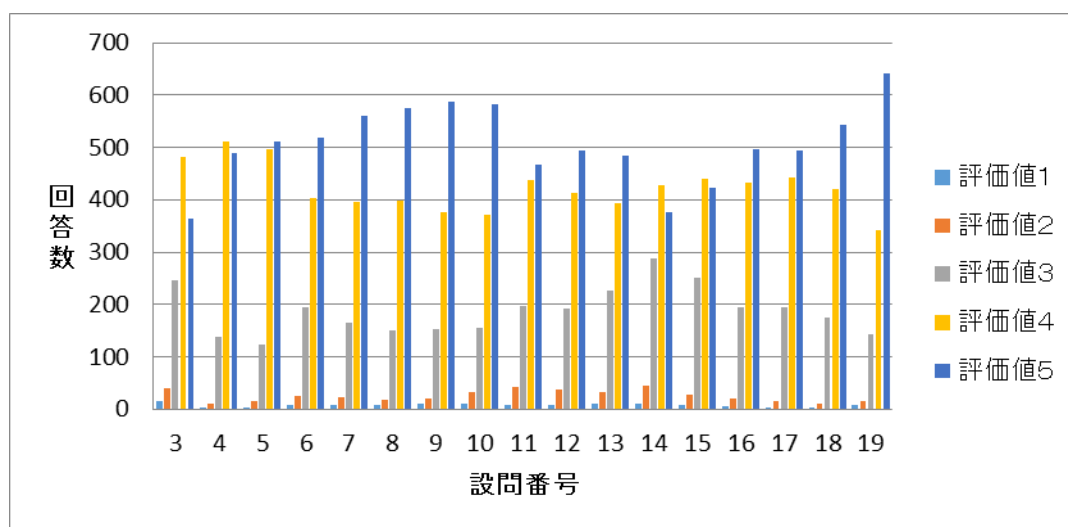


図1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値 (表1)

設問3～19の各設問において16項目が平均値4.0～4.5と高かった。最も高かったのは総合評価の問19「この授業を受けて満足している。」で4.39であった。次いで、昨年と同様に授業内容の問8の「抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった。」問9の「授業内容は表面的でなく教員自身の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。」であった。一方、平均値が低い設問は授業方法の問14「ノートをとるための時間はちょうどよかった」であった。昨年底かった「シラバスを読んで授業に臨む」は、昨年の3.81から4.02にあがっていた。

設問	3	4	5	6	7	8	9	10	11
平均	4.02	4.28	4.30	4.22	4.28	4.31	4.31	4.29	4.14

設問	12	13	14	15	16	17	18	19
平均	4.18	4.15	3.97	4.09	4.22	4.22	4.29	4.39

表1 設問別平均値

3) カテゴリー別平均値（表2）

すべてのカテゴリーにおいて4.0以上で、高いものから

V総合評価>II授業内容>IV学習成果>I学生自身>III授業方法の順であった。

I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 総合評価
4.20	4.28	4.14	4.24	4.38

表2 カテゴリー別平均値

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価

設問別評価では、17設問中16設問は平均値が4.0～4.4と高い評価を得ている。昨年との評価よりも全設問において評価は上がっている。今年度、最も高かった項目は「この授業を受けて満足している」であり、学生の授業に対する満足度の高さがうかがえる。昨年度の改善策で意見交換された内容を各教員が生かし、授業に反映した結果が出ているのではないかとと思われる。授業内容に関する4設問はすべて高い評価であったが、中でも「抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった。」と「授業内容は表面的でなく教員自身の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。」は4.31と高い評価を得ていた。

昨年度低かった「シラバスを読んで授業に臨む」については、昨年の3.78から4.02に評価があがっており、昨年検討した授業前からの学習姿勢を養うための工夫が功を奏しているものと思われる。授業方法では今年度も「ノートをとる時間がちょうどよい」が最も評価が低かったが、昨年の3.77から3.97に挙がっている。カテゴリー別評価でも、すべてのカテゴリーにおいて4.0以上と高い評価を得ているが、従来と同じく「III. 授業方法」に関しては5つのカテゴリーの中で最も低い。公開授業への参加などの課題も含め、教員の授業方法のスキルアップを今後も継続し、更に向上する必要があると考える。

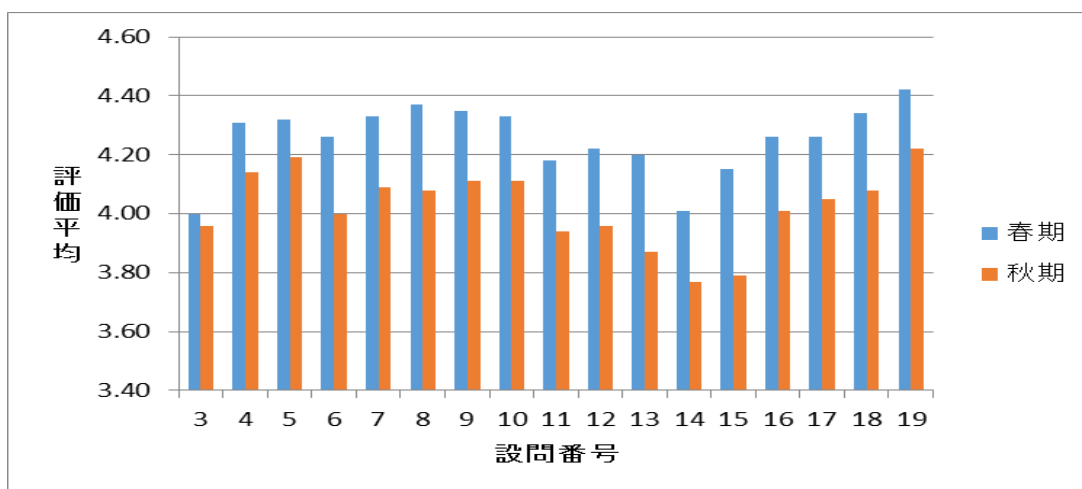


図2 各設題平均値の比較 (春期と秋期)

春期スクーリングの受講生に比べて、全設間で秋期スクーリングの評価平均が低いという結果だった。昨年度は、すべての設間において、秋期スクーリングで評価平均が高かった。今年度も春期スクーリングでの授業評価結果を課程会議で共有し秋期スクーリング内容に生かす工夫をしたが、秋期開講時期までに話し合いの場が設けられず、生かせなかったことが 1 因として挙げられる。従来、入学直後よりも数か月経過後の学生は受講のモチベーションを維持しにくいという問題がある。しかし、「シラバスを読んで授業内容を確認して臨む」は、昨年度：春期スクーリング 3.76、秋期スクーリング 3.91 が春期スクーリング 4.00、秋期スクーリング 3.96 の結果に見られるように、今年度は春期の評価が昨年より全設間において評価があがっていることから、春期受講学生と秋期受講学生との違いについて分析し、対応を考える必要があると思われる。学習の進捗状態などの傾向の分析も合わせて行う必要がある。

4. 授業の改善策の検討

前期授業評価報告書をもとに 11 月の課程会議で「授業の改善策について」報告し、次年度シラバスの内容の見直しに生かした。また、12 月の課程会議では、「全学の授業改善策のまとめ」を参考にして、自分の授業の見直しにどう活用できるかに加え、PDCA サイクルを回すためアクションとして取り上げるべき内容がないかについて討議した。

教員からは以下のような改善策が挙げられた。

【動機づけ】

- ・ プレカレッジ、あるいは入学時のオリエンテーション、説明会などでも学生自身の意識を高めることが必要。神戸会場で入学式後のオリエンテーションや学習説明会などでシラバスを読むことの必要性を強調する
- ・ シラバスを読んで授業に臨むことに関しては、教員個人として取り組むには限界がある。本課程としてどう対応していくか考えることも必要なのではないか。

【授業方法】

(1) 教材の工夫

- ・ 人数が多い講義では、全体を見渡し、学習効果が上がる様にする。
- ・ スライドの工夫で字の大きさや図を入れるなど更に見やすくする。・ 資料の表現やポイントを明確にする。・ B4用紙からA3用紙に拡大する。
- ・ 講義の際の提示資料が見えにくい原因としては、学生の老眼、提示資料が文献からの引用であるため画像に限界がある。提示資料の用紙の大きさが限られていることなどが考えられる。可能な限り拡大する、丁寧な説明を加えるなどの配慮を行う。
- ・ 配布資料に使うパワポの印刷資料に変更する。

(2) スピード

- ・ ノートをとる時間については、作成した資料をOHCに映しながら授業を進め、大事なところは学生に印をつけてもらう。それでも時間が足りないという学生には、
- ・ 学生の反応に合わせ、ゆっくり落ち着いて話すように努める。
- ・ 講義の中でどの部分をノートにとる必要があるのかを明確にできるように授業の中で誘導する。・ さらに内容を精選して教授する事項を絞っていくことを検討する。
- ・ 興味も能力も個人差がある中で、DVD でイメージづけをしながら、あれもこれも教えようとしないことと、その都度、発問して反応を確認すること。

(3) その他

- ・ 授業する側、聴く側も集中力に低下は必須であり、気分転換を図るために、身体機能や軽いゲームなど適宜取り入れることを考える。

以上の改善策に対して専任教員の意見交換の時間を設けた。

1. 来年度も通信制課程ではFDで継続して授業方法の改善を取り上げたらいいのではないかと。
2. 通信制課程では、授業評価をざっと見ると学生の反応に敏感に对应、対応を工夫していると思う。
3. 学科によってそれぞれ違うが、通信では、次に質問することができないので、思い出せるような資料を工夫することが必要と感じる。
4. 事例演習・見学実習・スクーリングの内容が一貫するように学生への課題の出し方や時間外の学習のさせ方を検討していく必要があるのではないかと。

通信制課程の授業形態は、春期スクーリングで大半の面接授業が終了するために、授業評価から考えられた改善策、12月のシラバス作成時期までに共有することで、次年度の講義の改善に役立っていることができる。今後も継続し、より具体的に見直しができるようにしていきたいと考える。

第3部「卒業生へのアンケート調査結果」報告

I. 概要

本学では、「ディプロマポリシーの達成度に焦点をあてた学修成果の点検・評価」の一つとして、卒業生および卒業生の就職先を対象としたアンケート調査（卒後評価）を実施している。さらに卒業生に対しては、「学修支援、キャリア支援、学生サービス、学修環境の整備等の学生支援の点検・評価」を目的としたアンケート調査も同時に行っている。

外部からの評価も含む卒後評価結果を教職員にフィードバックすることにより、本学のカリキュラム改正や授業内容・方法の改善、様々な学修支援の見直しなどに活用されることを期待している。

調査から結果の公表まで

本学の卒後評価の調査実施からその結果の公表までの流れを以下に示す。

- 1) 対象・実施年：卒業生に対するアンケート調査は卒後 1 年目の卒業生を対象とし、医療検査学科、看護学科、口腔保健学科では平成 24 年度から毎年実施し今回が 5 回目、看護学科通信制課程では平成 25 年度から実施し今回が 4 回目の調査である。こども教育学科は平成 28 年 3 月に 1 期生が卒業し、今年度が初回調査である。
就職先へのアンケート調査は 3 年に 1 回の実施とし、これまでに平成 24 年度、平成 27 年度の 2 回実施しており、今年度は調査年にはあたらない。
- 2) アンケート方法：11 月に卒後 1 年目の卒業生にアンケートを送付し、無記名での回答・返送を依頼する。なお、卒業生の手元に確実に届けるために、郵送先は卒業生の就職先とした。アンケートの設問項目は各学科の報告書を参照されたい。
- 3) 卒後評価報告書作成：自己点検・評価委員会でアンケート結果の集計・解析を行い、学科別の卒後評価報告書を作成する。報告書は学科教員の意見を反映して作成している。作成された報告書は年次報告書に掲載し、大学ホームページで公開する。

Ⅱ. 各学科の調査結果報告

1. 保健科学部 医療検査学科

1. 回収率

	発送数	回答数	回収率
平成 28 年度	88	21	23.9%
平成 27 年度	83	33	39.7%
平成 26 年度	86	11	12.8%

2. 調査結果

● 卒業後の進路

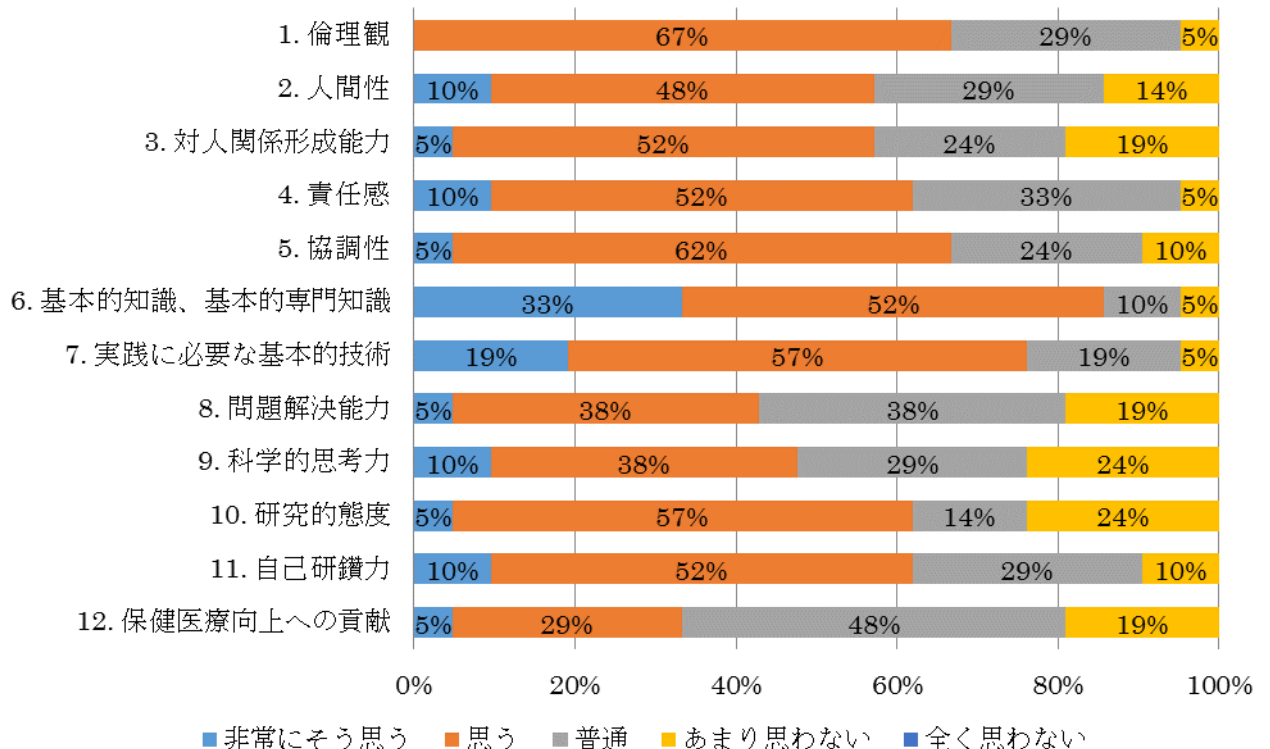
A) あなたの進路をお答えください

進学	2
病院	15
診療所	1
大学病院	1
臨床検査関連企業	1
その他（胚培養士）	1

● ディプロマポリシーに対する評価

B) あなたは大学での学修や学生生活を通じて以下のものを身につけることができましたと思いますか

1. 医療に携わるものとしての、**倫理観**を身につけることができました。
2. 医療に携わるものとしての、**豊かな人間性**を身につけることができました。
3. 医療に携わるものとしての、**対人関係形成能力**を身につけることができました。
4. チーム医療の一員として必要な、**責任感**を身につけることができました。
5. チーム医療の一員として必要な、**協調性**を身につけることができました。
6. 医療検査に必要な**基礎知識および基本的な専門知識**を修得することができました。
7. 医療検査の**実践に必要な基本的技術**を習得することができました。
8. **問題解決能力**を身につけることができました。
9. **科学的思考力**を身につけることができました。
10. **研究的態度**を身につけることができました。
11. **自己研鑽力**を身につけることができました。
12. 地域社会や国際社会で**保健医療の向上に貢献**できる能力を身につけることができました。



12 項目のうち 9 項目については肯定的な回答（非常に思う・思う）の割合が 50%以上を占めており、昨年度に比べて、平均 49.6%から 59.9%と上昇している。

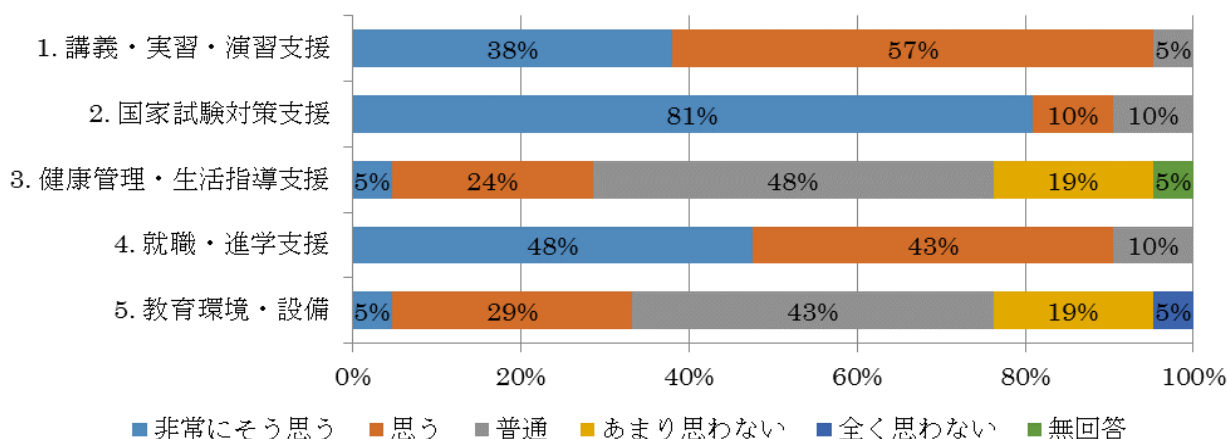
特に評価の高かったもの（肯定的な回答が70%以上）は、「B6：医療検査に必要な基礎知識および基本的な専門知識を修得することができた。（以下、基本的知識、基本的専門知識）」および「B7：医療検査の実践に必要な基本的技術を修得することができた。（以下、実践に必要な基本的技術）」の2項目であった。

特に評価の低い項目（肯定的な回答が30%以下）はなかったものの、「B12：地域社会や国際社会で保健医療の向上に貢献できる能力を身につけることができた。（以下、保健医療向上への貢献）」は肯定的な回答が34%と項目の中では一番評価が低かった。

● 本学の各種支援に対する評価

C) あなたが学生時代に大学から受けた支援等について教えてください

1. 講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。
2. 臨床検査技師国家試験に対する学修支援・指導がよかった。
3. 健康管理、生活指導に対する支援がよかった。
4. 就職・進学に対する支援がよかった。
5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコートなど）がよかった。



5項目のうち3項目については肯定的な回答の割合が90%以上を占めており、昨年度に比べて、平均63.0%から67.6%と上昇している。

特に評価の高かったもの（肯定的な回答が70%以上）は、

「C1：講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。（以下、講義・実習・演習）」

「C2：臨床検査技師国家試験に対する学修支援・指導がよかった。（以下、国家試験対策）」

「C4：就職・進学に対する支援がよかった。（以下、進路支援）」の3項目である。

「C1：（講義・実習・演習）」は肯定的な回答がアンケートを取り始めてから最高の95%となり、昨年の73%に比べ22%上昇した。また、「C2：（国家試験対策）」においては肯定的な回答91%のうち「非常に思う」の回答が81%を占めている。

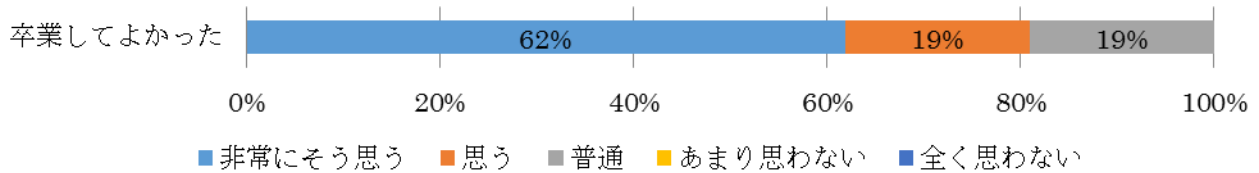
特に評価の低かったもの（肯定的な回答が30%以下）は

「C3：健康管理、生活指導に対する支援がよかった。」の1項目である。

● 総合評価

D) 学生時代を振り返って総合的にお答えください

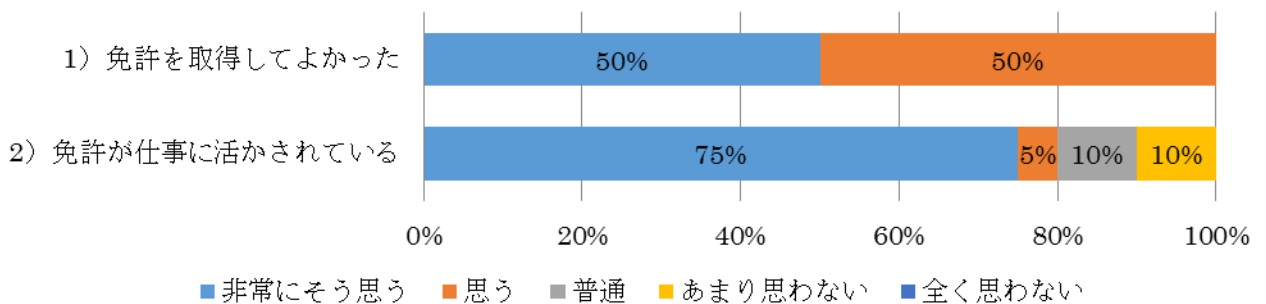
1. 神戸常盤大学保健科学部医療検査学科を卒業してよかったと思う。



● 職業選択の満足度評価

E) - 1. 臨床検査技師資格を取得された方にお尋ねします（免許取得者のみお答え下さい）

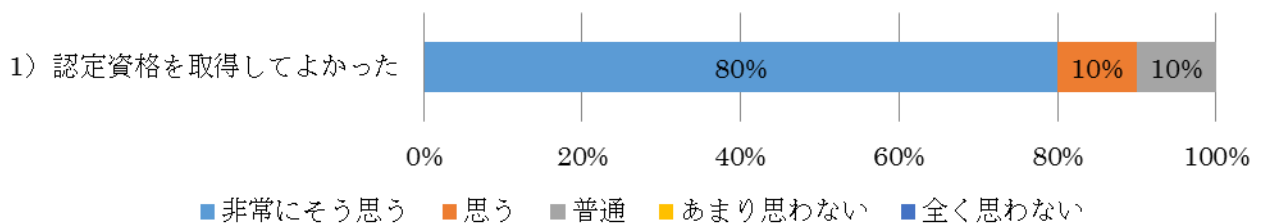
- 1) 臨床検査技師免許を取得してよかったと思う。
2) 臨床検査技師免許が仕事に活かされている。



い)

E) - 2. 細胞検査士資格を取得された方にお尋ねします（資格取得者のみお答え下さい）

1) 細胞検査士認定資格を取得してよかったと思う。



3. 卒後評価を教育改善に活かすための取組と考察

ディプロマポリシーについての評価では、「B6：（基本的知識、基本的専門知識）」および「B7：（実践に必要な基本的技術）」で肯定的な回答が多いが、否定的な回答者の自由記述には「心電図は読めて当然、エコーも1対1の指導があるわけではないので、もっと深いところまでやるべき。」とのコメントもあった。基本的専門知識、実践に必要な基本的技術をどのレベルまでとするのかは、就職先で求められるレベルにより違いがあり一概には言えないが、就職時に必要とされる知識・技術レベルを臨地実習関連病院などに聞き取り調査を実施し、各実習での実技試験やOSCE（次年度より導入予定）などの設定目標にすることで、必要とされる最低限のレベルは身につけることができるのではないだろうか。

一方、「B8：問題解決能力を身につけることができた。」「B9：科学的思考力を身につけることができた。」「B12：（保健医療向上への貢献）」では肯定的な回答が50%未満である。実際に、社会で求められる力としては「問題解決能力」「継続的な学習力」「主体性」などが必要とされるとの調査結果もあり、一般教養や専門教育といった専門性を重視した教育から、社会性も重視した課題解決型の教育内容を取り入れることが必要となる。この点は、来年度の新入生から始まる「まなぶる▶ときわびとI・II」をはじめとした基盤教育分野での学習が当てはまるが、1年次だけではなく2～4年次の講義や実習にアクティブラーニングなどを積極的に取り入れることで、培われていくものと考えている。

大学で受けた支援についての評価では、「C1：（講義・実習・演習）」「C2：（国家試験対策）」「C4：（進路支援）」の3項目において毎年肯定的な回答が多く、「C1：（講義・実習・演習）」および「C2：（国家試験対策）」の2項目は、今まで一度も否定的な回答がない。「国試の終盤の補習は出席する教科を選べる方が出来る方が良い。」とのコメントもあったが、学科教員が授業、実習、委員会（就職・国家試験）で関わる支援については非常に満足していると言えるのではないだろうか。一方、「食堂のように勉強できる（私語・飲食可）スペースがあれば」とのコメントがあるように、「C5：教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコートなど）がよかった。」の評価は毎年低い。2号館の完成で自己学習スペース（カルティベ）ができたこと、また実習室の利便性が向上したことなどにより来年度の評価は高くなることを期待するが、食堂や売店など改善すべき点はあると思われる。

最後に、今年度のアンケート回収率は23.9%であった。前年度同様、卒業研究の担当教員より連絡可能な卒業生にアンケートへの回答を依頼してもらったが、回答締め切り間際での依頼であったためか、前年度の39.7%より約16%低下した。前年度の報告書にも記載しているが、社会に出て、大学での学生生活を客観的に振り返った上で意見を述べてくれる卒業生は貴重であり、多くの様々な意見から改善点を見出すことにこのアンケートの意義があると考えている。回収率を上げるためには従来通りの紙ベースでのアンケート回答と平行して、スマートフォン等でも回答ができるようにするなどの手段を講じる必要がある。

2. 保健科学部 看護学科

1. 回収率

	発送数	回答数	回収率
平成 28 年度	89	20	22.5%
平成 27 年度	85	26	30.5%
平成 26 年度	75	12	16.0%

2. 調査結果

A) A は回答者の進路に関する設問

●あなたの卒業時の進路についてお答えください。

病院	17
保健所・市町村	1
学校	1
その他	1

●あなたの現在所属についてお尋ねします。

病院	17
保健所・市町村	1
学校	1
その他	1

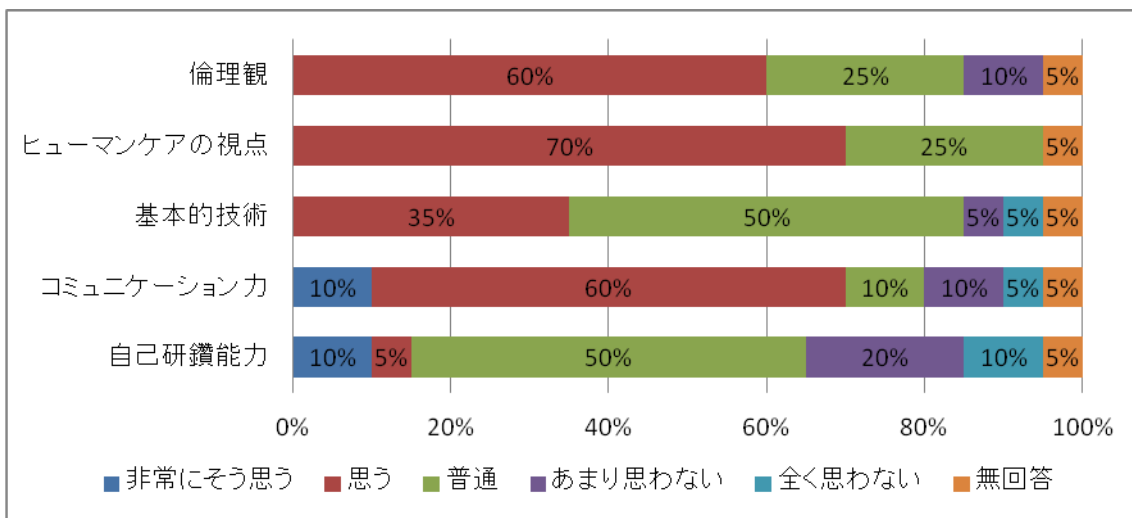
●あなたの現在の職種についてお尋ねします。

看護師	22
保健師	1
養護教諭	1
看護助手	1
その他	1

B) B はディプロマ・ポリシーの達成度を問う設問

●あなたは大学での学修や学生生活を通じて以下のものを身につけることができましたか

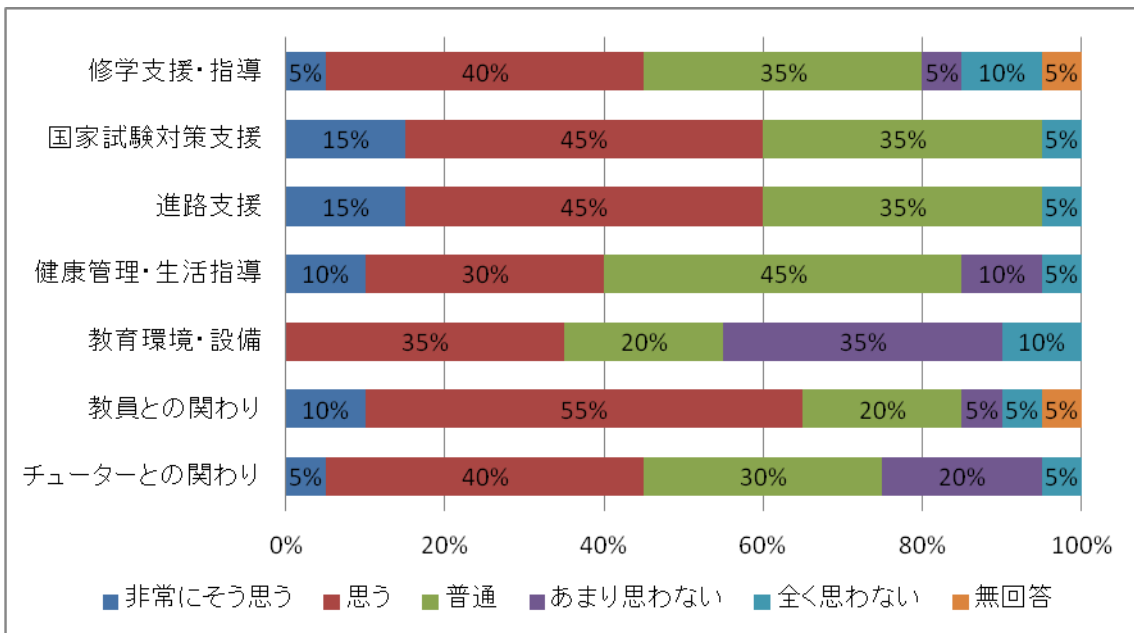
1. “いのち”に対する温かいまなざしと高い倫理観を身につけることができた
2. 看護の対象の基本的な人権を擁護し、“苦痛”を受け止め、共感的に理解するヒューマンケアの視点を身につけることができた
3. 科学的思考力を基盤に、健康レベルに応じた的確な判断力の基礎と安全に看護実践を行う基本的技術を習得することができた
4. 患者・家族や保健・医療・福祉チームと良好なコミュニケーションをとり、連携を深めるための基本的態度を身につけることができた
5. 医療に対する国際感覚を持ち、看護の本質を迫及し、展望するための自己研鑽能力を身につけることができた



C) Cは大学の支援等に関する設問

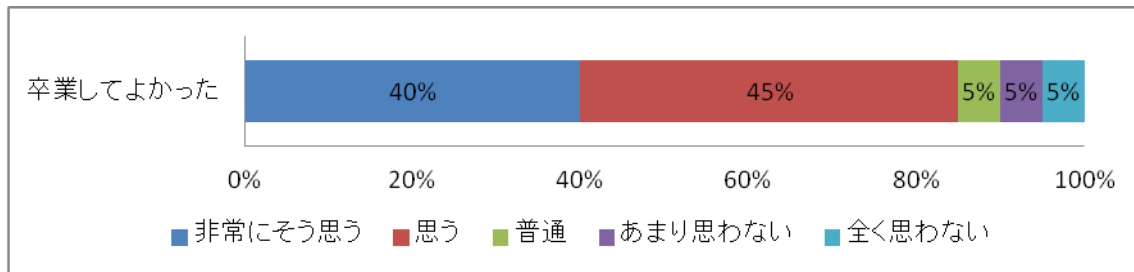
●本学の支援に対してお答えください。

1. 講義・演習・実習に対する修学支援・指導について満足している
2. 国家試験に対する支援について満足している
3. 就職、進学に対する支援について満足している
4. 健康管理生活指導に対する支援について満足している
5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および演習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコート）などについて満足している
6. 神戸常盤大学保健科学部看護学科教員との関わりについて満足している
7. チューターとの関わりについて満足している



D) D は総合評価を問う設問

●神戸常盤大学保健科学部看護学科を卒業して良かったと思う

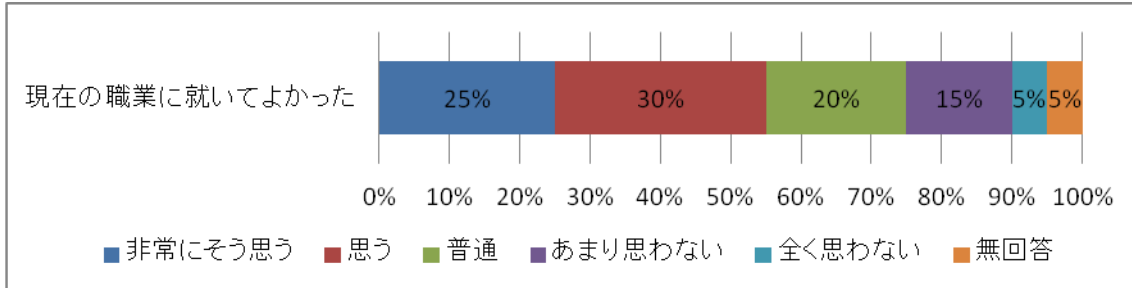


<理由>

<ul style="list-style-type: none">・看護学だけでなく、人間として成長させてもらえたから。・実習での体験、経験が臨床の場で活かされているから。・看護に対する自分の考えを知ることができた。
<ul style="list-style-type: none">・神戸常盤大学保健科学部はレベルが高いと評価されたそうだから。
<ul style="list-style-type: none">・同じ職を目指す友達に出会えた。・友達同士で高めあいながら生活できた。・よき仲間と出会えて学習する環境を与えていただいたから。・卒後も仕事に関する内容の話をできる友人と出会えたこと。・よい学友と出会えたため。
<ul style="list-style-type: none">・相談できる先生に出会えたから。・悩みや疑問を聞いて頂ける先生方に出会えたので良かったと思う。・卒後も先生方と交流が持てたり、話を聞いて頂けて心強く思う。・教員だけでなく、キャリアや事務の職員さんも学生と壁がなく相談しやすい。・親身になって関わってくれた
<ul style="list-style-type: none">・働き出してとてもそう思うようになった。暖かい環境だった。・アットホームな雰囲気ですべてみんな頑張って看護師になれたため。・自分の性格に合っていたと思う。

E) Eは職業選択の満足度を問う設問

●現在の職業を選択してよかったと思う



大学への要望

<ul style="list-style-type: none"> ・他大学と比較しても学生と教員の距離が近いことが良いと思う。 ・卒後も気軽に教員へ挨拶させて頂いたり、事務の方に名前を憶えてもらっていたことが嬉しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護技術についてもっと練習や実施ができればよかったと思う。 ・他大学、専門学校に比べ技術が弱いと思う。 ・実技などが実践レベルまで身につけていないものがあり、とても不安になった。大学の学生数では難しいと思うが、一人ひとりの練習時間や確認してもらえる時間数を確保できると良いと思う。
<ul style="list-style-type: none"> ・他学科との交流の場がもっと増えたらよかったと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・演習室をもう少し使いやすくする(練習したかった)
<ul style="list-style-type: none"> ・チューターの先生と先輩と集まる機会が多い方が、色々なことの相談ができて、大学生活が充実するかなと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・PC室で授業が入っている時にパワーポイントを使いたいのに使えない。PCの台数が少ない
<ul style="list-style-type: none"> ・同じ職を目指す友達に出会えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国試対策ものんびりとした印象です。レビューやセサミのことを知ったのも4年次だったのもっと早く知っておきたかった
<ul style="list-style-type: none"> ・相談できる先生に出会えたから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館以外でも勉強できる環境が欲しかった ・図書館がいっぱいで食堂で勉強していたが、うるさくて全く集中できなかった
<ul style="list-style-type: none"> ・働き出して同期と比べたり、先輩におこられたり、色々なことで悩んでも全てプラスに考えられる思考を学ぶべき。 	

卒業評価を教育改善に活かすための取り組みと考察

今回の卒業生に対する調査は、卒業生の就職先へ配送したことで昨年回収率が上がったが、昨年と比べると回収率が下がり、(22.5%)であった。卒業生へのアンケートは、年度末に学科会議で結果を報告した。アンケートの回収率を上げるための検討が必要との意見があった。卒業生の経年的な就職動向の把握、長期的な教育の成果を確認するためにも卒業生にアンケート調査を行うことは意義がある。今後も卒業生にアンケート調査への協力を求めていくことが必要と考える。アンケート協力者(卒業生)の概要としては、卒業生の進路として病院勤務の看護師が17名、保健師が1名、養護教諭1名が学校に所属していた。その他については職種の記載はなかった。

ディプロマポリシーについての評価

ディプロマポリシーについての評価は、概ね高い評価であった。教育総合に対する評価についても満足度が高かった。卒業生は建学の精神のもと本学の教育において知識、技術を修得してヒューマンケアのプロとしての看護実践能力を得ることができたと満足度が高かった。しかし「医療に対する国際感覚を持ち、看護の本質を迫及し、展望するための自己研鑽能力を身につけることができた」に関しては、非常に思う・思うが15%。あまり思わない・全く思わないが30%と低い評価となっている。その背景としては、卒業生のコメントには「働き出して同期と比べたり、先輩におこられたり、色々なことで悩んでいる。プラスへの思考ができない」という新人としての立場からはまだその力が身につけていないと評価しているものと考えられる。卒業生が仕事と生活環境の変化に適応していく過程において厳しさを感じているものと推察する。

大学で受けた支援についての評価

学生への支援としては、臨床力を学ぶために講義、演習、実習によって自信が得られるように修学支援を行っている。また国家試験対策として専門領域からの教員が集まり計画的に取り組んでいる。また就職委員会は3、4年次より面接を行い、希望の進学就職についての支援を行っている。学生は看護師、保健師に加えて養護教諭の有資格を得る為にキャリア支援課、教養支援センターの利用、専門分野の教員への相談支援がある。また就職活動や国家試験を体験した先輩からメッセージが紹介されるなど、学生の支援の認知度も高い。以上のように卒業生の評価が高い背景であると考えられる。本学科では、「チューター制度」を取り入れている。クラス担任とは別に専任の教員が少人数を1年次から4年次まで受け持ち、縦断的に支援するものである。学生の認知度を確かめていないが、学生はその制度を知って必要な場面で学生が利用していくため、満足度としてはやや肯定的ではない結果となっている。しかし教員との関わりについては、大変高い評価を得て「相談できる先生に出会えた」「悩みや疑問を聞いていただける」「卒後も交流が持て、話をきいていただけて心強く思う」「親身な対応」など日常的に教員との対話があり、満足度が高い。そして「教員だけでなく、キャリアや事務の職員も学生との壁がなく、相談しやすい」との感想も寄せられた。健康管理、生活指導については、特に感染症対策として実習前検査や実習中においても健康管理、生活指導について指導を徹底しているが、支援を受

けているという認知が低い評価となっている。

環境面については要望として「図書館以外でも勉強できる環境が欲しい」「食堂がうるさくて集中できない」と学習環境面での意見が寄せられた。また「パソコン室で授業が入った場合のパワーポイントを使いたいのに使えないなどの学習に必要な機材、ソフトに関する要望が寄せられた。学習環境について大学側は、新館2号館など新しい学習スペースも整えられつつあると考える。

95%の卒業生が本大学学部学科で良かったと回答している。今後の課題としては回収率をあげていくための検討が必要であると考ええる。

3. 教育学部 こども教育学科

1. 回収率

送付先：自宅

	発送数	回答数	回収率
平成 28 年度	85	12	14.1%

2. 調査結果

● 卒業後の進路

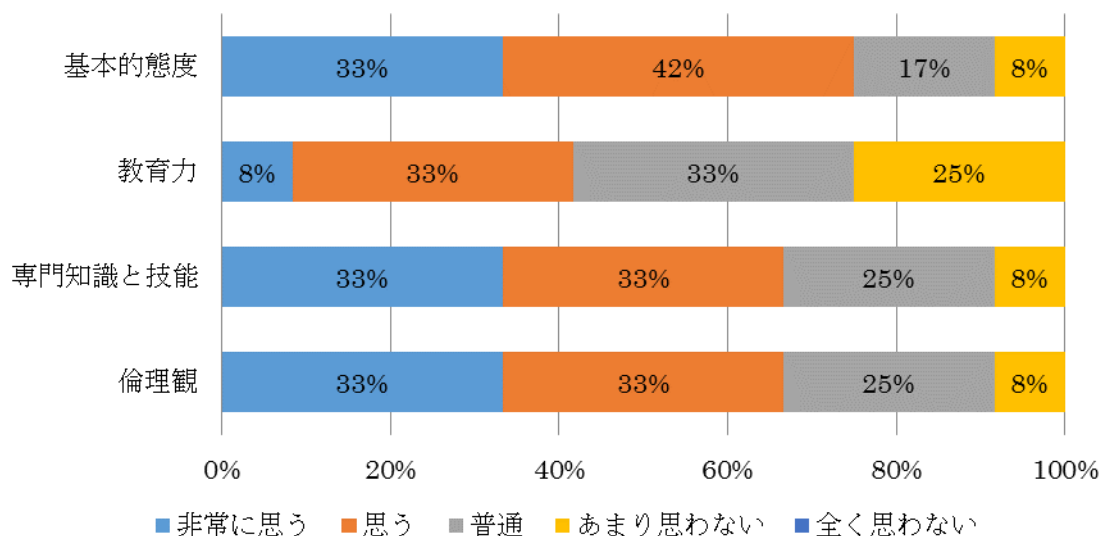
A) あなたの卒業時の進路についてお答えください。

保育所	4
幼稚園	2
認定こども園	3
小学校	1
社会福祉施設	2

● ディプロマポリシーの達成度を問う設問

B) あなたは大学での学修や学生生活を通じて以下のものを身につけることができましたか。

1. 実践の場において自ら課題を見いだし研究することにより、保育や教育の質を高める態度を身につけることができました。
2. 理論と実践を統合し、社会の要請に応えることのできる教育力を身につけることができました。
3. こどもの心身の発達を支えるための専門知識と技能を身につけることができました。
4. こどもの保育・教育に携わる者に必要な豊かな人間性と高い倫理観を身につけることができました。

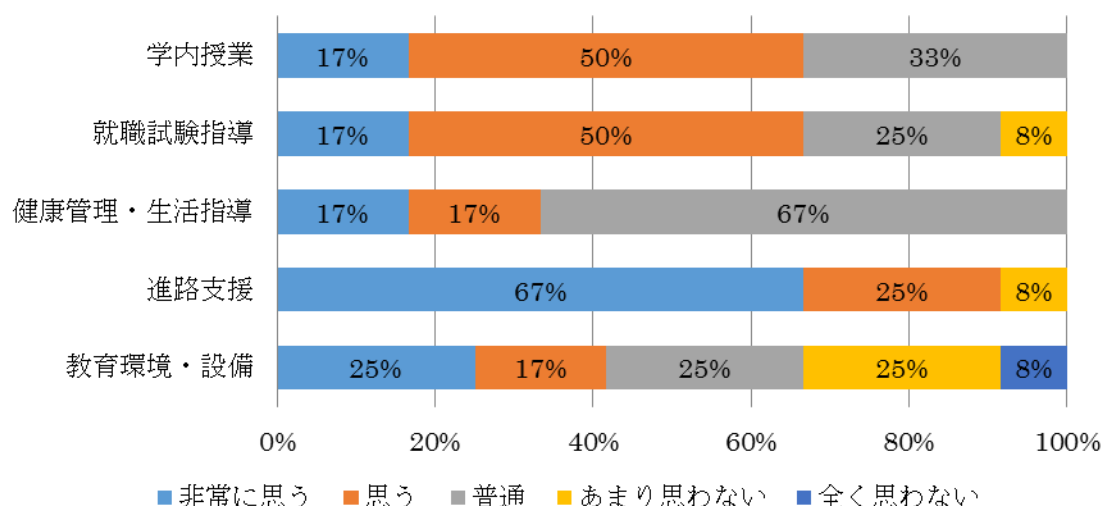


肯定的回答（非常に思う・思う），否定的回答（あまり思わない・全く思わない）の分布をみると、「B2. 理論と実践を統合し、社会の要請に応えることのできる教育力を身につけることができた。」の否定的回答が25%であった。他の3項目は肯定的回答が7割前後、否定的回答が8%であり、B2の否定的回答の結果はこれらの項目と比べて相対的に高かった。

● 大学の支援等に関する設問

C) あなたが学生時代に大学から受けた支援等について答えて下さい。

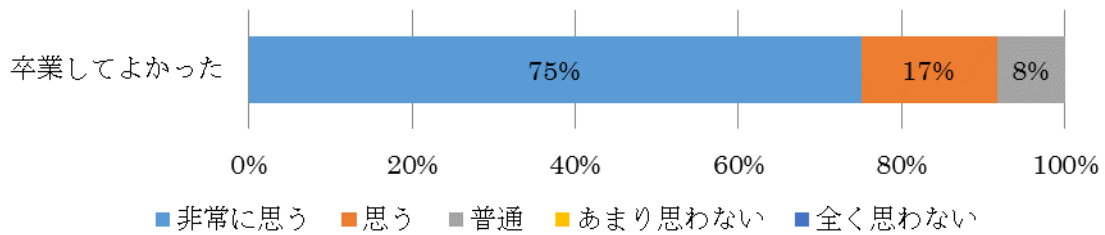
1. 講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。
2. 就職試験に対する学修支援・指導がよかった。
3. 健康管理、生活指導に対する支援がよかった。
4. 就職・進学に対する支援がよかった。
5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコートなど）がよかった。



「C4. 就職・進学に対する支援がよかった。」の「非常に思う」の割合が67%とポイントが最も高かった。さらに、肯定的回答（非常に思う・思う），否定的回答（あまり思わない・全く思わない）の分布をみると、肯定的回答が92%と非常に高い評価がみられる。しかし、「C3. 健康管理、生活指導に対する支援がよかった。」については、普通の回答が67%と最も多く、否定的回答はみられないものの、肯定的回答が34%と相対的に低い値に留まっていた。また、「C5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコートなど）がよかった。」の否定的回答が33%であった。

● 総合評価を問う設問

D) 神戸常盤大学教育学部こども教育学科を卒業してよかったと思う。

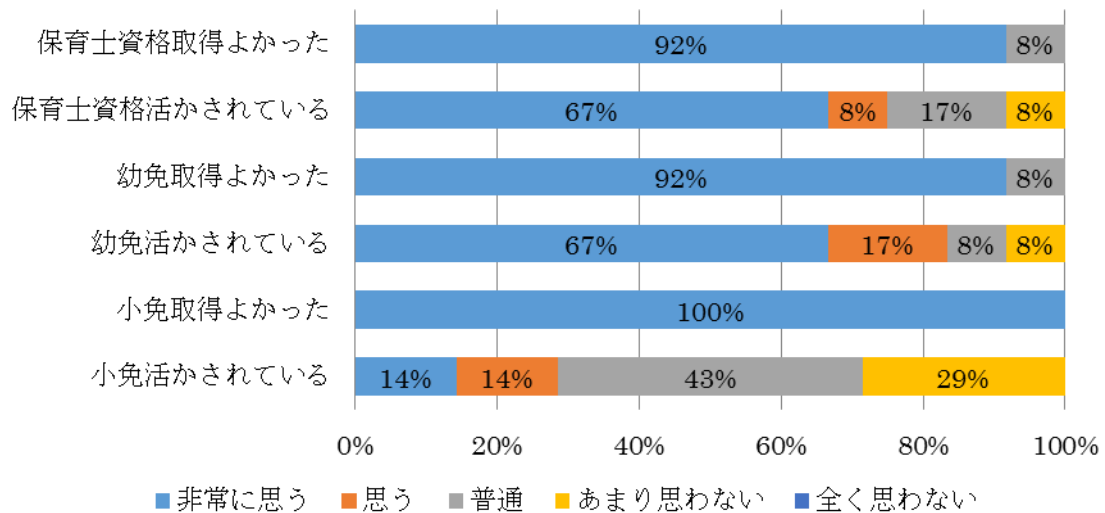


「非常に思う」の割合が75%とポイントが最も高かった。さらに、肯定的回答（非常に思う・思う）、否定的回答（あまり思わない・全く思わない）の分布をみると、92%であり大多数を占めていた。

● 取得した資格について問う設問

E) 資格についてお尋ねします。

1. 保育士資格を取得された方にお尋ねします。(免許取得者のみお答え下さい)
 - 1) 保育士資格を取得してよかったと思う。
 - 2) 保育士資格が仕事に活かされている。
2. 幼稚園教諭1種免許状を取得された方にお尋ねします。(免許取得者のみお答え下さい)
 - 1) 幼稚園教諭1種免許状を取得してよかったと思う。
 - 2) 幼稚園教諭1種免許状が仕事に活かされている。
3. 小学校教諭1種免許状を取得された方にお尋ねします。(免許取得者のみお答え下さい)
 - 1) 小学校教諭1種免許状を取得してよかったと思う。
 - 2) 小学校教諭1種免許状が仕事に活かされている。



資格・免許取得に関しては、「非常に思う」の割合が3種類とも90%を超える回答であったが、なかでも小学校教諭については100%であった。また、活かされているかについては、保育士・幼稚園教諭は「非常に思う」の割合がともに67%であった。これらの回答に「思う」を併せた肯定的回答では保育士が75%、幼稚園教諭が84%と相対的に高い割合であった。一方、取得に対して100%の回答を示した小学校教諭は、活かされているかについての肯定的回答が28%と相対的に低かった。

3. 卒後学生アンケートを教育改善に活かすための取り組みと考察

こども教育学科は昨年度初めての卒業生を送り出した。そのため、他学科とは異なり今回の卒業生に対する調査が初めての調査である。調査用紙の送付先は自宅とした。例年、他学科のアンケートの回収率の低さが課題となっているようであるが、本学科の回収率は最も低く14.1%であったことは次年度以降の大きな課題といえる。今年度のことでいえば、調査の実施時期にあたる11月に学園祭の日に実施した学科独自のホームカミングデーがあるので、自宅郵送のみの回答を求めるのではなく、来学した時に回答を呼びかけることも有効ではないかと考える。

アンケート協力者（卒業生）の概要としては、卒業生の進路として保育所が4名、幼稚園が2名、認定こども園3名、小学校1名、社会福祉施設2名と分散していたが、進路別における傾向を分析するには数が少なすぎるため、以下は全体の分析を行う。

ディプロマポリシーについての評価

ディプロマポリシーについての評価は、4項目中3項目は肯定的回答が7割前後を占めていることは評価できる。しかしながら、「B2. 理論と実践を統合し、社会の要請に応えることのできる教育力を身につけることができた。」の否定的回答である「あまり思わない」が25%に上っていたことは問題として注目し検討を行う。

まず、実践という点においては、本学科のカリキュラムの特色の1つとして、免許・資格取得に必要な最低限の実習時間以外に、1年次より保育所・社会福祉施設・幼稚園・小学校への観察実習などの機会を他の授業の中に組み込み、少しでも現場のイメージを掴むことのできるような取り組みをしている。また、2年次以降においても小学校でのスクールサポーター、保育現場へのインターンシップ、などのボランティア活動への参加を呼び掛けている。それでも、理論と実践と統合させるという点において、現場経験の少なさが自己評価としても低い結果に留まったのではないかと推測できる。実習やボランティア活動で「すぐに使える技術・方法」は自己評価における達成感など高い評価に繋がりがやすいが、理論とのすり合わせを実感できるまでは、卒後の現場経験を積むことが必要である。

次に、社会の要請という点においては、新人として職場での仕事内容に慣れる、1年間を終えるまでは、年間の見通しも掴めないまま日々の仕事に追われていることが予想される。自らが主体的に自覚を持って、社会の要請に対して応えていく余裕は、時期的にまだ難しいのが実情ではないだろうか。

これらの点より、卒後6カ月という時期のB2項目の評価の低さに繋がっていると考える。

大学で受けた支援についての評価

学生への支援としては、進路支援の肯定的回答が9割以上と非常に高い評価を得た。加えて、学内授業及び就職試験指導の肯定的回答が7割弱という高い評価を得ている。先の項目でも述べたが、現場での教育力をつけるために免許・資格取得に必要な科目以外にも、学科独自の授業科目でも実習プログラムを取り入れた修学支援を行っている。また、教員採用試験対策として学科と教職支援センターとが協力し、4年間を通して計画的に取り組んでいる。教職支援センターは主に小学校教諭を目指す学生が利用しており、今回の自由記述のなかにも、「教職支援センターでは、とても貴重な情報をくださり、大変たすかりました。教採一年目でも、少し安心して受験できました。」というように支援に対して満足している意見がみられた。就職委員会は3・4年次より履歴書指導、模擬面接を行い、各人の希望の進路へ進めるよう支援を行っている。また、就職活動を体験した先輩からの談話会を行うなど、学生の支援の認知度も高い。これらの点が卒業生の評価が高い背景であると考えられる。

しかし、健康管理・生活指導、教育環境・設備については、肯定的回答が半数以下しか得られなかった。特に、否定的回答だけに注目すると、健康管理・生活指導では反応がなかったが、教育環境・設備においては3割程度の反応があった。環境面での満足度が相対的に低かった割には、自由記述欄では具体的な要望としての記載はみられなかった。大学への要望として記載されたものの中で、間接的に教育環境に繋がるとするものは「ボランティアや就職に向けて活動していく上で、授業予定を前日や当日に発表するのではなく、もっと早めに伝えてほしかった。」と、学生時代にスケジュール管理上の不都合さの不満がみられたことであった。本学科のカリキュラムは上級学年になるにつれ、ボランティア活動を念頭においた時間割配置をしていることもあり、教員は事前の授業計画の案内を心がけているつもりであるが、今回の意見を共有し改善に努めたい。

総合評価についての評価

総合評価は92%という非常に高い肯定的評価を得ていた。調査協力に対する回答に応じた点で、本学に対する否定感情をあまり抱いていないことが予想される上に、希望していた免許・資格の取得とこれらを活かした就職先に進んでいることが結果に繋がったと考えられる。

資格取得についての評価

資格・免許取得についての90%を超える非常に高い肯定的評価が得られた。一方で、これらが活かされているかという点については、保育士・幼稚園は7~8割程度肯定的評価が得られたが、小学校が3割弱に留まっていた。これらの項目は免許・資格を取得したもののみが回答する項目であるが、保育士・幼稚園の項目は12名全員の回答があった。つまり、免許・資格を12名全員が取得していたことがわかる。しかし、小学校項目の回答数は12名うち7名しかおらず、うち小学校で就職している者が1名である。免許資格を活かした仕事に就いていない者が7名のうち6名もいるため、割合だけで今回の結果をみると、当然の結果であるともいえる。

設問) 大学への要望、アドバイス、感じた事などについての自由記載

<学科に対する要望・感想>

・ボランティアや就職に向けて活動していく上で、授業予定を前日や当日に発表するのではなく、もっと早めに伝えてほしかった。
・免許を取るためだけに来る人と本当にその職につきたい人との差が大きく、授業を受けづらい時も多々あったから、少人数の授業がたくさんあると良かった。
・社会福祉に関して、とても良い御指導をいただけてとても嬉しく感じている。
・ゼミでは自分が関心のある分野の研究ができ、今の仕事でも活かしている。
・今になってもっと勉強しておけば良かったと思う。
・就職先はこれからの自分の人生に関わるものだから、たくさんの保育園をもっと見ておけば良かった。
・教職支援センターやゼミの先生に大変お世話になりました。
・教職支援センターでは、とても貴重な情報をくださり、大変たすかりました。教採一年目でも、少し安心して受験できました。
・3つの免許を取ったが1つの免許にしぼってそれを極めるのも良かったのかと思う。
・社会人として働いてみて大学で学んだこと、得たことがすごく活かされていると感じます。
・とても充実した4年間でした。
・先生方との距離が近く、いつでも親身になって私たちと向き合っていて下さっていたので安心して学生生活を送れた。

<後輩へのアドバイス>

・大学で学んだことは社会に出て先生として働くための基本の基本でしかありません。でも今しか学べない事です。時間を大切に、遊べる時は遊んで、学ぶ時はしっかり学んでください。こんなにやさしい大学はありません。がんばってください。
・就職先を「早く決めたい!」という思いだけで決めるのは本当に良くない。実際に働いてみないと中のことはわからないかもしれないが、たくさん足を運んで欲しい。

4. 短期大学部 口腔保健学科

1. 回収率

調査実施年度 (対象者)	発送数	回答数	回収率
平成 28 年度 (28 年 3 月卒業生)	73	18	24.7%
平成 27 年度 (27 年 3 月卒業生)	58	8	13.8%
平成 26 年度 (26 年 3 月卒業生)	61	12	19.7%

2. 調査結果

● 卒業後の進路

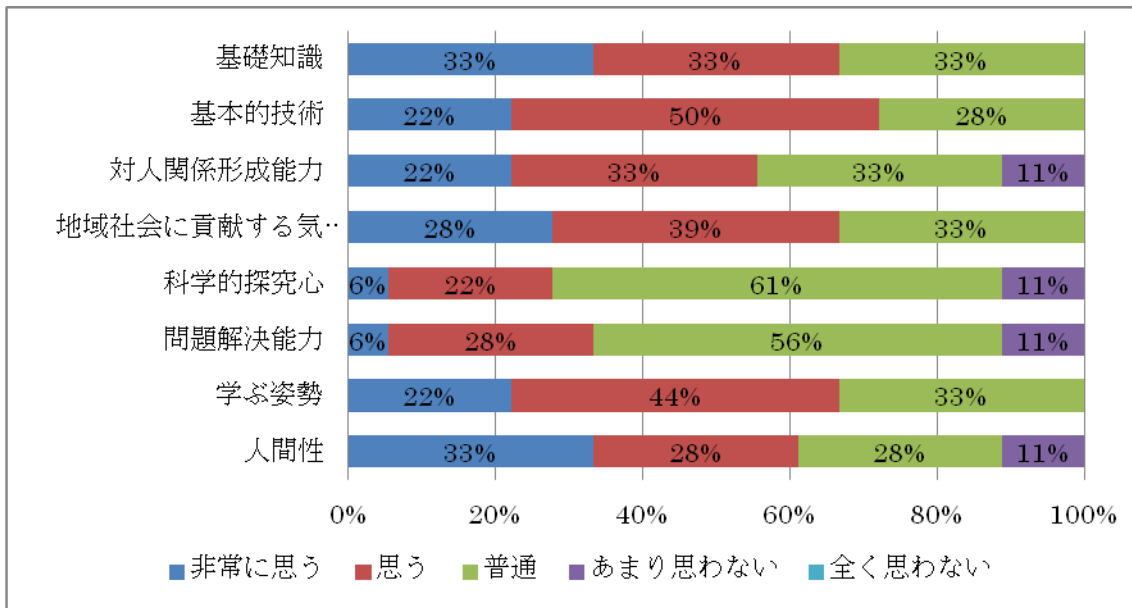
A) 現在の勤務先の状況

病院	3	16.7%
歯科診療所	12	66.7%
企業	1	5.6%
進学	1	5.6%
その他（退職など）	1	5.6%

● ディプロマポリシーに対する評価

B) あなたは神戸常盤大学短期大学部（以下、常盤短大）での学修や学生生活を通じて以下のものを身につけることができましたと思いますか。

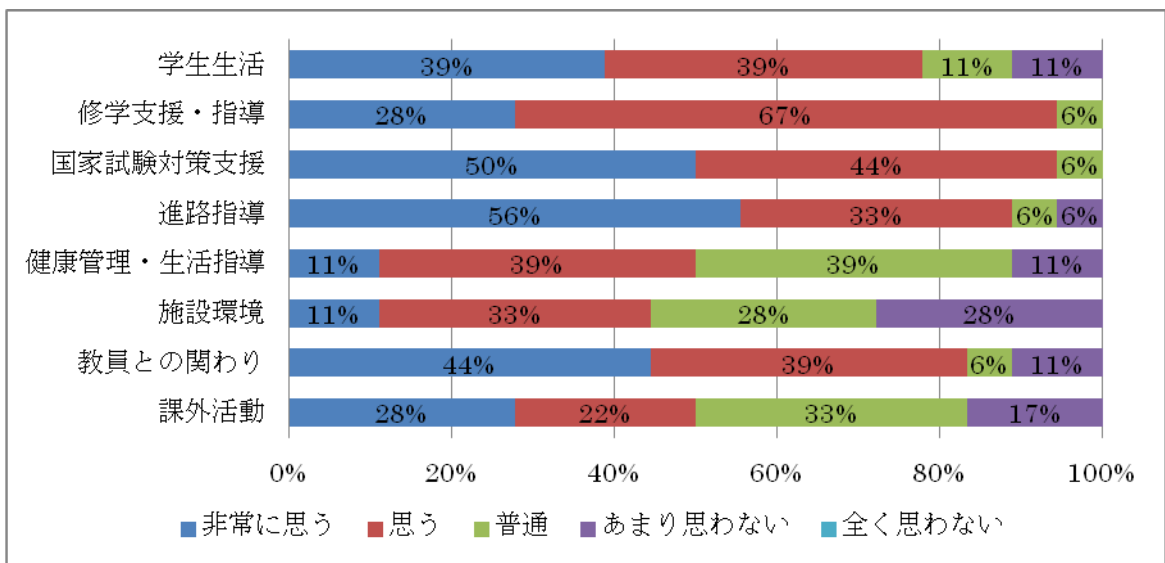
1. 常盤短期大では現在の職場にとって必要な**基礎知識**を得ることができた。
2. 常盤短大では現在の職場にとって必要な**基本的技術**を得ることができた。
3. 常盤短大では**個々の命と人格を尊重した対人関係形成能力**を身につけることができた。
4. 常盤短大では**地域社会に貢献する気持ち**を身につけることができた。
5. 常盤短大では**科学的探究心**を身につけることができた。
6. 常盤短大では**問題解決能力**を身につけることができた。
7. 常盤短大では**生涯を通じて学ぶ姿勢**を身につけることができた。
8. 常盤短大では**心豊かな人間性**を養うことができた。



● 本学の各種支援に対する評価

C) あなたが学生時代に神戸常盤大学短期大学部から受けた支援等について教えてください。

1. あなたにとって常盤短大での**学生生活は全体**としてよかった。
2. あなたにとって常盤短大での**学習に対する支援**はいかがでしたか。
3. あなたにとって常盤短大での**国家試験に対する支援・対策・指導**はよかった。
4. あなたにとって常盤短大での**就職・進学に対する支援、対策、指導**はよかった。
5. あなたにとって常盤短大での**健康管理や生活指導に対する支援**はよかった。
6. あなたにとって常盤短大での**施設環境**（図書館、教室、演習・実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、食堂、運動場、テニスコートなど）はよかった。
7. あなたにとって常盤短大での**教員との関わり**はよかった。
8. あなたにとって常盤短大（課外活動：部活、ボランティアなど）はよかった。

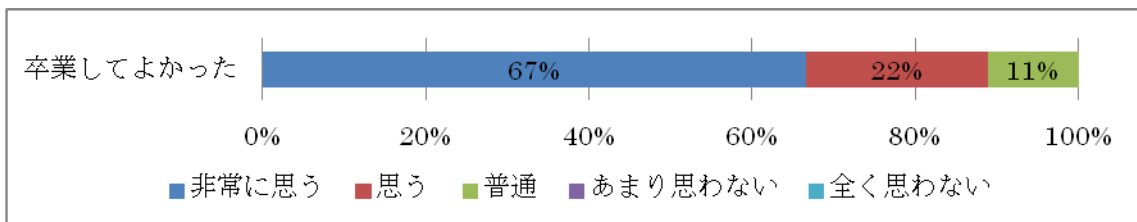


● 総合評価

D) 学生時代を振り返って総合的にお応えください。

<調査項目>

1. 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科を卒業してよかったと思う。



3. 考察

(1)回収率

本学科のアンケートとしてこれまでで最も回収率の高い学年であったが、ようやく他学科と肩を並べられる程度の割合である。すべての学科に言えることであるが、後輩のために、そして同じ職業を選択するものに対してよりよい教育環境を提供したいという寛容の精神を見せてほしいと思う。本学で学んだことを誇りに感じ、大学の名前を耳にするだけで心躍る思いを抱く同窓の志が育まれるような仕掛けが在学中から必要であることを本アンケートを実施するたびに感じる。

(2)調査結果A：進路

回答者の勤務先は、歯科診療所が12名と多いが、今回は病院、企業、専攻科進学など多方面にわたっており、意見を聞くにはよいバランスである。

(3) 調査結果C：ディプロマポリシーに対する評価

本学で身につけた能力などについて設問ごとの平均値を表1にまとめた。

上段：今回調査、中段：前回（27年度）調査、下段：前々回（26年度）調査

基礎知識	基本的技術	対人関係形成能力	社会貢献への気持ち	科学的探究心	問題解決	学ぶ姿勢	人間性	平均
4.0	3.9	3.7	3.9	3.2	3.3	3.9	3.8	3.7
3.8	3.5	3.9	3.6	3.1	3.5	3.6	4.0	3.8
4.2	4.4	4.9	4.5	3.6	3.4	4.3	3.4	4.1

表1（網掛けは、前年度よりも評価が下がった項目）

昨年の調査では、8項目中6項目で前年よりも低い回答であった。項目は「基本的技術」、「対人関係形成能力」、「社会貢献への気持ち」、「科学的探究心」、「障害学ぶ姿勢」であったが、今回はやや回復した。しかし、「対人関係形成能力」はさらに低下した。回答数が少ないため多少の増減は有意差にはつながらないが、それでも前々回から1.2ポイントも低下すると、歯科衛生士という職業から考えても問題にしなければならないだろう。

また、最も評価の低い「科学的探究心」と次点の「問題解決能力」については例年低い傾向にある。初年次教育から卒業まで継続して、全ての授業の中ではぐくまれるべき能力であることはすべての教員が自覚していると思われるが、毎年のようにこの項目の自己評価が低いのは、教員が身を持って各領域の神秘的な部分や不思議さ、おもしろさといった興味を持たせる授業が展開できていないことに起因するのではないか。これは、平成29年度新入生から導入の基盤教育に期待したいが、それ以上の学年については早急に改善に向けての策を講じる必要がある。正課内・外の学びを通じてテクニカルスキルだけではなく、むしろノンテクニカルスキルの向上を目指すべきであると考え。本調査は、自己評価であり自分に厳しく評価していることも考えられるが、卒業後の環境において本学で学修した能力が効果的に発揮できていない、もしくは身につけていないことを物語るものとして真摯に検討しなければならない。

(4) 調査結果B：各種支援

本学の各種支援について設問ごとの平均値を表2にまとめた

上段：今回調査、中段：前回（27年度）調査、下段：前回調査

学生生活全体	学習支援	国試支援	就職支援	健康生活支援	施設環境	教員との関わり	授業外活動	平均
4.1	4.2	4.4	4.4	3.5	3.3	4.2	3.6	4.0
4.1	4.5	5.0	4.0	2.9	3.4	3.8	4.0	4.1
4.1	4.5	4.9	4.8	3.8	3.5	4.5	3.2	4.2

表2（網掛けは、前年度よりも評価が下がった項目）

調査結果 A (表 1) の自己評価に比較して、調査結果 B (表 2) は他者 (主に教員) への評価であるため卒業生はそれなりに付度して低い評価はつけにくいと思われる。したがって評価 3 は通常よりもやや低めの評価としてとらえる必要があるだろう。4.0 を下まわっているのは、「健康生活支援」と「施設環境」である。毎年のことであるが、本年は特に「健康生活支援」が低い評価である。心のケアも含めた健康管理は学科による対応ではなく、大学全体の支援として健康管理センターが担うことになっている。相談者数は決して少なくはないため次年度より開設日数が増えると聞いている。学業の不振であっても精神的に追い詰められて退学につながることも少なくないと思われることから適切な対応を期待したい。「施設環境」も毎年評価が低い項目である。とくに口腔保健学科においては、学生数に比較して教室が狭いという苦情が授業評価でも毎回指摘されている。新築の 2 号館もグループワークには不向きな教室が多く、むしろ少人数の授業を増やすといった授業内容の改善などの工夫で対応することも必要である。今回の調査では、例年高評価であった「学習支援」、「国試支援」の評価が低下した。原因について詳細に検討する必要があるだろう。

(5) 調査結果 D : 総合評価

総合評価は例年とほぼ同様の結果であった。

(6) まとめ

卒業生へのアンケートの目的は、就職 (進学) 後に、本学で身につけた能力が役に立っているのかを自己評価させ、それを詳細に分析・検討して今後の教育に反映させることである。在学中では自覚できなかったことが卒後顕著に見えてくることもある。さらには、その能力を身につけるための各種支援や設備面での環境が整っているかを確認するためでもある。本学の教育開発・推進において卒業生に意見は非常に重要であるにもかかわらず、回収率が低いことは問題であり、抜本的な解決方法を見出さなければならない。

大学生活を「おもしろかった」「素敵だった」と感じさせる教育を模索する必要がある。例年、調査 D の総合評価が高いにもかかわらず、調査 B の「学生生活全体」の評価が 4.1 と低い。これは毎年の傾向である。この項目の評価を向上させていくには、大学を好きにさせることであり、特に本年の調査 C のように学習に対する自己評価が低いと生活全体の評価も低くなる。学生ひとり一人に合ったテーラーメイドの教育を目指す本学が、本当の意味で学生の満足度を得られているのかを知るのは卒業後の彼女たちの評価によらなければならない。大学における学生支援においては多様性が必要である。調査 B からは授業内容の改善、調査 C からは学修カリキュラムのさらなる改革が必要であると思われた。とかく技術中心の授業に陥りやすい歯科衛生士教育において、限られた時間内で知識の向上のみならず教養や地域活動など社会貢献も含めた多くの学修を支援することは困難になってきている。学生が、国家試験合格に向けた支援に対して例年高評価を与え続けたことは、国家試験を最終の目標としている者にとっては最良の授業方法であったからである。しかし、今回の調査で回答した卒業生はおそらく国家試験を最終の目標と定めずさらに高みを目指す意識の高い人たちであると思いたい。これらの結果をもとに今後の学科内 FD の充実が望まれる。

5. 短期大学部 看護学科通信制課程

1. 回収率

	発送数	回答数	回収率
平成28年度	142	54	38.0%
平成27年度	148	51	34.5%
平成26年度	195	67	34.4%

2. 調査結果

● 回答者の背景

A) あなた自身についてお尋ねします。

性別および年齢 (人)

	女性	男性	合計
30歳代	8	1	9
40歳代	22	3	25
50歳以上	19	0	19
無記入	1	0	1
合計	50	4	54

就業の状況 (人)

	合計
働いている	53
働いていない	1
無回答	0
合計	54

勤務場所 (人)

	合計
病院	32
診療所または開業医	7
老人保健施設または 特別老人ホーム	13
その他	2
無回答	1
合計	55

※「2と3」と回答した者が1名

卒業後の職場 (人)

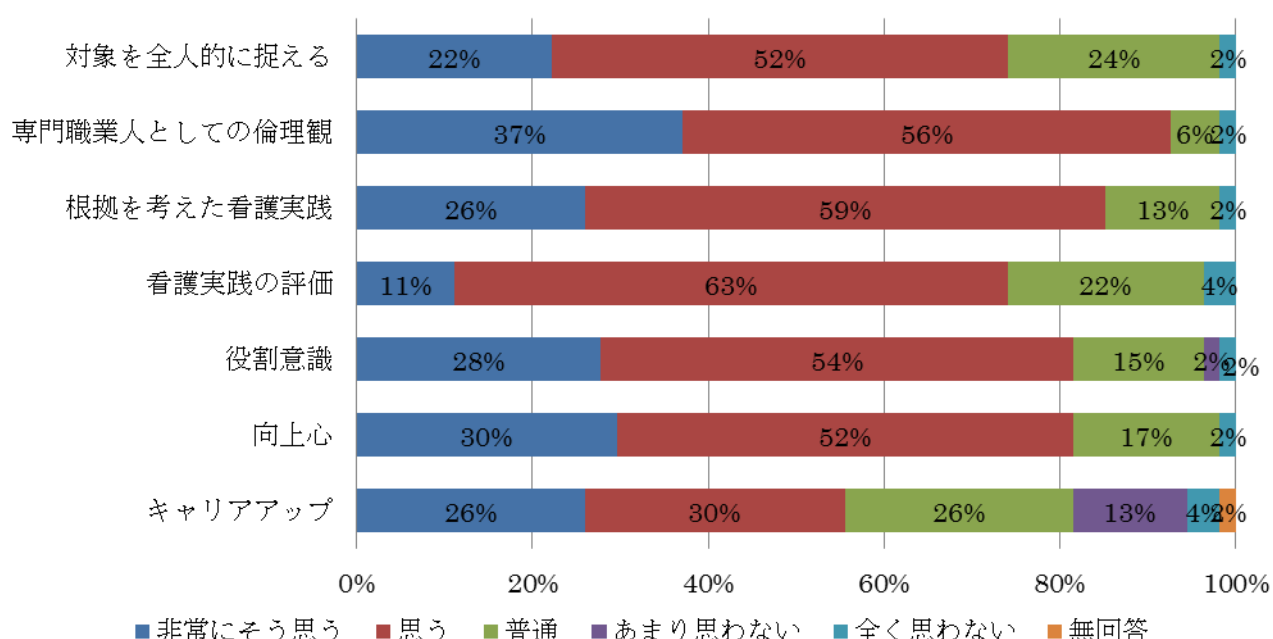
	合計
勤務先が変わった	22
部署が変わった	3
役職に変化があった	2
看護職以外に転職し た	1
変わっていない	26
無回答	2
合計	56

※「1と3と4」と回答した者が1名

● **ディプロマポリシーに対する評価**

C) ディプロマポリシーの視点からご自身についてお答えください。

- 1) 対象を全人的にとらえることができるようになった。
- 2) 専門職業人としての倫理観を持って行動するようになった。
- 3) 根拠、エビデンスを考えながら看護の実践が行えるようになった。
- 4) 看護実践を評価するようになった。
- 5) 保健医療福祉チームの中で看護専門職の役割を意識するようになった。
- 6) 向上心を持ち看護の専門性を深めたいと思うようになった。
- 7) 今後キャリアアップを目指し、進学または専門分野に進みたいと思うようになった。



ほぼすべての項目において肯定的な回答（非常に思う・思う）が70%を超えていた中で、「今後キャリアアップを目指し、進学または専門分野に進みたいと思うようになった」は昨年の65%から56%に下がっていた。最も肯定的な評価が高かったのは「専門職業人としての倫理観を持って行動するようになった」の93%、ついで「根拠・エビデンスを考えながら看護の実践が行えるようになった」85%であった。昨年最も肯定的な評価が高かった「向上心を持ち看護の専門性を深めたいと思うようになった」は82%でやや下降していた。自由記述内容を以下に示す。

(専門職者としての倫理観)

- ・ 看護管理者としての研修への参加が増え管理者としての責任感を重く考えるようになった様に思います。

(根拠・エビデンスを考えた看護実践)

- ・ 日々の業務をこなすだけでなく、対象者を全人的にとらえ、対象者本位の看護を提供する様に心がけ、その看護は科学的根拠に基づいたものでなければならないと意識しながら、日々の業務を行える様になったと思います。

(向上心を持ち看護の専門性を高めたい)

- ・ 精神科疾患を学び患者の思いを理解したい、疾患について学びたいと思い現在精神科病棟に転職しました。
- ・ 看護師の資格を取得したことが契機となり、認知症ケア加算2対応講座の受講メンバーに指名された。今後もこのような機会は増えると思う。そのような機会を重ねていくことで専門性を高めていくことができると思う。
- ・ 専門分野を極めてもっと勉強したいという思いを強く持っている。

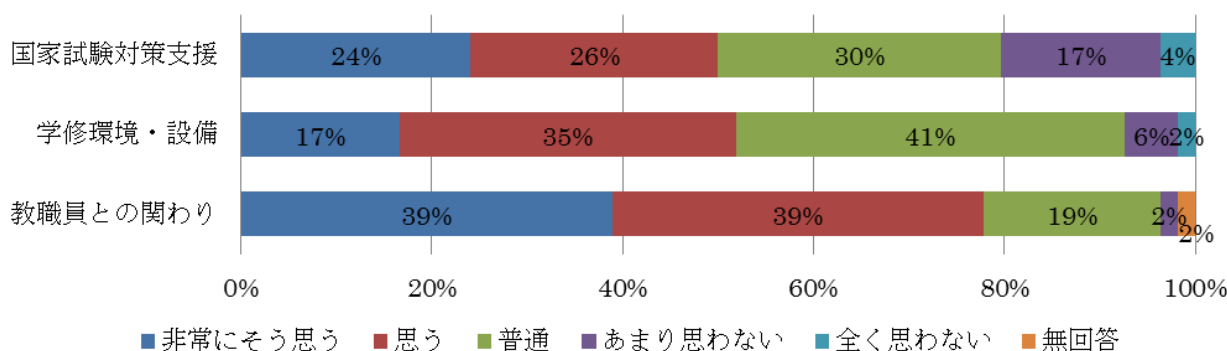
(キャリアアップを目指す)

- ・ 仕事にも変化があり今までにない仕事を任せられスキルアップのため勉強に励んでいます。
- ・ 認定心理士の勉強をしてみようと思っています。
- ・ 20～30代ならば勉強したいと思う。

● 本学の各種支援に対する評価

D) 大学の支援に対してお答えください。

- 1) あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での国家試験に対する支援はいかがでしたか。
- 2) あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での学修環境、設備はいかがでしたか。
(教室、図書館、ハローホール、地方会場など)
- 3) あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での教職員との関わりはいかがでしたか。
(対面授業、レポート添削、学修相談、電話対応などを含む)



最も肯定的な評価が高かったのは昨年同様「教員とのかかわり」で 78%であり、昨年よりも上昇している。肯定的な評価が低かったのは「国家試験に対する支援」の 50%で昨年とほぼ変わらないが、学習環境・設備に関しては 52%と昨年の 57%よりも下降している。

自由記述内容を以下に示す。

(国試に関して)

- ・ 国試への対策は他の学校より弱すぎる。
- ・ 学校の勉強のみを行ってれば国家試験は合格できるのが、常盤の通信であると思う。
- ・ 実習が終了後、国試までの期間にもう少し勉強できるシステムがあっても良いと思う。
- ・ 国試対策の際も国試さながらのテストの環境にして頂いたので当日あまり緊張することなく受験でき、合格させて頂けた。

(学修環境・設備に関して)

- ・ 学校以外の場所やいつもの教室以外での勉強は、新鮮に感じ意欲的に取り組むことができた。
- ・ スクーリングを地方会場で、受けることができた事は、時間、経済的にも助かったと同時に少人数で教職員から、細やかな指導を受ける事ができたと思う。
- ・ 授業がある日は食堂をいつも営業して欲しかった。

(教職員とのかかわりについて)

指導面：

- ・ レポートでわからない時は、CCN や電話で先生と話し、アドバイスを頂いたりスクーリングでも指導を頂いたことは、とても勉強になった。
- ・ 他校と比べレポート文字数の多さや難しさへの不満を感じた。しかし先生方はそのレポートを読み、わかりやすくポイントを色づけたしして長い文章で返答をして下さった。多くの生徒が居るなか、とても丁寧な返答に激励されて卒業できたと思う。
- ・ レポート添削を繰り返し行ったということが、自己の学びの自信になっている。
- ・ レポート添削も、納得、理解が得られる迄、何回も丁寧に指導して頂き、各教科とも満足のいく、レポート作成ができた。
- ・ 勉強のやり方が理解できずにいた時は先生に連絡をとり時間を作って頂き色々教えてもらってその帰り図書館で勉強し本を数冊借りて郵送にて返却していた。レポート添削でも理解しやすいように記入してあり、先生方の励ましの言葉が書かれていて落ち込んだ心に暖かさが伝わり涙した事もあった。

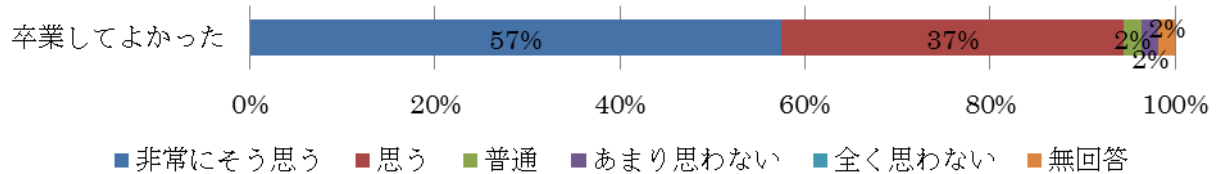
関わり：

- ・ 通信制とはいえ、困ったときや勉強に行きたいときにすぐ行ける場所だったから、全然孤独感がなかったのが良かった。
- ・ 先生方が授業の中で叱咤激励をしてくださる度に頑張る意欲がわいてきた。
- ・ 事務の方もとても親切に対応してくださり安心して相談することができた。
- ・ スクーリング授業では悩みを聞いて頂いたり、挫折しそうになった時の電話対応にも心温まる言葉やアドバイスがとても励みになった。
- ・ 学習相談の機会を設けて頂いた為卒業の道が開けた。
- ・ 大学教職員との関わりはスクーリングでしかなかったが、一生懸命教えて下さっているのは感じる事ができた。との距離があったため、教員との距離が遠くなかなか学習を修得することがきびしかった。

要望：

- ・ ほぼ1人での勉学で自分が頑張らないと何も動かない。もっと押ししてもらいたかった。

● 総合評価



B) 学生時代を振り返って総合的にお答えください。

肯定的にとらえている学生が90%以上でやや否定的にとらえている卒業生は2%であった。

自由記述内容を以下に示す。

- ・ レポートは大変しんどかったが、学んだ内容や合格した自信は勤務の中に活かされている。
- ・ 短期大学卒業の学位も取れたことで大学の編入、保健師などへの進学も考える方向性も持つことが出来ている。
- ・ 共にわかりあえる友人ができた。
- ・ 国家試験のみの学校でなく、看護とはどういうものであるかを学んだ。また、学校の勉強のみを行って行けば国家試験は合格できるのが、常盤の通信であると思う。
- ・ 看護職の尊さ、その職について看護を展開していく私たちが尊いということを教えて下さったことが誇りになって、仕事のモチベーションを下げることなく働くことができている。

3. 卒後評価を教育改善に活かすための取組みと考察

今回の卒業生からのアンケート調査結果を今後の教育に活かすために、H29年2月の課程会議において共有した。

昨年度の取り組みの評価

1. 国家試験対策委員との共有と活用

評価結果を基に、これまで継続している国家試験対策の内容を見直し今年度実施した。まず、入学式の日実施している学習説明会の中で国家試験対策を説明する際、国家試験対策を進めるための分かりやすい資料を配布し具体案を提示し1年生から取り組む必要性について示したり、過年度生に対しては国試対策スケジュールの提案等を行った。模試の実施も学生が参加しやすいように時間や日程の配慮を行った。来校の機会を生かして学習方法についても助言を行った。

2. アンケート結果の課程会議での報告と検討

1 昨年実施した「これまでの卒業生の動向についてのアンケート調査結果」をまとめて大学内のフォーラムで報告し、教育学会で発表した。

今年度の取り組み

1. 国家試験支援の継続

「国家試験に対する支援」を肯定的にとらえる学生が年々増えている結果から、これまで実施している支援内容を継続しつつ、実習終了後からまでの期間の使い方や地方の学生への支援策の検討、また、依然として教員による講義を希望している声があることから、スクーリングの中でできる国試対策の検討などを行っていく必要がある。

2. 学生へのかかわり方

教職員のかかわりに関しては例年以上に高い評価を得ている。これまで通り学生に関わるとともに、意識して学生個々に対して、肯定的な声かけを行い、学習へのモチベーションを継続させていくことが必要だと考える。

3. キャリアアップを目指す学生への支援

本課程卒業生は、働きながら学習しているという特性を持つため、キャリアアップへの思いは、様々である。年齢的なことや家庭環境によって進学こそ考えていないという声もあるが、本学を卒業したこと自体がキャリアアップであり、職場での立場が変わり研修にも参加できるようになり、今後変化していく可能性を秘めていると思われる前向きな意見がいくつか書かれていた。これまでも懸案事項であった、各種セミナーの紹介や卒後教育が可能かどうかについても具体的な内容の情報を得て検討していく必要があるかもしれない。

今回のアンケート結果に関しては、今後も協議を継続して教育改善に努めていきたいと考えている。

編集後記

おかげさまで平成 28 年度の年次報告書を刊行することができました。皆様方のご協力に心より感謝申し上げます。

年次報告書は、平成 25 年度分から大学ホームページ（HP）に掲載を始め、平成 27 年度分からは教員個人の活動報告も「年次報告書 分冊」として大学 HP に情報公開しています。

年次報告書は毎年実施する本学の自主的な自己点検・評価活動の記録です。1 年間の活動を年間活動報告として記録していくことは、内部質保証のための PDCA サイクルを適切に機能させるための第一歩です。

自己点検評価委員会は、平成 27 年度の活動方針を「大学の目的を達成するために組織を超えて点検・評価する体制を築く」とし、「学生の健康」に関することを採り上げ、複数の組織間での情報共有、活動内容の見直しと協力体制について意見交換の場を設けました。この試みをきっかけに、今後も組織の枠を超えて大学全体の課題や目標に対する取り組みの点検・評価体制の構築を目指します。

今後とも、自己点検・評価委員会の活動に対し、皆様のご協力をいただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成 29 年 6 月

自己点検・評価委員会 委員一同